

平成三十年度

海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール受講生作品集

潮音

～若人の樹～

鹿児島県立図書館

巻頭言

海音寺潮五郎は鹿児島県出身の偉大な作家であり、第三回直木賞受賞作家としても知られています。

数多くの優れた作品を残した海音寺潮五郎は、史伝作家の第一人者であり、特にNHK大河ドラマや映画化された「天と地と」の原作者としても有名です。

この海音寺潮五郎の文業をたたえ、功績を後代に伝えるとともに、本県文化振興のための学習機会を提供しようと、鹿児島県高等学校文化連盟の後援をいただき、本年度も当館では「海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール」を開催いたしました。

文芸ゼミナールでは、全八回にわたる講義・演習を通して、県内で活動なさっている作家の方から執筆活動の進め方を御教授いただき、受講生が作品の完成を目指してまいりました。また、第五回においては、作家の伊東潤先生から直接執筆の苦労や喜び等をお聞きし、受講者の更なる意欲につながる講座となりました。

現在、「論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、実社会における他者との多様な関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができる」(『高等学校学習指導要領解説 国語編』)ことが求められています。

当ゼミナールは、これらの能力や態度の育成に資するとともに、受講生が本格的に執筆活動について学ぶかけがえのない機会となったことと思います。

日々の学業や部活動を行いながら、受講生は真剣に執筆活動に取り組み、小説への思いを新たにしましたことでしょう。ここに掲載している十二の作品からも受講生が文章を練り上げる力を着実に身に付けている様子が伺え、大変うれしく思います。

最後になりましたが、当ゼミナールの実施に当たり、本年度も受講生を温かく作品完成へと導いてくださいました立石富男先生、出水沢藍子先生に心から感謝申し上げます。先生方に御指導いただきましたことは、受講生にとって貴重な財産として今後の生活の中に生かされることでしょう。さらに、受講生の執筆活動への一層の意欲化と、執筆活動への道を志す可能性も高めていただけたのではないかと思っております。

今後、この作品集『潮音 若人の樹』を読んだ県内の高校生が、一人でも多く小説を創作することの楽しさを感じ取り、興味を持つてくれることを願っています。

平成三十一年三月

鹿児島県立図書館長 原口 泉

目次

巻頭言

講師紹介

作品

夢からさめたら

僕の居場所

夢の見せ方と聡明な彼女

永遠を繋げ

ピオトープ

勿忘草

『R・I・P』

「天使と悪魔は紙一重」

幸運の鐘は今日も鳴る

さくら草が咲く頃に

蟹（キャンサー）

木工人形

講師からの一言

講座の様子

編集後記

県立明桜館高等学校	二年	宮下学葉	1
県立伊集院高等学校	一年	野上夏鈴	2
鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校	一年	千駄木梓	9
鹿児島市立鹿児島女子高等学校	二年	西遥華	18
鹿児島市立鹿児島女子高等学校	一年	有木友美	25
鹿児島市立鹿児島女子高等学校	一年	日向陽	37
鹿児島市立鹿児島女子高等学校	一年	甘屋魅斗	45
樟南高等学校	一年	升屋結女	54
鹿児島高等学校	二年	草野早紀	64
鹿児島高等学校	一年	海平颯太	77
志学館高等部	一年	内木場敬	86
日本航空高等学校	二年	南泰圭	91
講師からの一言		・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	113
講座の様子		・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	114
編集後記			

講師紹介

立石 富男 先生



枕崎市生まれ 鹿屋市在住
作家 文芸同人誌「火山地帯」主宰
九州芸術文学賞鹿児島地区選考委員

【文学賞】「記憶の翳」九州芸術祭文学賞鹿児島地区優秀賞

「うしろ姿」第十二回南日本文学賞 「知覧へ行く」労働者文学賞

「ソロモンの夏」第十五回自由都市文学賞

【著書】小説集『黄昏』掌編集『鳩を抱く』『島比呂志』『夢と思いと言葉』掌編集『モンブラン』小説集『石を持つ朝』ほか

出水 沢 藍子 先生



奄美大島生まれ 鹿児島市在住
作家 鹿児島市・薩摩川内市でエッセイ・小説教室主宰
小説春秋同人 二〇一三年から南日本新聞「文芸季評」担当
二〇一六年から南日本新春文芸審査委員

【文学賞】「グンセイフの夜」南日本文学賞「マブリの島」新日本文学賞

「御月待ち」「銀花（ぎふあ）」文学界同人誌奨励賞「環流」文学界同人誌優秀賞ほか

【著書】短編小説集『マブリの島』『銀花（ぎふあ）』共著『鹿児島の女性作家たち』歩き続けた画家、保忠蔵の足跡『何もいらぬ』シリーズ『奄美新時代の女性たち』ほか

【講演】「奄美と私と小説」「鹿児島ゆかりの女性作家たち」「内なる奄美を書く」「私を書く気にさせる作家たち」ほか

夢からさめたら

県立明桜館高等学校 二年

宮下学葉

今日もまた夢をみるのか。せめて、せめて別の夢がいい。そう思っていたのに。

「あれ、ここは」

またここか。心の中で、そう呟く。本棚、ティーテーブル以外何もない部屋。私の向かいには嫌いなやつ顔。

「またお前か。どうしてまた来てしまったのか」

私が聞きたいよ、クソジジイ。

私は奥村あお。あおって名は本名だから。

私はこの世界の勇者だ。といっても夢の世界だけだ。私は援護程度にしか動いていないから、感謝されると思わなくてすごくびっくりした。感謝されるって、すごく気分がいいことを、この時初めて知った。

しかし、所詮は夢。私の日常はあの夢のようにはいかなかった。まるでゲームの様な世界なんて、どこにも無かったのだ。

と思っていたのに。夢に出てくるのはゲームみたいな世界のクソジジイ。

「賢者に向かってジジイとな。少しは丸く収まったと思うたがのお」

本当に殺していいですかね。

「しかし、何でまたここに来たんじゃ」

本当。レムになるたびにアンタに会うなんてたまったもんじゃないよ。かと言って、ノンレムを続けるのも体に毒だし。

「あの後から、特に変化はないか」

うーん、変化って言う変化はないと思うけど。いつも通りの日常に戻っただけだし。

あれ、いつも通りの日常って、何だろう。

「奥村さん一家って暗いわね」

「夫妻は仲悪いらしいし、娘はボーツとしてキズだらけだし」

「あっ、こっち見た」

「睨んでるわね。引き上げましょうか」

そうか。私はまだ、ここにいたいから。日常生活の、現実の自分に戻りたくないからこの夢をみていたんだ。

「分かったようじゃな。今まで同じことを繰り返しとったんだぞ」

ああ、徐々に思い出してきた。私はまださめきっていない。悪夢から、自分の幻想から抜け出せていないんだ。

「出たいか。ここから」

うん。あの世界で、『踏み出す勇気』を持つことが大事だつて学んだばかりなのに。

「じゃあ、ゲートキーパーを頼るといい。出してくれるかもしれんぞ」

あのジジイ。ゲートキーパーおろか、ゲートすら見つからねーじゃんよ。しかも地図には場所とか地図記号じゃなくて、『恋は盲目、周りによく見る』

しか書いてねーし。ママのテキトーな地図の方がマシだよー。

それにしても、ここって無法地帯なのかな。妖精やら、悪霊やらがうじゃうじゃいる。

「えつと高速ショットはキャンサーショットで、集中ショットはキャンサースナイプか」

高速ショットとは、霊力を消費しなくても使える弾幕、集中ショットは霊力を消費して集中攻撃する弾幕だ。妖精や悪霊をはらうには、弾幕で攻撃しなければならぬ。さらに厄介なのは、うじゃうじゃいるやつらも攻撃してくること。当たれば死ぬ、生きるならやつらに対抗しなければならぬ。

私の装備はセーラー服、履き慣れた学校用の運動靴、大きな髪止め、そして星の指輪。

星の指輪は、私を助けてくれた道具だ。計算能力が上がり、正しい道を教えてくれる力がある。『導きの星』（スターパレ

ード）としての役割を果たすための大事な道具でもあった。

しかし、今はその指輪も黒く変色している。紫色に光る霊石も濁っていて、綺麗とは言えなかった。人差し指にもはまらず、今はセーラー服のポケットに入っている。私の指でそんなに輝いていたのに。

と、そんなつまらないことを考えていたらいつの間にか妖精はいなくなっていた。ライフは、最大の五つになっていてスペシャル技も三回使えるようになった。どうやら、ここら一带を一掃したらしい。殺風景になった森はどこか哀愁を感じる。

「で、ゲートはどこにあるのかな。地図は頼りにならないし、この森何もないし」

そう呟いた時だった。

『恋は盲目、周りによく見る。忘れたのか』

う、うわー。あいつの声が脳内に響いている。頭がおかしくなる、やめるー。

あ、周りを見るってもしかして、ここをよく探せてことかな。でも、本当に殺風景だし目印すらない、あれ。

『ゲートキーパーの家この先六百メートル』

えー。なんでこんな所に看板が。しかもボロいし小さいし。

まあ、見つかったからいいや。先を急がなきゃ。私は、早足で歩き進める。こう見えて、素早さには自信がある。

うーん。六百メートルって結構長いのかな。家らしき建物は見つからないな。

「裏道をよく見つけたね」

え、誰。とうか、裏道って。

「裏の道だよ、裏の道。普通に真つすぐ行けば良かったのにー」

何者か、って質問には答えないんだね。この世界の人、やっぱどこか変だ。

「奥村あおちゃん、だね。私は古川ナナ。話は、あの人から聞いてるよ」

あの人って、ジジイのことか。

「もしかして、あなたがゲートキーパー」

「そうそう、当たり前ー。この世界の支柱、ゲートキーパーの古川ナナ様だぞー」

なんか、偉そうにしてるけど偉そうに見えない。いや、失礼なのは分かっているけども。

「この夢から出たいって聞いたけど、本当に出たいの」

当たり前だよ。探しに来た意味ないじゃん。

「普通は自力で出るもんなんだよ」

「出られなくて困ってたの。繰り返しされる悪夢はもう沢山なの。二度とあのクソジジイとは会いたくないの」

「へ、へえー。そうなんだ」

さすがに強く言い過ぎたかな。若干引いてるよね。

「意志が強いことは良いことだよ。さて、出るためのテスト『弾幕五本勝負』をします」

弾幕勝負って。弾幕戦争はやったけど。弾幕戦争とは、相

手が展開した攻撃や技を避けながら相手の体力やライフを減らす戦争のこと。負けると瀕死になり、動けなくなる。

「弾幕勝負はどちらかが被弾するまで弾幕を出し続けるサドンデスゲームだよ」

お互いスペシャル技を出して被弾させた方に一本、最終的に三本取れば勝ち、という流れなのかな。

「おー。飲み込み早い。じゃあ早速やろう」

うーん、スペシャル技三回しか撃てないな。タイミングが重要なのかも。

「制限時間なし。では、用意始め」

お互い弾幕を展開する、と同時に妖精達も出てきた。弾幕勝負では、妖精などのお邪魔キャラが出てくるらしい。

「おおっと。スナイパー銃か。危ないなあ」

そう言っている古川さんの弾幕もかなり危険だ。突然星が降ってくるし、時間の経過で星が大きくなるし。

「じゃあ、仕掛けるよー」

仕掛けると言うことは、まさか。

『星符・ブリーブラプソデイス』

また、星かよ。って思ったけど違った。魚のウロコのような弾が海を泳いでいるように見える。詠唱されてもお、邪魔な奴らが攻撃してくる。反撃する暇がない。

「あれー。そこでもいいのかな」

あっ。いつの間に壁に追いつめられて、痛い。

「やったー。まずは一本」

あー、避けきれなかった。悔しいよ。でも次は負けないぞ。
「よしよし。では二本目、いくよ」

二本目も妖精の攻撃が激しく、さっきと同じスペシャルを使っ
て来たが、自分の陣地にあった弾幕すべてを古川さん側に流して一勝。

続く三本目は新たなお邪魔キャラ『ハトっこ』が出てきた。
どうやら、前にスルーした時のことを根に持っていたらしく、私に集中攻撃をしてきた。そこを逆手に取り、ナナさんは確実に被弾する場所に星を降らせた。私は星が降っていることに気づかず被弾した。

二対一でピンチになってしまった私。四本目で勝たないと勝負に負けてしまう。

「ふー。三戦連続はきついね。少し休みますか」

「はあ、はあ。どうにかペースを戻さない」と。

でも、どうすれば。あの人、見た目と中身はふわふわしてるけど、使ってる弾幕はえげつないし。あー、策が出てこない。
「そう言えばさ、裏道の看板どうやって見つけたの」

「えっと、ショットガンで無双してたら見つけました。そしてらジジイの声が」

「つまり、敵のいない静かな時に見つけたのね」

「割愛された。まあ、いいか。だいたいそんな感じだし。」

「裏道を見つけてる子って、なかなかいないよ。あおちゃんすごいよ。強い『視る』力があるのね」

「生まれてきてそんなに経ってませんが、こんな力持っていていい事なんて一つもありませんでしたよ」

普通の人間なら必要ない力だもん。

「必要ない、か。確かに、『視る』必要ないものも沢山あるしね」

「なんで、こんな話を。」

「いや、ちよつとね。ふふ」

「なんだ、そのニヤニヤは。すっごくムカつく。」

「いやー使い方を知らないなんて、『視る』力のルーツを知らないなんて。あんたの親って、霊感ってやつを信じないタイプなの」

「アンタなんかには、わかるもんか。私の気持ちだ。今まで生き地獄だったことが。」

「どうやら、何かありそう。詳しく話して」

「あ、あそこに幽霊が。亜美ちゃん助けて」

「もう、幽霊なんていないでしょ。しっかりしなさいよロクデナシ」

父は霊感がないくせに霊が見えるって大嘘ついてるロクデナシ、母は見えている世界が全てだと思ってる傲慢な女だった。

生まれた時はどうだったか忘れたけど、私は二歳頃から霊やそれに近いものが視えていた。家の中まで入ってきた霊や仕事帰りについてきたものに話しかけては、家から出てもら

った。まあ、説得みたいな感じかな。友達もいなかった（外で遊ばせてくれなかった）。私は霊の相手をしていたおかげでコミュ症にはならず済んだ。

そんな中、事件は起きた。つい最近のことだ。父のロクデナシっぷりにとうとう母が痺れを切らし、離婚を言い放ったのだ。慰謝料は父が払うことで解決したが、問題になったのは私の親権についてだ。父の主張は慰謝料払うから娘の親権は譲れ、母の主張は娘は私が育てるから養育費を出せ、ということだった。私のような不良娘（指導室常連）を育てたいなんて母が思うはずがない。私をエリートにしたいらしいが、私には育児放棄して親戚の誰かに引き取られる未来が見える。一方で父について行くか、って言われると『ノー』と即答するかもしれない。父は近年まれに見る勘違い野郎で、面倒事は人に押しつけるクズだった。この男についての説明はこれだけで十分だと私は思う。

私は双方ともに、親権を放棄してほしい。もうあの二人とは関わりたくないんだ。でもどうすればいいのかな。

「そっか。恵まれなかったのね」

って、あれ。私、いつの間にこんな話を。

「大変だったねとしか言えないわね。あなたはどっちにもついて行きたくないのよね」

うん。親として見てないし。

「あなたがしたいようにすればいい。後悔しないようにする

にはね、自分の意志を持つことが大事なの。それが」

『踏み出す勇氣』になるんだ。

「ふふ。踏み出す勇氣を学んだって、言ったでしょ。踏み出すためには、意志を固めないよ」

私、初対面の人にこれからの人生を相談したの、初めて。なんか、気が楽になった。

「そうだよ。誰かに話すだけで気持ちになることもあるんだよ。さて、そろそろね」

彼女がそう呟いて指を鳴らす。すると木の扉が目の前に現れた。ポロポロだけどなんだか温かみがある。

「さあ、いっておいで。私は、ここであなたを見守っているから」

踏み出す勇氣、後悔しないための選択、そして自分は何がしたいか。

「ママ、こんな大きいのがいたよ」

「あらあら。追いはらったの」

「ううん。話したら勝手に出ていった」

「シャイかもしれないわね。その子」

「私の、選びたい道は。歩きたい未来は」

私は勢いよく扉を開けた。扉の向こうは輝いている。でも不思議。私の目は普通に開いている。夢からさめたら何をしよう。今更かもしれないけど友達ができるかな。あとママに

美容院に行きたいって言わなきゃ。ざんばらな髪を整えても
らおう。前髪はアシンメトリーでよく注意されてたし。短く
なるけど、そのうちのびるし。あと新しい服が欲しい。かわ
い服もかっこいい服も着たいな。

「終わったようだな」

「おかげ様で。報酬は高くつくわよ」

「わかっておる」

「そう言えば何かしたの。あの子、すごくアンタに怒ってた
けど」

「あー。あやつは、わしの人形じゃよ。わしの望み通りに動
いてくれる。まさしく人形だろう」

やめるサディスト。あとロリコン。意図せずそうなったと
してもその発言はやめる。

「なんか隣にいるのが犯罪者の様な気が」

「ふふ。この無法地帯に法も罰もあるまい」

だとしても問題発言なんだよ、わきまえろ。何百年も生き
てるんだからそれぐらいわかるでしょ。全く、このジジイは。

「さあて、この先どうなるかの」

少なくとも、今苦しいのを乗り越えれば、あの子にも幸せ
が訪れる。きっと、きっと。

夢からさめた私は、自分の意思を一番信頼できる叔母に伝
えた。叔母の対応は迅速で、凄いの一言だった。結局、父と

母は離婚して私は養子縁組で叔母の子になった。本当に、マ
マの子供になれたんだ。

ママは私のやりたいことを沢山叶えてくれた。美容院のシ
ャンプーで髪もツヤツヤ、上手く切れない前髪も整えてくれ
た。服をほとんど持ってなかった私を「ひまらや」に連れて
行き、好きな服をいっぱい持ってきていいよ、と言ってくれ
た。服屋さんでどれを買おうか迷う、というのは初めて。と
っても楽しかった。会計に行こうとしたところ、大きなリボ
ンに目が止まった。

「欲しいの」

うなずくと、追加でそれまで買ってくれた。大きくて、桜
柄がついたビビットピンクのリボン。

「それが、このリボンなんだよ」

一つに束ねた髪を指す。四年後の私はこの話を友達にして
いた。

「へえー。あーちゃんにそんな過去が」

「交友関係はどうなったのですか」

友達も沢山できたよ。不良っぽかったからあまり話しかけ
られなかっただけで。ママに引き取られてすごく変わったか
らビックリしてたよ。今も連絡を取ってる子が何人かいるの。
中学校楽しかった。

「人間って、変わるのね」

みのうちの言う通りだ。昔の私のような子も、きっと変わ

ることができる。

踏み出す勇気を、自分の意志を、後悔しないための選択を、どれか一つでいい、持っていればなにかしらのきっかけはあるから。

幸せになれるきっかけが。

これで私の昔話は終わり。え、今いくつなのって。今の私は高校二年生、十七歳だよ。

ママやパパ、お兄ちゃんは私を本当の家族みたいに接してくれた。お兄ちゃんはシスコン呼ばわりされてた。シスコンって何だろう。

高校に入った今でも、幽霊が視えるの。でも、対応できる手段が分かって解決しやすくなったよ。詳しい人や神格を持つ人たちに会って、私は本当に不思議な生活をしている。

そして神格を持つ人たちの一人が預言を出した。それは、「来年、町が一つになる」

というものだった。今はこの意味は分からない。そのうち分かるかもしれない。でも来年受験だから事件は起きて欲しくないかも。

それでは最後に。私はこれを読んでくれた皆さんに、こんな質問をしたい。

あなたは、夢からさめましたか。

いろんな答えがあると思う。その答えは、心の中にある。

自分が納得できるベストな選択を、自分の意志を、そして

踏み出す勇気を、どれか一つでも持って大切にしてほしい。

私は、ここまで歩いてこられた。今度は、私が道を示す番。『導きの星』としてね。

もちろん、私の人生はまだまだ十数年しか経っていない。幽霊たちの起こす怪奇事件や学校の七不思議。進路やテストなど、本当に忙しいけれどこれからも頑張ります。

ここまで読んでくれてありがとう。また、どこかで。

二〇一九年 九月二十五日 奥村あお

僕の居場所

県立伊集院高等学校 一年

野上夏鈴

「頑張ったわね」

そんな風に言われた気がして、後ろを振り返った。でも、ただ母が見つめているだけだった。その視線を避けるようにして部屋への階段を上った。部屋に入った僕は、思わず重いため息をついた。なんでいつも自分だけがという気持ちと同時に、いつものことじゃないかという諦めの気持ちが心の中心を埋め尽くした。

高校に入って約半年が過ぎ、最近あった期末考査の結果が返されたので母に見せたら、

「しっかりと勉強しなかったから下がったのよ。裕はあんなにできるのに何であなたはできないの。次はちゃんとしなさい」

と言われた。一つ下の弟の裕は僕よりも頭がいい。定期テストでも実力テストでも百人いる三年生の中で常にトップポジションにいる。だから、母はいつも僕と裕を比べて裕ばかりを褒める。僕は、中学二年生の頃からあまり成績で母に褒められなくなった。その代わりにずっと怒られていた。これ以上考えても何も変わらないと思ったので眠りについた。

二学期が始まって、いつものように席に着いてお気に入りの小説を読み始める。小さい頃から本を読むのが好きだった。今も文芸部に入って、本を読んだり気が向いた時に小説を書いたりしている。丁度いい場面になったところで、

「ねえ、何読んでるの」

と遙が話しかけてきた。彼女は緊張することなく話せる数少ない友人の一人である。

「太宰治の人間失格」

「翼って本当に好きだよね、太宰治」

「まあそうだけど」

「これ以上邪魔するのも悪いし、また後でね」

「うん、また後で」

活発そうに見える彼女もまた、文芸部の一員である。僕はまた本に視線を戻そうとして、授業の予鈴が鳴ったので本を机の中に入れた。退屈な授業も終わったので、足早に図書館に向かった。図書館に着いたら、いつもの席が空いているのを確認する、これはもう習慣になっていた。空いていたので、そこに座り、続きを読み始める。少し遅れて遙や他の部員がやってきて、各々好きな席に座り本を読んだり、小説を書き始めたりする。いつもこんな風に活動している。ちらりと時計を見ると下校時刻五分前になっていた。他の部員も気付いたらしく帰り準備を始めていた。本を鞆の中にしまい、他の部員よりも少し早く図書館を出て帰宅した。今日は、夏休み

の終わりに行われた実力考査の結果が返ってきたことを思い出し、結果を持ってリビングに向かった。リビングへのドアを開けた瞬間、母と裕の会話が聞こえたので足を止めた。

「裕、今回のテストどうだったの」

「点数は四百五十六点で、全体もクラスも三番だったよ」

「頑張ったわね、裕」

「うん、ありがとう母さん」

会話を聞いていて、心が軋むような音が聞こえた気がした。自分には向けられることのない、優しく温かい笑顔。その笑顔が向けられていたのは、中学一年生までだったと思う。僕の横を裕が通り過ぎて行く。母のもとに行くのが一瞬間になるが、行かなければまた怒られるので母のもとへ向かう。

「今日、実力考査の結果が返ってきた」

「ふうん、それで」

「はい」

「また落ちたの」

「少ししか落ちてない」

「これのどこが少しよ」

「じつ、自分なりに頑張ったんだ」

「でも結果には表れてないじゃない」

「だってそれっ……」

途中で途切れたのは母から頬を叩かれたからだ。

「何度言ったら気が済むの翼は。なんで成績が上がらないか分かる？」

「……」

「それはね、あなたが勉強しないからよ」

「してる」

「あなたが思っているよりも勉強しないと、上がらないわよ」

「はい」

「次は、上げられるように努力しなさい」

「はい」

そう言って、リビングを出た。真っ直ぐに自分の部屋へ向かい、ドアを閉めた。机の引き出しを開け、カッターを取り出し、左手首に当て軽く切った。何の迷いもなく。それが出来たのは去年何回か同じことをしたことがあったからだ。塾に通っていたとき母から、

「いくらお金がかかると思ってるの、ちゃんとしなさい」

と言われ続けそんな母からのプレッシャーに耐え兼ねて、手首を切るという手段をとった。今はもう薄くはなっているが跡が残っている。うっすらと血が滲みだした。少し痛みを感じたがもう慣れていたので気にしない。とりあえず大きめの絆創膏を貼っておく。こういうことを通して生きていることを実感するのかもしれない。カッターを引き出しにしまい宿題に取り掛かる。ある程度終わらせたとこで、ドアを叩く音がした。ドアを開けると裕が立っていた。

「何」

「母さんが夕飯できたから降りてきなさいってさ」

「分かった、ありがとう」

「うん」

階段を降りると、もう準備ができていた。家族で、

「いただきます」

と言つて食べ始める。今日は、カレーとサラダだ。母の料理は美味しいし、好きだ。

「翼、成績は返ってきたのか」

「うん」

「どうだったんだ」

「少し下がった」

「そうか、自分なりのベストはつくせたのか」

「うん」

「俺はそうだったのであればいいと思う。次も頑張れ」

「うん、ありがとう」

「ちよつと、あなた優しすぎじゃない」

「そういう君は厳しすぎじゃないか」

「ちゃんとやらない翼が悪いのよ」

「翼は翼なりに頑張ったと思うぞ、ずっと上がり続けるなんて

そうそう出来ることじゃないだろう」

「それは……」

「もう僕のことではけんかしないで」

「翼」

「僕が頑張らなかつたのが悪いんだ。次は頑張るから。ごち

そうさま」

「兄さん」

裕の眩きには聞こえないふりをして、部屋へ戻った。残りの宿題に取り掛かり、終わったところで時計を見ると二十三日になった。お風呂に入ってすぐに寝た。

いつもどおりに学校に行つて、放課後誰よりも早く図書館に行き、書きかけの小説を書いていると顧問の先生が僕のほうに来た。

「なあ、今書いてる小説、コンクールに出してみないか」

「えっ、なんで僕を」

「俺は内容も含めて言っているんだけどな」

「ええ……」

「いいと思うよ」

と急に会話に入ってきたのは遙だ。いつ来たのだろうか。

「何で」

「翼の小説って、大切なことを教えてくれると思うんだ」

「えっ」

「例えば、相手を否定ばかりするんじゃないかって認めてあげる

ことの大事さとか」

「ほら遙もこう言っているし、やってみないか」

「やってみます」

「おっ、そうか ある程度書き終えたら持って来るんだぞ」

「分かりました」

元々、いつか何かのコンクールに出してみたいとは思っていたが、こんなに早くできるとは思わなかった。少し嬉しい。ちよつとだけ気持ちが明るくなった気がした。そんな気持ち

に浸りながら、続きを書き始めた。夢中で書き進めていると、

「翼、後五分で下校時間だよ」

と遙に話しかけられた。

「えっ、もうそんな時間」

「うわぁ翼らしくない」

「集中すると、たまに時間忘れるんだ」

「へえ、翼にそんな意外な一面が」

「何でそんな驚いた顔してるの」

「翼って、時間とかきっちり守るタイプだと思ってたから」

「普段はそうだけど」

「やっぱり」

話している間に帰り準備を済ませた僕は、

「じゃあね」

と言って、図書館を出ようとした。すると後ろから、

「バイバイ」

と聞こえたので振り返ると、遙が手を振っていた。手を振り返して図書館を出た。

家に帰り、ドアを開けると裕がいた。

「お帰り」

「ただいま」

「母さんと父さんは」

「母さんは夕飯作ってる。父さんはテレビ見てるよ」

「分かった。部屋で宿題してるから、夕飯できたら呼びに来て」

「分かったよ、兄さん」

裕はリビングへ、僕は自分の部屋へ行った。ドアを閉めて、宿題に取り掛かる。今日は金曜日なので、たくさんする必要はない。国語の文章問題を解いているとドアをノックする音が聞こえた。ドアを開けると裕が立っていた。

「夕飯できたってさ」

「分かった」

と言うと裕はリビングに降りて行った。僕も電気を消してリビングへと向かった。もう準備はできていて、僕も椅子に座った。いつもどおりに家族で、

「いただきます」

と言ってみんなで食べ始めた。

「裕、今日何か学校で嬉しかったことはあったか」

「えっとね、昼休みに図書館に行ったらまたまた借りたい本があつてね。ようやく借りれたんだよ」

「おお、良かったな」

「うん」

「翼は何かあったのか」

「いや、特には」

「そうか、明日は何かあるといいな」

「うん、そうだね」

「裕、早く人參食べなさい」

「ええ……」

「そんなこと言わないの」

「はい」

そんなやり取りを横目に、

「ごちそうさまでした」

と言って食器をキッチンに持って行く。自分の部屋に戻って、解きかけの問題集に取り掛かる。ちようど、今日やろうと決めていた分が終わったので時計に目をやると、二十二時半になろうとしていた。机の電気を消して、風呂場に行った。ゆっくりと浸かって疲れをとる。髪を乾かして、ベッドに入るとすぐに眠気がやって来た。その心地良い眠気にまかせて、眠りについた。

目を覚ますと、五時半だった。平日は、いつもこの時間に起きるのだが今日は休日なのであと一時間眠ることにする。

次に目を覚ますと、六時三十五分だった。別に、五分過ぎたぐらいどうってことはない。そんなことを思いながらリビングへ行くと、父がいた。母と裕はまだ寝ているのだろう。

父は、新聞を読んでいた。

「おはよう」

「おお、おはよう」

「今日は何かする事があるのか」

「宿題ぐらい」

「そうか、それならゲーセンにでも行くか」

「えっ、なんで」

「ちよつと気晴らしにでもどうかと思ってな」

「母さんがなんて言うか」

「出かけて来るとでも言うっておけばいいだろう」

「でも」

「翼だって、色々とストレスが溜まってるんじゃないのか」

「まあそうだけど」

「どうする」

「行く」

「あつ、でも裕は」

「たまには二人きりでもいいだろう」

「たまにはね」

「九時でもいいか」

「うん」

まさか父のほうから誘ってくるとは思わなかった。そう言えば小学生の頃は、僕も裕も休日になると、よくゲーセンに連れて行ってもらった。父がゲーム好きなのが影響してか、兄弟二人して無類のゲーム好きとなった。母は、ゲームが嫌いなためあまりいい顔をしなかったが、何故か駄目だとは言わなかったのだ。そんなことを思い出して、また父と行けることにわくわくした。すぐに部屋に戻り所持金を確認する。三千円だった。使うのは千円にしようと思い、残りの二千元は使わなくなった別の財布に入れた。ある程度宿題を終わらせておこうと思い、取り掛かった。きりのいいところまで終わったので、時計を見ると八時半になっていた。外出用の服に着替えてリビングに行くと、母と裕、父がいた。

「そんな服装をして、どこか行くの」

素直にゲーセンに行くと言っていいものか迷っていると、

「ちよつと翼と出かけて来る。夕飯までには帰って来る」

と父が言った。

「そう、くれぐれもお金の使い過ぎには気を付けてね」

「分かった。翼行くぞ」

「うん、行ってきます」

「行ってらっしゃい、兄さん」

返事をしてくれたのは裕だけだった。少し胸がズキツとした気がしたが、いつものことだ、気にすることは無いと言いついて聞かせて家を出た。父が向かったのはちよつと遠くにあるゲーセンだった。

「いくら持って来たんだ」

「千円」

「そうか、まあ大丈夫だとは思いますが足りなくなったら言うんだぞ」

「うん」

そして、それぞれしたいゲームのところに行った。ここはメダルゲームらしい。百円で二十枚とメダル交換機に書いてあったので、千円札を両替しに行った。昼食はフードコートにあったファストフード店ですませた。自分の分を払おうとしたら、いいと言って父が払ってくれた。その後も少しメダルが残っていたので使い切ってからゲーセンを出た。家に帰り着いてドアを開けると、ちよつどりビングへ行こうとしている裕がいた。

「お帰り、兄さん、父さん」

「ただいま」

「おお、ただいま」

と言って、父はリビングへ僕は自室へ行った。机に向かい、宿題をする。ちよつど全体の半分ほど終わったときに裕が、

「夕飯できたよ」

と呼びに来たのでリビングに向かう。そしていつものように、

「いただきます」

と言って食べ始めた。

「父さんと兄さんは、どこに行ったの」

「少し遠くにあるゲーセンだ」

「えっ、いいなあ」

「裕は受験が終わったらな」

「うん、もちろん兄さんもね」

「えっ、うん」

「良かった、絶対だよ」

「分かった」

「裕、受験が終わって行くのはいいけど、くれぐれもお金の使いすぎには気を付けるのよ」

「分かってるよ、母さん」

「そう、ならいいけど」

「ごちそうさま」

と言って、食器をキッチンに持って行ってから自分の部屋

に行った。小説をきりのいいところまで書いて、お風呂に入
って、寝た。

次の日目が覚めると、七時だった。リビングに行く、す
でに朝食ができていた。僕の分しか無かったので、父に聞く
と、

「翼以外はもう食べたぞ」

と言われた。そうなんだと思いつつ、朝食を食べる。美味
しい。

「母さんと裕は」

「母さんは仕事、裕は部活行ってから塾行ってたぞ」

「分かった、ありがとう」

食べ終わったのでキッチンに持って行き、洗っていつも食
器を置くところに置いておく。午前中は、ずっと小説を書い
ていた。

昼食を父と食べ、その後も二時間ほど書いて終わらせた。
誤字脱字が無いかを確認して、宿題に取り掛かる。金曜日と
土曜日に結構済ませていたので、一時間半ほどで終わった。
特にすることもないので、本を読んだり絵を描いたりした。
リビングに行くと父がいた。もう仕事が終わっているはずの
母がいないので、

「あれっ、母さんは」

と聞くと、

「ああ、母さんなら仕事が終わったらそのまま裕を迎えに行
くって言ってたぞ」

「そうなんだ」

ドアを開ける音が聞こえたので振り返ると、裕と母がいた。

「お帰り」

「ただいま、兄さん」

「塾お疲れ様」

「ありがとう」

「じゃあ、僕は部屋に行ってるから夕飯できたら呼んで」

「うん、分かった、」

裕の返事を聞いて、自分の部屋に行く。でも、やることが
ない。宿題は終わったし、小説も書いた。夕飯まで時間はあ
るから、少し眠ることに……。

「おーい兄さん、夕飯できたよ」

という裕の声で目を覚ました。

「うん、分かった」

と答えてリビングに向かう。あの後本当に眠ってしまった
みたいだ。机に突っ伏して寝ていたせいか少し体が痛い。僕
も椅子に座り家族で、

「いただきます」

と言って食べ始める。

「今塾では何をしているんだ」

「えっとね、入試の過去問の載った問題集解いてるよ」

「おお、そうなのか。難しいのか」

「基本的な問題はできるけど応用が少しね」

「応用もできるように、頑張れよ」

「うん、ありがとう」

「裕って、何の教科が苦手なの」

「数学」

「難しいよね」

「うん」

今日はみんな食べ終わるタイミングが同じだったのでみんな、
「ごちそうさまでした」

と言った。それぞれ自分の食器をキッチンに持って行く。

いつもなら自室に行くが、今日は風呂場へ直行する。体や髪をしっかりと洗い、ゆっくり浸かる。気持ちいい。上がって、髪を乾かしベットへ向かい、そのまま眠りについた。

五時半に目を覚ました僕は、学校の準備をしてからリビングに向かう。しっかりと朝食を取って学校へ行く。いつもどおりに授業を受けて、放課後になると書き上げた小説を持って職員室へ向かった。職員室には顧問の先生がいた。

「先生、書き上げたので持って来ました」

「おお、できたか」

と言った先生は、原稿に目を通して様々なアドバイスをしてくれた。

「明日推敲をして、部活の時にまた読んでもらってもいいですか」

「分かった、楽しみにしとくよ」

「頑張ります」

と言って職員室を出る。足早に図書館に行くと言っていた。

「やつほー 珍しいね、私の後に翼が来るなんて」

「確かにそうだね」

「どっか行ってたの」

「職員室」

「ああ、小説、先生に持って行ったんだ」

「そう」

「賞に入ったらいいね」

「そんな大げさな」

「大丈夫だって、翼の小説なら」

「ありがとう」

いつものように本を読んで部活を終え、家に帰り家族で夕飯を食べる。宿題を済ませ、風呂に入り寝た。

次の日の部活で推敲を終えた小説をもう一回読んでもらった。

「さらに良くなってる。明日コンクールに出しとくからな」

と先生が嬉しそうに言った。

それから二か月ほど経ったある日、

「翼、やったな。お前の小説、優秀賞に選ばれたぞ」

と顧問の先生が部活の時に笑顔で言った。

「えっ」

と呟いた口が少しの間塞がらなかった。

「翼、おめでとう」

と遙や他の部員が言ってくれた。凄く嬉しかった。

次の日の全校朝会で表彰され、クラスメイトからも、

「おめでとう」

「すげー」

と言われた。

家に帰り、自分の部屋に居ると、

「どうしたの兄さん、そんな嬉しそうな顔して」

「うわっ、なんだ裕か」

顔に出ていたらしい。ああ恥ずかしい。

「この前僕の小説をコンクールに出したんだけど」

「うん」

「そのコンクールで優秀賞取ったんだ」

「凄いじゃん、父さんと母さんに伝えて来る」

「えっ、ちよっ裕」

という僕の声は聞こえていなかったのか、行ってしまった。

はあとため息をつき、賞状と原稿を持ってリビングに行く。

「翼、あなた賞取ったの」

「うん」

「見せて」

「はい」

と言って、賞状と原稿を渡す。母は賞状を見た後に、原稿を読み始めた。しばらくして、

「なかなか面白いじゃない、頑張ったわね翼」

と言った。しかも、裕にしか向けられていなかった、僕が中一の時から向けられることのなかったあの優しい笑顔で。

「うん」

と泣き笑いのような顔で言った。それしか言えなかった。だって凄く嬉しかったから。

それから、母が僕に怒ることは少なくなった。むしろ、褒められることが増えた気がする。ふと、僕にはちゃんと居場所があったんだと思った。これから、自分の居場所が無くなってしまふときがあるかもしれない。でも、勝手に自分には居場所が無いと思いつくのはやめようと思う。自分から見つけに行くように、つくるようにしよう。そしたら、少しでも笑顔で毎日を楽しく生きられると今なら素直に思えるから。

夢の見せ方と聡明な彼女

鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校 一年

千駄木 梓

カーテンの隙間からまだ本調子でない太陽の光が差し込む。私の体はそれを目敏く察知して薄く瞼を開けた。

夢を見ていた。

多分昨日の帰り道。テスト明けの学校にはどことなく弛緩した空気が流れていた。私は先生と世間話をして、校門を定時より少し遅れて出た。今日の帰りは一人かと思っていたら後ろから声がした。

「穂希は今から帰りですか？ 一緒に帰ろう。穂希もこんな遅くまで学校にいたんだ」

「なんだ。お前もう先に帰ったと思った。テスト終わってすぐクラス寄ってもいなかったし」

これ幸い。せっかくだから二人と帰ろう。私は両隣を二人に挟まれた。

「千里！ 君なら待っていてくれると思った！ 一緒に帰ろう。今日も千里が可愛いからセカイは平和だよ！」

そういつて千里に抱き付く。すると反対側から声があがる。

「え。俺は無視？ 穂希さーん？」

「気づいてる気づいてる。視界の端には入ってるよ」
そう言って私はいっつをあしらった。今度は千里が話し始める。

「今回のテスト、手ごたえはどうですか？」

彼女はマイクを向ける真似をする。

「まあいつも通りかな。良くもなく……悪くもなく……。可もなく……不可もなく」

「お前の悪いって俺らにとって全然悪くないし。ほんとに何なのこいつって感じ」

そう言っつて悪態をつかれる。

「そういうあんたは出来たの」

「生物と化学は。まあ穂希にはかなわないけど」

「もちろん。私に勝とうなんざ三百年早い。他の科目はどうだったの」

「……まあ。いつも通り」

こいつは科学以外の科目は壊滅的なのである。

「なんか、聞いてごめん」

「そう言うから傷つくんだ」

そう言われて頭にチョップが降ってきた。そんなに痛くないけれど……。

「うわっ。千里、あいつ人のこと殴りやがった。絶対あいつに近づくな」

「もう。長谷君ダメだよ。そんなことしたら私より成績いいんだから、もっと自信持たなきゃ」

「じゃあ千里、どんな感じだったか教えなさい」

「えっと、こんなこと言ったけど本当は今回、出来たんだよね。」

目標には届きそうだよ」

「目標って」

「めざせ200番台」

ちよっと待て千里。できないのは知っていたけど、この学校一学年200人とちよっとしかいないぞ。

「……」

「……」

「まあ終わったテストを振りかえってもしょうがないよ。もう終わったことだし。変えられないことを振り返ってもしょうがない」

「そうだよ穂希。毎日楽しく生きなきゃ。せつかくテストも終わったんだし次の予定でも立てようよ」

「そうさそうさ。穂希はどこか行きたいところあるか？」

「そうやって私に意見を求めてくる。」

「そうだな。私は別に特に行きたいところとかはないけど」

「でも、穂希ってテスト前あの人新刊出したんだとか騒いでいたのはいいの？」

「そう千里に聞かれる。」

「ああ、それね」

「そう言ってあいつの方を見やる。あいつはにやっと笑って言った。」

「これから連れてくの、俺が。テストでいい点を取った穂希の

お疲れ様会もかねて」

実はそうなのだ。テスト明けになると私の手応え次第でどこか荷物持ちや話し相手になるために私の用事についてきてくれる。この前はゲーセンに連れて行ってもらった。

「そういうことだから新刊の件は間に合ってるんだよね」

「長谷君ばかりずるいよ。私も穂希とお出かけしたいのに」

* * *

こんな夢……だったと思う。でも昨日の帰り道のことを思い出せない。千里たちと帰ったのは確か。でもきつと夢と現実が混ざっている。確かテストの話ばかりじゃなくて、今度遊びに行こうとか、ラノベの新刊が出たとか。私に読ませろとか。そんな話も沢山していたような気がする。そしてあいつが私にあってんなにまで優しいことなんてこれまでなかった。それが昨日の帰り道じゃないって言う私の推測の根本だ。まあとにかく学校に行く準備をしないと遅刻する。そう思ったってベッドから起き上がった。太陽はいつもよりまぶしく差し込んでいる気がした。

いつもの待ち合わせ場所には二人はいなかった。時計を見ると、約束の時間より数分遅れている。朝、支度に時間をかけてしまった私が悪いのだけれど、少しむくれて小石をかけた。そのまま一人で学校まで歩く。着いた時間はいつもより少し遅いくらい。二人はきつと連れ立って登校したんだろう。それにしても昨日の帰り道は何を話したんだっけ。本当に思い出せないな。そんなことをつらつらと考えつつ昇降口でローファアを履

き替えた。

騒がしい教室の引き戸を開けると千里を見つけた。声をかけられる。

「穂希。おはよう」

「おはよ千里」

「今日は寝坊でしたか。今日長谷君と先に学校に行っちゃってごめんね。長谷君、穂希は寝坊するときはとことん寝坊するって言っていたから先に行ってしまった」

顔の前で手を合わせる千里。そのしぐさはとても彼女らしい振る舞いだった。

「いや。遅れた私が悪かったからそんな謝る必要ないよ。気にしてないから。明日はちゃんと早起きするよ」

「そうだぞ千里。遅れたこいつが悪いんだから気にする必要なんてないぞ」

来やがった。長谷君こと昨日のあいつ。

「あんたは今までに何回も待ち合わせに遅れてるのに私君にそこまで言ったことありました？ 今日一度のことですんなりに言います？」

「わー。穂希が怖いね千里。こんな凶暴な人になったらだめだよ」

きよろきよろしながらどっちの味方に付くべきか悩んでいる千里を見てあいつは笑う。あいつは控えめに言っても顔がいいからどんな表情もよく似合う。人をからかっているところも様になるって許せない。

「ええと、遅れた穂希も悪いです。でも穂希は自分が悪いって自覚してるから、そこまで怒る必要はないと思うな」

「本当に千里は穂希に甘いな」

「千里は優しいな。まあ結局学校につく時間はほとんど変わらなかったからノープロブレムだけどね」

「そういえば昨日の話ですが。穂希、長谷君に何か借りるって言ってませんでしたか」

……あれ。そんなこと言ってたっけ。そういえば、ああ。

「ラノベの新刊借りるんだった。持ってきた？」

「持ってきてないよ。第一お前に貸す新刊なんてないわ。俺があんたから新刊借りて、あんたが俺にCDを借りるんだったの忘れたのか。ほらあんたがずっと気になってた……」

「そうだ。私の歌姫のCDを渡せ。今すぐに。」

言われてみれば朝見ていたネットニュースにそんな話があった気がする。

「はあ。あんたが借りるのにそんな言い方するかな。そういうとこ変わらないね、昔から。はいどうぞ。これですお嬢さん」

確かに現物を見たら、貸して欲しいって言っていたかもしれない。でもこんなことまで忘れているものかな。私がそんな風に事を考えている間も二人は仲良さげに話していた。なぜだかわからないけれど私の口から普段言わない言葉がこぼれた。

「あつ。今日数学当てるんだったの忘れてたわ。予習してないやってくるからまた後で」

「穂希にしては珍しいですね。指示があったのにやってないっ

て。じゃあ席に戻るよ。でもあの先生予習してなくても穂希だから何も言わないと思うんだけどな」

「先生の信頼を得るためには毎日ちゃんとしとかないといけないんです。私だって毎日頑張ってます」

「じゃあ俺はもうちょっと千里と話してから帰るか。CDは聞き終わり次第返してくれればいいよ。そんじゃ」

チッ。

無意識に舌打ちをしていた。私に背を向けた二人に向かって。自分の行動を少し不思議に思いながら数学のノートを開ける。

二人はまだ仲良さげに話をしていた。少し、もやもやする。それにしても昨日のこと全然覚えてないな。好きなCDのことだったら覚えてるはずなのに。あいつと話したことぐらい覚えていてもいいはずなのに。本当に、何があったっけ。

その後は何事もなく過ぎていった。数学の予習もあの後済ませて二人とは違う友人と休み時間を過ごした。彼らと昨日した話はあの帰り道のこととは違ってきちんと覚えていた。

時は昼休み。千里とあいつに誘われたが、断ってお昼は学食に行った。今日のメニューはたぬきそば。この学校では結構人気のメニューだったりする。

「はあ。なんでこんなに忘れてるのかな。せっかく久しぶりに千里とあいつと一緒に帰ったのに。ほんとに不思議なことって起こるものなんだ」

そう思いつつお茶に口をつけた。唐突に声をかけられる。

「ずいぶん大きな独り言ですね。先輩」

びっくりした。寿命が三年は縮まった。お茶を吹き出しかけた。この声はきつと——。

「急に話しかけないで、ののちゃん。先輩にだって独り言を言いたくなる時はあるよ」

お茶を机に戻しつつ顔をあげる。

「ご挨拶遅れてすみません。こんにちは、お久しぶりですね先輩」

そういつて彼女は何食わぬ顔できれいにアイロンの掛けられたハンカチを差し出す。誰のせいで吹き出しかけたと思ってるんだ。そう思いつつ受け取った。

彼女は乃々彼ちゃん。通称ののちゃん。私や千里の後輩でも礼儀正しい良い子だ。私とは図書館で知り合った。いつも貪るように本を読んでいて変わった子だなど思っていた。

「こんにちは。今日はどうしたの」

「今読んでいた本がちょうど読み終わったので。最初から先輩が好きそうな雰囲気だなどと思って借りた本だったので、読んでみたら本当に先輩の好みの話だと思ったので先輩にネタばらしに来たんですよ」

そう言われてもう一度彼女を見てみると彼女は右手に今日の昼食と思われるメロンパンを、小脇に分厚い本を挟んでいた。

「あのねののちゃん。いい本だと思ったたら普通に面白かったの読んでみてくださいいいからね。ちゃんと読んであげるから」

ののちゃんは私の言葉を華麗に無視して話を続ける。

「ですが、予定が変わったんですよ。先輩が今とても驚いたみたいだったので誰かに知られると後ろめたいと思ったはずの内容を当てたいと思います」

パチパチパチ。彼女は口で拍手をした。その口角は上がっている。これまでの経験上、彼女は人を乗せるのが本当に上手だ。先に予防線を張っておこう。

「先輩には何も変わったことはありません。ただ久しぶりすぎてびっくりしただけです」

「へえ。先輩は何もなかったってしらを切り続けるんですね。あんなにびっくりされてらしたのに。せっかく先輩が面白い暇つぶしを見つけたのに付き合ってくれない薄情な先輩なんですね。へえ」

すぐくのちゃんに責められてる気分になる。別に悪いことをしているのは私じゃないはずなんだけど。

「そういえば先輩、朝遅れていましたよね。いつもより三分ぐらい。それから今朝教室で少し二人を避けてましたよね。心配したんですよ、いつもと雰囲気違うなと思って」

待って待って、え。ちょっと待って。なんでそんなこと知ってるのこの子。まさか情報通なの。

「まあ何もないっていうならそれで……」
途端に悲しそうな表情になる。しかし、

「まあ先輩のここ数日の行動についてレポートをまとめて千里先輩と長谷先輩に送りつけるっていうのもいいですね。いやあ、テストが終わったので時間は腐るほどありますからね」

そう付け足した彼女の目は私の目を射るようにこちらを向く。私の背筋に悪寒が走った。この子はどこまで知っているのだろう。確かに私の感覚にはどこか違和感があるし。

「わかったわかった。うん、そうだよ。話せばいいんだよね。この優しい先輩が先輩ちゃんのために付き合ってくれよう」
ほら結局こうなる。私はちよろいのか。

「そうと決まれば話は早いですね。さっさと何があったのか吐いてください。せーんばい」

天使のような微笑みを浮かべるののちゃん。でも今の私にとっては悪魔の笑みだ。

「はあ。しょうがないなあ」
ため息をつきながら話し出す。今日見た夢のこと。内容はきつと現実のことじゃないけれど、かといって昨日の帰り道のこととは何一つ思い出せないこと。あいつがあり得ないような行動と発言をしたこと。無意識に二人に舌打ちをしてしまったこと。

そして今混乱のさなかにいること。聞き終えるとののちゃんは笑いをこらえて言った。

「先輩ってお子様なんですね」

「はあ？」
「どういうことかな。ののちゃん。この私に向かってお子様とは」

「自分のことが理解できないようなお子様な先輩にすっかり教えてあげますよ。先輩のこと」

彼女は紙にサラサラと何かを書き付けた。

「サラサラと何かを書き付けた。」

「頭がいい大人な先輩ならこれぐらい簡単に訳せますよね。アメリカの児童文学を書くDr.スースっていう人の言葉ですけど」その紙を私に差し出す。そこには。

『You know you are in love when you cannot fall asleep because reality is finally better than your dream.』

私は何の苦も無く訳すことができた。きっとこんな意味だろう。

『恋に落ちると眠れなくなる。何故なら、ついに現実が夢よりも素敵になったからだ』

私もその紙に訳を書き付け二人の間に置いた。

「で、これがどうしたの。あいにく私は眠れなくなんかなってないけど」

「やっぱり先輩って頭がいいんですね。でもあと少し黙っててください」

そういつて続ける。私は黙ってうなずいた。

「さっき私が言った先輩のことと、先輩が私に話したこと。聞いていると、先輩が千里先輩に嫉妬していることが言葉の端々から伝わってきてるんですが、自覚してますか」

え。嫉妬なんかしてるの私。それも千里に向かつて。なんで。そもそも嫉妬なんかする理由がないし。

「あのね、のの……」

「言いましたよね。少し黙ってください」

私に有無を言わせないような言い方だけれど当の彼女はとても楽しそうだ。

「朝、先輩が宿題をするからじゃあっておっしゃったのは、千里先輩と長谷先輩の二人が仲良さげにしていたのが気に食わなかったから。夢の中では先輩にすごく優しくかったのに。舌打ちを打ったのはそのあとずっと楽しそうに二人で話し続けていたから。夢の中では二人の予定があって、その計画を立てるときは長谷先輩は先輩のことしか見ていなかったのに。結局今朝以外二人と話していないのは、仲良さげな二人を見たくなかったから。夢の中ではあの後長谷先輩を独り占めできるかもしれないのに。あ、じゃあ総合すると昨日の帰り道を思い出せないのはどうしてか。答えは簡単、先輩が昨日の夜見た夢のほう先輩にとって素敵だったから」

そこでいったん間を置く彼女。

「これらの情報から先輩の今の感情に名前を付けるなら『二人への嫉妬』まあ『千里先輩への嫉妬』以外の何物でもありませんよね」

理解しましたか。私にとどめを刺すようにそう言った。確かに彼女の話は論理的でぐうの音も出ない。

「要するに今先輩は恋する乙女なんですよ。いやあ、青春しますね。私とは大違いだ。楽しそう。でもそんな自分の気持ちにも気づけないなんて本当にお子様ですね。こんなに頭いいのに。自分の友達にも舌打ちしてるぐらいなんだからホント気づけよって感じですよ」

恋する乙女から後の話は頭に入ってこなかった。え。恋する乙女って。私が恋って。ましてやあいつになんて。ありえない。

長谷が穂希を見つけるまで、あと少し。

「私は恋が実らない現実なんか幸せじゃないって思ってるんで実らない恋なんてむなしいだけじゃないですか。そんなのなんて失恋ソングの中だけで充分なんですよ。先輩は夢を見たんです。実らない現実よりも、素敵な世界を夢見たんですよ。むなし現実を忘れて。嫌な自分も全部忘れて。じゃあ先輩は夢を現実にするために先輩の気持ちに向き合うべきだと思いますよ。っていうかわいい後輩ちゃんからのアドバイスです」

それが今回の夢の話の真相なんじゃないですか。そうやって彼女は席を立った。

「そろそろお邪魔しますね。もうすぐ図書館が開くので。先輩にとつてこの現実が幸せな世界になるように応援してますよ。ああ、言い忘れてましたがこの本も返しておくのでぜひ借りて読んでくださいね」

じゃあまた。今度会ったらぜひ先輩が私を驚かせてみてくださいね。混み始めた食堂の人の間を器用に歩いて彼女は出ていった。本当に彼女は聡明な後輩だ。

『恋』か」

私の初恋はどうやらあいつになりそうだ。

—先輩。きつと長谷先輩も穂希先輩も二人とも同じ気持ちですよ。昔から好きな子はいじめたくなるものだって言うじゃないですか。

穂希の耳にやけにはっきりと食堂の扉の開く音が響いた。振り返る穂希の目が彼を見つけるまで、千里に発破をかけられた

永遠を繋げ

鹿児島市立鹿児島女子高等学校 二年

西 遥華

何か食べ物を買おうと店に入ると、視界に映った新聞の一面に興味深い記事が載っていたので、足を止めてしまった。

時間はそれほど無かったものの、何となくその場に留まっていた、記事に目を通す。

「マルセル公爵家殺人事件から二年 行方不明の兄妹は未だ見つからず」

新聞には公爵とその妹の写真が、特徴と共に掲載されている。その記事を見て、ああ、もう二年になるのかと、目を細めた。そして、無意識に呟く。

「レイヴァン様、皆あなたのことを探していますよ」

二年も見つからないままなのだから、皆が探しているのも当たり前だとは思ふ。

アリシア王国の東にある領地を治めていたマルセル公爵家は、由緒ある家系だった。今となっては領主行方不明ということ、あの家の領地は別の貴族が治めているが、屋敷はまだ残っている。領民にも他の貴族にも慕われていた存在だったから、彼らが「レイヴァン様に戻ってくるかもしれないか

ら、取り壊すのは止めて欲しい」と新しい領主に頼んだらしい。

——けれど、マルセル兄妹はもう戻って来ないよ。

目を伏せ、彼らを慕う誰かに向けて、心の中でそう言う。自分だけが知っている事実。しかしそれは、死ぬまで隠し通さないといけないもの。

新聞を元あった場所に戻し、そこら辺にあった紅茶を買って、店の外に出た。日も暮れてきたことだから、早く東の領地に向かおうかと荷物を背負い直す。二年程今いる南の領地に住んでいたけれど、今日でお別れだ。東の領地での仕事が入らなければもう少し長く暮らせただろうに。

あちらに着いたら、ついでに公爵のお屋敷も見に行こう。あそこは思い入れのある場所なのだ。

東の領地に向かう馬車の中、目的地に到着するまでずっと寝ていた。幸せだった日々の夢を見ていた、かもしれない。

*

「本当に引き取れと言うのだな、ロニー」

「話した通りだよ。これは僕が唯一、信頼出来る君にしか頼めないことなんだ、レイヴァン」

天井の高い応接室のソファーに腰掛けて、私はロニー伯爵の隣で静かにしていました。出された紅茶に口を付けることも無く、それはもうお人形のように。伯爵からおとなしくしていてねと前もって言われていたからではありません。何かを話す気力が無いからです。陽の光が差し込む明るい室内と

は対照的に、私の心は暗闇の底に沈んでいます。

紅茶はすっかり冷め切ってしまいました。

目の前に座っているのは、端正な顔を歪ませて動きをびたりと止めたレイヴァン公爵様。伯爵は気にせずティーカップを片手に話し始めました。

「どうぞやらご両親を早くに亡くしているらしい。一時は孤児院にいたようだけど、十六歳の時に孤児院を出て、今は街で働いているみたいだ」

「それが、彼女を引き取って欲しい理由か？」

「いや、もう一つ理由がある。一週間前、彼女は山賊に襲われてね……。偶然僕が別の領地の視察に行く途中で、彼女を助けることが出来ただけ。この子、暫くは外に出ることも怖い、と言っていたよ」

「その子を引き取ってくれる親戚はいなかったのか」

伯爵は紅茶を一口飲むと、カップを置き深い溜息を吐きました。どこか呆れた様子です。

「親戚はいたよ。『彼女はもう十七歳、働ける年なのだから自分で何とかするだろう』って断られたけど。全く、冷たいよね」

「それで？」

「僕は暫くしたらこの国から離れる。別の国で仕事が入ったことは君にも話しただろう？ 本当は僕だって彼女を匿ってあげたいけど、僕は彼女の面倒を見ることが出来ないし、かと言って、また山賊に襲われるかもしれないと怖い思いをさ

せるなんて、可哀想だと思わないかい」

伯爵は「君も怖いだろう」と私の方を向きました。

私は一応頷き、口を開こうとして、やめました。何から話すべきか、迷ったのです。

一週間程前、私は山賊に襲われました。山を越えた先にある街に用事があって、一人で歩いていましたが、そもそもそれが間違い。刃物を持った大きな身体の男達に囲まれ、私は殺される寸前だったのです。

気付けば私は伯爵のお屋敷にいて、気持ちを落ち着かせるためにと渡されたハーブティーを飲んでいました。

「僕の屋敷に来てもらうのも一つの手段だけど、それよりも信頼できる人物に預けた方が、僕もずっと安心できるから」

「それで、俺に引き取って欲しいのか」

「そうだ。例えば使用人だとしても良い、と言っていた」

「……お前がそこまで言うのは珍しいな」

「彼女のことをしっかり見て。何か気付かない？」

伯爵はそう言って、頭を下げました。

「引き受けて、くれないか」

公爵様は迷っているようでした。当たり前のことです。見ず知らずの女を引き取ってくれだなんて、普通は考えられないでしょう。

伯爵はまだ頭を下げたままです。

「……分かった。お前の心境も察したよ」

静まり返った空間に、凜とした声が木霊しました。

「ただし、彼女は使用人としては引き取らない」

「どうしてだい？ まさか、良からぬことに」

「勘違いするな。彼女は俺の義妹(いもうと)として引き取る。そちらの方が彼女を守るし、お前も安心するだろう」

公爵様は不敵な笑みを浮かべました。伯爵も安堵のため息をつきます。私も実は内心ほっとしていて、ぴんと伸ばした背筋を丸めてしまいそうでした。

「ありがとうございます。その代わり、面倒な手続きは僕が進めよう」

伯爵はそう言いました。そして私の手を握って、

「君は今日からレイヴァンの妹であり、マルセル家の人間だ。

頑張れよ」

「はい」

お屋敷に来て初めて、私は声を発しました。その声は小さかったかもしれませんが。震えていたかもしれませんが。裏返ったかもしれません。

しかし伯爵も公爵様も力強く頷いてくださりました。私の声は届いていたようです。

「それでは、まずは名前を訊こうか。君は、誰だ？」

「メアリです。伯爵からも、そう呼ばれていました」

「メアリ。……名前まで似ているのだな、ロニー」

レイヴァン様に視線を向けられた伯爵は、気まずそうに目を逸らします。

「そろそろ僕はお暇するよ。まだ仕事が残っているんだ。明日、従者に荷物を一通り送らせよう」

「いや、こちらで揃えるから気にするな」

「そうかい？ それなら、お言葉に甘えよう」

伯爵は荷物を持つと、ひらひらと手を振って応接室を出て行きました。公爵様に「見送るか？」と訊かれたので、私は

「はい」と答えて慌てて彼の後を追いました。

ホールに公爵様と一緒に行き、外に出ようとしている伯爵に近付いてお辞儀をしました。

「伯爵、ありがとうございます」

「どういたしまして。君の人生が、幸せで溢れることを祈っているよ」

伯爵は一度私に近付き、手を強く握ってくださいます。冷えた手に伯爵の温もりがしっかり伝わってきて、心から安心しました。

「随分とまた、クサイ台詞だな」

「最後まで、格好良い男を演じさせてくれ。……それじゃあ、またどこかで」

伯爵は待機していた馬車に乗り込み、自分の領地へと戻って行きました。

ホールには私と公爵様、そして仕事をしている数人のメイドさんだけが残っています。高い天井に吊るされたきらきら輝くシャンデリアの下、公爵様は私の方を向いて手を差し出しました。

「急なことに混乱しているであろうが、一応自己紹介くらいは済ませておこう。東の領地を治めている、レイヴァン・マ

ルセルだ。位は公爵、年は二十三。爵位を持っていてる者の中
では若い、一年前に両親を流行病で亡くしているんだ」

なるほど、と私は頷きました。ロニー伯爵もそうですが、
公爵様も随分と若かったのです。ご両親を亡くしているとい
うことを聞いて、やっと疑問が解消されました。私と状況が
似ていますね。

「メアリ、だったな」

「はい」

「どうして山道を一人で歩くような真似をした？」

「隣の街で、有名な大学の名誉教授が講演会を開くと聞いて、
行こうと思ったのです」

脳裏にあの現場の様子が鮮明に映し出されました。荒い呼
吸をしながら私に近付いてくる山賊、きらりと光る刃物、そ
の場から動けない私――。

思い出したくない記憶を思い出してしまい、私の身体がふ
らりと揺れました。それを公爵と近くにいた執事さんが支え
てくれましたが、足に力が入りません。

「大丈夫か？ すまない、俺が質問をしたばかりに」

「いえ……。大丈夫です。ご迷惑をおかけしました」

「念のため、暫くの間は休んだ方が良くもしいれないな。セ
ドリック、部屋の準備を」

「はい、旦那様」

丁寧にお辞儀をした執事さんはそのままどこかへ行ってし
まいました。庶民の娘がこんなに良い待遇を受けて良いのか

迷いましたが、部屋の場所を知っているわけでもないのでは
となく待っていることにします。

「公爵様、あの」

「その呼び名はやめてくれ。君は義妹だろう」

「……では、兄様でよろしいでしょうか」

「悪くない」

公爵様改め、兄様は少しだけ笑うと、私の頭を少し荒く撫
でました。嬉しかったのでしょうか。そうだと良いのですが。

「兄様、これからよろしくお願い致します」

そう言ってきつちり九十度のお辞儀をすると、兄様はまた
私の頭に手を伸ばし、今度は優しく頭を撫でてくれました。
子ども扱いされているようで何だか複雑です。

やがてセドリックさんが戻ってきて、私を部屋まで案内し
てくれました。大きな扉を開けばそこは全く違う風景。高い
天井に吊るされたシャンデリアは相変わらずきらきらと輝き、
広い部屋は窓から差し込む柔らかな陽の光に包まれています。

天蓋付きのベッド、アンティーク調のクローゼットやデス
クなど。上品な家具の数々が部屋のあちこちに設置されてい
ます。庶民には到底手の届かない物だと一目で分かりました。

「こちらが、今日からお嬢様のお部屋になります。クローゼ
ットに衣類は一通り揃えてありますので、好きな物をお選
びください」

「ありがとうございます。でも、今日きたばかりなのに衣類
が揃っているって、凄いですね」

「実はこの部屋、もともとは何も無い部屋でした。ですが数日前、ロニー様からご連絡があった時から、旦那様は準備を進めておられたのです。衣類も家具も、全てここ数日で揃えた物なのです。旦那様は、最初から貴女をマルセル家の人間として、迎え入れるつもりだったのですよ」

セドリックさんは「内緒です」と悪戯っ子のように笑いしました。きつと、口止めされていたのでしょうか。

兄様、あの時は嫌そうな顔をしていたのに。

「素直じゃないなあ、兄様は」

私は無意識に呟いていました。セドリックさんは、何も言わずにただただ微笑んでいて、私もつられて笑いました。穏やかな午後には、ゆっくりと過ぎて行きます。

人の涙程、美しいものは無いと思った。

どんな宝石よりも、どんなドレスよりも、どんな絵画よりも美しい。最も価値があるのは人の涙だと、信じていた。否、信じるだけでは最早足りず、常に人の涙を見ていたい、そう思うようになっていた。

——だから、人の涙を見るために、沢山の人を殺めてきた。

ナイフで、縄で、鉄パイプで。

老若男女関係なく、殺して、殺して、殺して、殺して殺して殺して殺して殺して殺して。

溺れる程の返り血を浴びてきた。

世間が恐れる、正体不明の殺人鬼が自分のことだと気付いた

頃には、もう遅かった。

純粹な好奇心は、時に人を狂わせる。もつと、もつと美しいものが見たい。

今日もまた、命が散った。

「舞踏会の招待状か」

「ええ。どうやら王家主催のパーティーのようでした……」

旦那様は勿論、お嬢様にも届いております」

「……ちっ、最近ただでさえ殺人事件が多いのに、何を浮かれているのだ、王族は。どうせ第三王子あたりが好奇心でメリを招待したのだろう。庶民の娘が、今じゃあ立派に貴族としての役目を全うしているのだからな。一目見ておきたいってことか」

「返事は、いかがなさいますか」

「勿論、不参加だ。大事な義妹を見せるものか」

「畏まりました」

アリアシア王国の歴史について、分からないことを訊こうと思いついた。兄様の部屋に来てみれば何やら不穏な空気が漂っていました。少しだけ開いた扉から中を覗きます。どうやら舞踏会の招待状が来たようで、セドリックさんは招待状を手に、兄様に話しかけていました。しかし兄様は乗り気では無い様子です。ああ、兄様の綺麗なお顔が歪んでいます。

——マルセル家に引き取られてから、一年が経ちました。長かったような、短かったような、不思議な感覚です。

「兄様」

軽く扉をノックして、入室して良いか尋ねると、すぐに返事が返ってきました。

「メアリか。どうした」

「少し、歴史のことで質問があるのですが」

「相変わらず勉強熱心だな、君は……。で、分からないところはどこだ」

「失礼致します。ここなのですが」

私が入室すると、セドリックさんは招待状をそっとポケットに仕舞いました。余程見せたくないのでしょう。

兄様に分からないところを教えてもらい、私はメモを取りながら、招待状のことを気にしていました。舞踏会、兄様と踊ってみたいです。しかし、その思いは口にはしません。

「ありがとうございます。理解しました」

「良かった」

「ところで、兄様。舞踏会には参加されないのですか」

「聞いていたのか」

「盗み聞きするつもりは無かったです。聞こえてしまいました」

けれど、なぜ舞踏会に参加しながらないのか、その理由だけは知りたくて、私は思い切って尋ねてみました。

「先程話していた通りだ」と兄様は答えました。確か、私を見せたくない。それが理由でした。この一年で、兄様は随分過保護になった気がします。

結局私はそれ以上舞踏会について何も言うことはなく（そこまで行きたいわけでは無かったので）、部屋に戻りました。

夜も遅く、空は真っ暗です。しかし月が綺麗に見えて、月明かりが部屋を優しく照らしてくれるので、今夜はぐっすり眠れそうです。

瞼がだんだん重くなって行き、同時に脳裏に一年間の出来事が次々に浮かんで、消えて行きました。

引き取られて一週間は勉強の日々。勉強は昔からできる方でしたが、貴族のレベルに合わせるとなると、普通教科以外にも学ばなければいけないことがあり、それを一から頭に叩き込んで行くのは苦痛でした。七日間を生き抜いた後は兄様がうんと甘やかしてくれましたが。

引き取られて三週間。私は正式に兄様の義妹になり、法律上、マルセル家の一員になりました。

引き取られて一か月。月に一回程度ではありませんが、私は外出できるようになりました。勿論、街の中だけでしたが、それでも人で賑わう街は面白いものが沢山。今ではひっそりとお屋敷を抜け出して、芸術品を見に行くように。

引き取られて三か月。お屋敷に大きな封筒に入ったアルバムのような物が届いたり、見知らぬ男性が訪問したりするようになりました。それが婚約話だと理解するのは容易でしたが、私は暫くお屋敷を離れるつもりは無く、兄様も帰るよう促していたので、いつの間にかそれは無くなりました。

引き取られて半年。私は世間から奇異の目で見られるよう

になりました。庶民の娘が公爵家の養子として引き取られるなんて、今までほとんど無かったので仕方ありません。その事実すらも隠そうとしていたのですから、寧ろよく半年も隠せたものだと思いました。

そして、引き取られてから十一か月。

私は兄様から離れたくないと、強く思うようになりました。私という存在は兄様にとって足枷同然でしょうが、家族を失い、温もりを求めていた私は、兄様と離れたくないですし、失いたくもないのです。

所謂「依存」でしょう。一年も経たずにここまで性格が変わるなんて、思ってもみませんでした。

「……寝ましようか」

兄様への想いは一旦断ち切って、私は潔く眠ることにしました。この思いは一生胸の奥に秘めておかなければ。

瞼が完全に閉じ、微睡みの中でそう決心した時。

お屋敷に、つんざくような悲鳴が、破壊音が、響き渡りました。

思考回路を閉じていた脳は再び醒め、完全に閉じていた目は昼間のように冴えてしまいました。

何事かと部屋の外に出ると、同じく兄様とセドリックさんも廊下に出てきます。

「今の悲鳴は？」

「分らん。一階から聞こえた。……様子を見に行ってくる、セドリックはここでメアリと待っていてくれ」

「畏まりました。旦那様、念のため、コンバットナイフを」
「助かる」

セドリックさんはどこからかコンバットナイフを取り出し、兄様に渡すと、そのまま私の肩を抱き兄様の部屋に入って内側から鍵をかけてしまいました。状況を理解していない私は呆気にとられ、その場に立ち尽くしていました。

「セドリックさん、今のって」

「メイドの声でした。一階で何かがあったのは間違いありません」

現場を見ていないので、何が起きているかは全く把握できませんが、もしもの時は兄様の命にかかわるかもしれませぬ。

そう思ったら、居ても立っても居られなくなって、気付けば私はセドリックさんを押し退けて一階へ向かっていました。

後ろから私を呼ぶ声が何度も聞こえてきますが、それどころではありません。後でしっかり謝っておきましょう。

「兄様っ」

緩やかなカーブを描く階段を駆け降りる途中、何度か転びそうになりましたが、手すりを掴んで耐えました。

部屋を片っ端から探して、扉をいくつも開いて――ああ、やっと見つけました。

メイドさん達の部屋の近くにある、大広間。兄様はその部屋の中央に立ち尽くしていました。

「兄さ……」

呼ぼうとしたところで、私は異変に気付きます。兄様が

る場所から、更に奥の方に誰かが立っているのです。

それだけではありません。壁に掛けられたランプの明かりが部屋を照らし、動かない数人のメイドさんと血の海が浮かび上がりました。いえ、元々見えていたのかもしれないんですが、兄様のことしか考えていなかった私の頭が認識していなかったのでしょうか。

「メアリ！ ……ぐっ」

こちらを振り向いた兄様が、私の方に駆け寄って優しく抱きしめてくれました。しかし、顔を僅かにしかめたと思ったら、今度は抱きしめる力が弱まってしまいました。兄様の温もりは消えていませんが、ああ、どうしましょう。この状況を作った者への殺意が湧いてきました。

「妹を溺愛しすぎではありませんか、レイヴアン様？」

奥の方から声が聞こえたと思うと、暗闇から一人の男が姿を現しました。あれは、確か少し前に執事の見習いとしてマルセル家に来た人。執事服を身に着け、柔和な笑みを浮かべる男は返り血で汚れていて、右手には血が滴り落ちるナイフが光っていました。

彼が、この惨状の犯人でしょう。

「前々から、あなたが邪魔だったのですよ。本来ならわたくしの主であるマウロ様がこの地を治めるべきなのです」

「マウロは反逆軍の一員だろう。この地を乗っ取るうとしていられるのも、反逆の準備を進めるため。東の領地は広く、領民も多いからな」

兄様は脇腹を押さえながら言いました。近くにダガーナイフが転がっていることから、男が投げたナイフが掠ってしまったのだらうと思いました。

「おや、どこから情報が漏れたのでしょうか」

男はおどけたように肩を竦めると、ナイフを兄様に向けました。このままでは、兄様が殺されてしまいます。

この状況をどうすれば打開できるか。そう思った時、ふと床に倒れているメイドさん達の瞳に目が行きました。

彼女達の瞳にうつすらと溜まっている涙。

その時、身体が急激に熱を帯び始め、過激で得体の知れない衝動が心の底から這い上がって来るのを感じました。

『涙を、見せてください』

そんな言葉が、脳に響きました。

私は昔から一番美しいものは涙だと信じて疑わなくて、それと同時に人は涙を流す瞬間が一番美しいと思っていて、気付けば私は、涙を見るためにこの両手を汚していたのです。何かを食べたいと思えばそれを食べるように、涙が見たいから人を殺して涙を見る。私は、その欲望にだけは従順でした。

涙を流すには、痛みが一番効果的。だから私は、何度も何度も人を殺して、その『芸術品』を堪能していました。

でも、叫び声は苦手でした。だって、毎回殺した人は叫び声をあげていたのですから。芸術鑑賞の際は、静かにしているものでしょう？

「…ふ、あはははは！」

私は、声を上げて笑い始めました。

兄様からコンバットナイフを奪った私は、そのまま男に突っ込んで、ナイフを首元に向けました。勿論、簡単に避けられましたが、それは予想済み。

素早く後ろに回り込んで背後から心臓あたりを刺すと、ナイフ越しに形容し難い感触がありました。

「涙を、見せてください……ね！」

男は下品な叫び声をあげ、床に倒れ込みました。はくはくと口を動かして、何かを言おうとしていましたが、やがて力尽きて死んでしまいました。

涙は流していませんでした。

「……つまらない」

今度は後ろを振り向き、兄様を見据えました。怯えているわけでもなく、憤っているわけでもなく。脇腹を押さえつつも、いつも通り凜とした表情の兄様が、そこにいました。

「メアリ、まさか君が？」

「ええ。連続無差別殺人事件、と世間では呼んでいるようですが、私が犯人です」

「なぜ、そんなことを」

「さあ、どうしてでしょう。涙が好きだからですかね。人の涙は、どんなものよりも価値があると私は思っていますので。どれだけ汚い人間でも、涙だけは美しい。ああ、でも大切な人達が流す涙は……苦手です。どうしてでしょうね。私、このお屋敷の方々の涙は、見たく無いのです。人の温もりを知

ってしまったからでしょうか」

実際、幼い頃から人の温もりを感じる事があまり無かった私は、少なからず人の温もりを求めています。

早くに両親を亡くし、孤児院に預けられたは良いものの、「涙が好き」という価値観を理解されず除け者にされ、親戚にも引き取ってもらえなかった十六歳までの日々。

社会に出ても、孤児院出身ということで、憐みや蔑みを含んだ目を向けられ、生き地獄を味わってきました。

両親が死んでから私に温もりを与えてくれたのは、伯爵と兄様、そしてこのお屋敷の人達だけでした。

「兄様、ごめんなさい。私、昔からおかしな子だったんです。ね、幻滅したでしょう？」

嫌われてしまったかもしれないですね。兄様にだけは、この人にだけは、嫌われたくなかったのですが。

もう少しだけ兄様に近付こうとした時、兄様の背後で何かが一瞬だけ光りました。間髪入れずに空気を割く音が木霊し、いつの間にか兄様は血を吐いてその場に倒れていました。

「兄様？」

兄様は何も答えず、ただ身体を小刻みに震わせているだけです。一体何が起きたのでしょうか。呆然としている私に兄様は息を切らしながら、

「メア、リ、逃、げろ」

そう言っただけ私に手を伸ばしました。見れば兄様の背には槍が刺さっていて、先端が胸元から少し出ていました。

「許さない」

柱の陰に、男が一人見えたので、その男も先程と同様、ナイフを刺して息の根を止めてしまいました。彼も、マウロ侯爵の手下でしょう。

兄様のことになる、私は感情を抑えられなくなり、改めて私は兄様の傍へ行き、その場に傅きました。兄様に触れると、もう冷たくなり始めていて、呼吸も浅くなってきました。そろそろだと、嫌でも実感しました。

「……行かないで」

結局、口から零れ落ちたのはその一言。もっと言うべきことが他にあるはずなのに。伝えるべきことがあるはずなのに。頭が真っ白になって正常な判断が下せなくなりました。

そんな私をどう思ったのか。兄様は最期に優しく微笑むと、
「ずっと、一緒だ」

そう口を動かし、そのまま目を閉じて脱力しました。

「ずっと一緒」。普通に考えればこの状況でそれは叶いませぬが、兄様が紡いだその言葉には、別の意味が含まれているような気がしました。

例えば、数年前に読んだ本に書かれていた「人の一部を食べると、その人の魂が自分の身体に宿って、生き続ける」という考えのような。

このまま兄様を眺めるだけか。あるいは私と一緒に生きてもらうか。

どちらを選ぶかなど、もう決まっています。

私は全く動かなくなった兄様から心臓を抉り取り、食べ始めました。兄様と一緒になることにしたのです。

人間の肉は不味いと言いますが、兄様はどんな料理よりも美味しく感じられました。

ぐちゅり、心臓を噛み潰す音。ごくり、兄様を飲み込む音。これで兄様は、この世から消えてしまいました。私の中では生きていくはずでした。

「これからも、共に生きていきましょう」と呟いても、返事は返ってきません。当然です。けれど私の心は満たされました。多分、今までで一番。

セドリックさんやメイドさん達が、続々と部屋に入ってきました。彼らは私と倒れている人達を交互に見た後、何が起きたのかを知り、静かに涙を流し始めました。

*

「お客さん、着きましたよ。起きてください」

小さな窓から陽の光が差し込む。男性の声が聞こえる。

まずは聴覚を刺激され、うっすらと目を開けば視覚も刺激された。

「……着いたの」

「先程からそう申し上げているでしょう。ああ、服に皺が」

「ああ、ごめんなさい」

「お気になさらず。さあ、どうぞ」

御者に服を軽く整えられ、降りるよう促された。

どうやら目的地に到着したようだ。東の領地に足を降ろす

と、二年前と何も変わっていない街が目に入った。

「ありがとう。はい、これ代金」

「またのご利用お待ちしております。さて、俺は酒屋にでも行ってきますかねえ」

馬車を道の隅に止め、まだ朝なのにふらふらと近くにある酒屋に入って行く御者を見送って、屋敷に向かつて歩き始める。あの屋敷まではそんなに距離は無い。久しぶりに来たから記憶が危ういが、直感で適当に進んで行こう。

「今日はやけに賑やかだな……。お祭り？」

人ごみに揉まれながらも隙間を見つけて歩いて行けば、二年前によく使っていた細い道を見つけた。ここをまっすぐ行けば屋敷に着くよね、と思い出し、ゆったりとした足取りでまた歩き始めた。

屋敷は、どこか廃れたような気がした。主がいなくなつて二年。この土地が誰のものになつたかなんて正直どうでもいいけど、マウロ侯爵が治めていないだけまだましだろう。

「懐かしい」

一年間、私を育ててくれた場所。私に温もりを与えてくれた場所。レイヴァン様との——兄様との出会いの場所。

屋敷を出た日から、私はマルセルの姓を捨て生きてきた。

そういう意味で、メアリ・マルセルは死んだのだ。

私が今日まで何とか過ごしてきたのは、マルセル家の人達のおかげだった。マルセル兄妹は行方不明ということにする

よう言っておいたら「お嬢様の仰せのままに」と頭を垂れる始末。悲しそうな表情だったけれど。

二十歳になった私は、表面は普通に過ごしていた。兄様と生きるようになってから人殺しもしていない。けれど世間はそれを許さず、正体不明の殺人鬼を、今も探していた。

悪いのは私なのだ。

だって、私は元々マウロ側の人間だったのだから。

……この一年間の出来事は、ほとんど計画的なものだった。私が隣町に行こうとした途中、山賊に襲われたことも、ロニー伯爵に助けられたことも、マルセル家に潜り込んだことも。しかし、私の中で兄様が生きていることは偶然だ。

怪しまれないよう、演技だつてした。山賊に襲われ、怯えている時も、立ち眩みも。全て演技だつたのだ。ああ、でも。

兄様への愛情は本物だ。

人の涙が好きで、涙を見るために連続殺人犯となつた私は、ある日町の視察に出ているマウロ侯爵と出会った。

偶然にも殺人の場面を見ていた彼は、私の腕を買って、ある人物の暗殺を命じた。

『あの憎らしいレイヴァンを殺せ』

世間知らずな私は「レイヴァン」がどんな人物なのかを知らなかった。知らなかったからこそ、涙を見ることが出来るなら、と簡単に承諾してしまったのだ。

その代わり、殺人の証拠を消すよう、彼に条件を出した。良い顔はされなかったが、仕方ないとマウロは頷いた。この

時点で私も彼も相当な層だ。

その日から、レイヴァン公爵暗殺計画は始まった。

まず、兄様の屋敷に直接潜り込むと怪しまれるということ
で、その周辺から埋めて行くことにした。

そのターゲットが、ロニー伯爵。

隣町に行く途中で山賊の振りをしたマウロの手下に私を襲
うふりをさせ、伯爵に助けてもらう。その時伯爵が馬車で通
るのは、伯爵の屋敷に潜り込んだマウロの手下によって把握
済み。そこで伯爵に一時期匿ってもらい、屋敷に留まる。勿
論伯爵は私の家族を探し始めるものの、私が孤児と知る。次
は引き取り手を探し始めたが、私が異常な性格ということを知
っている親戚は気味悪がって頑なに断り続ける。

結局誰も見つからず、自分の屋敷で引き取るうか迷った伯
爵。ここは賭けであったが、見事私達はその賭けに勝った。

伯爵が兄様に引き取ってもらうよう準備を始めたのだ。

伯爵は仕事で海外に行くことも、伯爵の婚約者が亡くなっ
ていて、しかもその人が私とそっくりだったことも。

心に深い傷を負っていて、私を受け入れる余裕が無いこと
も、全て知っていた。

そして兄様の屋敷に引き取られることが決まり、私は初め
て兄様と対面した。

けれど私は、この時に一瞬でマウロを裏切ってしまった。

兄様に一目惚れしてしまったのだ。

計画は呆気無く消滅した。それにマウロ側は痺れを切らし

たのだろう。あの日の夜、兄様を殺しにかかった。

しかし、結局は私が彼らを殺してしまった。

その後、屋敷の人達に見つかった私は、彼らに手伝いを求
めた。

あの屋敷の人達は、驚く程主人に従順だった。それは義妹
の私に対しても同様で、兄様の魂が入っていた身体を地下室
の最奥に閉じ込めた。絶対に見つからないよう、細工もした。

屋敷の奥にある兄様の身体は、沢山の花と共にクリスタル
の墓石の中で眠っている。

私は、今まで以上に精神が穢れてしまったらしい。清い心
の持ち主である兄様には、何度謝っても足りないだろう。

数ヶ月前に部下に毒を盛られ、いつの間にか死んだマウロ
に対してだって、心の底から憎んでいる反面、少しだけ感謝
していた。

兄様と私を一つにしてくれて、ありがとうございます、と。

だから私は、地獄に落ちようとも、永遠の苦しみを味わお
うと、構わない。――我ながら、面白い程に狂っている。

胸に手を当てて、兄様、と呟く。

私の中にいるはずの兄様が――あの優しい声で、答えてく
れた気がした。

ビオトープ

鹿児島市立鹿児島女子高等学校 一年

有木友美

どうだい、此処の居心地は。最悪だよ。まるで意味の無い自問自答。水面から吐き出される光は、天使の光か、それとも失明しそうなほど眩しい、悪魔の松明か。

20XX年、日本には、水中で息をすることのできる人間が存在する。原因ははっきりとは分からないが、突然変異の一種だとまとめられている。しかし、物好きな専門家もいるらしく、独自の考察を本にしたためている。

俺が読んだそういう類いの本の中の一つには、「人間関係を上手く構築することのできない、重要な感情が欠如した人間や、常軌を逸した概念を持つ人間」が主に突然変異を起こしている」と書かれていた。政府による見解を大きく逸脱してしまふのを恐れているのか、突然変異であるという根本的な考えは保たれていた。

それから、本には何と記されていただろうか、そうだが、そういう人間たちが本能的に自らが集団生活に適していないことを悟り、水中へ逃れられるように進化した、そんなふう

記されていた。

進化だなんて、水中に逃れたところで生活なんて出来やしないのに。文面に嘲笑している専門家の顔が浮かんで、本を投げ捨てたのを思い出した。

最初に変異のある人間が確認されてから数年たった今年、政府は水中で息のできる人間たち（現在、海人（うじん）と呼ばれている）の生態調査を行うための隔離施設を、見渡す限り森林ばかりが連なる都市の外れに造った。大型のプールが併設されており、現在変異がはっきりと確認されている、少年少女―俺も含めて―五名がこの施設内で生活している。ここでの生活は、精神的に抑えつけられていた家庭での生活よりはマシな気もするが、常軌を逸した人間だの何だの言われて気分を害されないわけがない。

しかし、大型のプールの中で自由に泳ぐこと―俺はどちらかという歩いているが―は楽しいというか、唯一の娯楽だ。泳ごうと思えば泳げるし、息継ぎをする必要が無いからずっと潜っていることもできる。

俺はこのプールの深い深い底を歩くのが好きだ。光がぼんやりとしか差し込まない、無音の世界は、日々のけだるさを忘れるのに打ってつけである。

今日も今日とてここに入り浸っては水底を散歩している。そういえば、もうすぐ昼食の時間だっただろうか。光すらまともに差し込まないところにいるからだろうか、それともただだんに腹が空いていないのか分からないが、あまり空腹

を感じない。だが、時間に間に合わなければ昼食抜きということもよくあるので、一旦上がることにした。変異の影響か、以前より髪が乾くのが早いし、水中に長く居てもあまり疲れを感じない。便利っちゃ便利だし構わないのだが、やはり自分が人間ではないものに近付いているような不安感が重く押し掛かってくる。

食堂に行くと、そこそこ見慣れた少年少女たちがテーブルに行儀よく座っている。

「遅いね」

と日本人らしからぬ白髪を揺らして、この中で一番幼い少女が俺に声を掛けてきた。ごめん、とぶっきらぼうに謝っていつもの席に着いた。隣の席に座っているのは旧クラスメートの禁鳥奏（とどめどりそう）だ。転校したのか、と特に仲が良いわけでも無かったため思っていたが、この施設で再会するとは思わなかった。若干垂れた優しそうな目で俺に問うてきた。

「何してたの？」

「や、いつも通り、プールに居た」

「ふうん、好きだね、プール」

と、訊いてきた癖に、あっけない返事だ。

運ばれてきた食事は、味の薄そうな和食。病院食はこんな感じなんだろうなあ、と口に入れながら思う。俺だって高校二年の食べ盛りの男子だ。こう、ガッツリしたのも食べた。まあ、同じ男子でも、斜め前に居るあの人は、この食事

は食べ慣れたものだろう。俺より一個上の、私立高校の人。名前は思い出せないが、たぶんよく倒れている先輩だ。今も空調が効いているとはいえ、夏真っ只中にも拘らず、長袖のシャツの下にはタートルネックの黒いインナーを着ている。以前チラッと見た個室にも病院にあるような機材が並んでいるため、此処に来る前から病気がちだったのだろう。ごちそうさま、と手を合わせて席を立つ。と、禁鳥がこちらに近づいてきた。

「ねえ、今日も杜鵑（ほととぎす）先輩、ご飯残してたよね、心配だなあ」

そういえばあの人はそんな名前だったな、と思いながら会話を続ける。

「ちゃんと見てなかったけど、そうなのか。……お前あのひとそんな親しかったか？ 心配するほどの仲でもねえだろ」

「え、喋ったこと無くても体調悪そうな人のことは心配するのが普通でしょ？ ……その、ごめん」

「は？ 何で謝るんだよ？」

「……いや、何でも無い」

変な奴だ。いや、この施設に入っている以上俺も人のことは言えないか。

踵を返したあいつの背が小さくなっていく。

……人のことを心配するのが普通、か。俺、普通じゃねえからここに居るんだわ、ごめんな。

食堂の大きな天窓からは、今にも窓を退けて降ってきてそう

な迫力のある入道雲が見える。外は、暑いのだろうか。蝉は、鳴いているのだろうか。此処に来る前にはうつつとうしかつたり、どうしても良かったりしたことが、気になってしまいうのも、人間の悪い所か。

しかし、「普通でない」俺は、その感情すらも「普通」に成れたのではないかという期待にしてみました。だから生きづらいのだろうか、なんてぼんやり考えていた。

その日の夜、何となく寝付けなかった俺は、プールサイドに腰掛け、物思いに耽っていた。すると、小さな足音が近づいてきた。昼間話しかけてきた白髪の少女だ。

俺の隣にすんと、と座り、しばらく無言で足をぶらぶらとさせていた。色白な肌が水面の色を映して、昼よりも不健康そうに見えた。

「わたしの髪の色、変でしょ」

彼女は抑揚の感じられない声で喋った。急に訊かれたため、どう答えようかと黙りこくつていると、彼女は勝手に話し出した。

「私ね、生まれつきアルビノなの。だから、変な髪の毛、気持ち悪い、って言われて捨てられちゃったんだ」

返す言葉もなかった。それを言った彼女は、あまりにも飄々としていた。何だか不甲斐なくなる。こんな幼くて、俺より荒波にもまれるような人生を過ごしてきたであろう少女の方が諦めることなくきちんと、生きているとは。

「お兄さん、此処に居るってことはつまり、同士なんだよね。」

だから、どうか、私を可哀想だなんて思わないでね」

「え？ あ、おう」

少女は、そう言うてにっこりと笑った。不甲斐ないなんて考えている時に話しかけられ、俺は彼女の言ったことをあまり理解できないままに相槌を打った。

「それじゃあ、またね」

たまた、と軽い足並みで出て行った。帰るときまで飄々と、妖精のように駆けていく。何たる屈辱。俺は重い腰を上げて、ため息をつきながらプールから出た。寝付けるかなんて分からない。むしろこの不甲斐なさですます苺えてきた思考が嫌になった。

翌朝。寝起きは割といい俺は、食堂へ向かった。普段は席についても無言でその場をやり過ごす、というか誰も会話を交わさないが、昨夜の少女が話しかけてきた。

「おはよう、お兄さん」

「…おはよう」

「そういえば私、お兄さんの名前、知らない。私は奏頼梢（そうらいこずえ）。お兄さんは？」

「俺は、夕風軽羅（ゆうなぎけいら）」

「かっこいい名前だね。よろしく」

彼女はふんわりと笑った。ぶっきらぼうな対応になってしまつて申し訳ないが、相変わらず大人びた対応だ。勝手に不甲斐なさを感じてもやもやとしていると、禁鳥が隣に座った。

「おはよう」

「はよ」

禁鳥も笑顔は負けていない。へらへらとしていて、何となく今にも泣きそうである。……つて、泣いてねえか、こいつ？

「どうしたんだよ……」

「いや、その……なかなか杜鵑先輩が来ないから……」

「そんならいで泣くなよ……」

「だって、昨日の夜、杜鵑先輩の部屋にいっぱいお医者さんが来てたし、なんかあったのかも」

「いつもの事じゃないのか？」

「あんなに来てるのは初めて見たけど」

俺にはよく分からないが、何か病気でも見つかったのだろうか、気を取り直して食事を口に運ぶ。いつも通り薄い味の食事は、妙にのどを通りやすく、本当に病院食っぽい。もしかして、その杜鵑さんの食事と分けて作るのが面倒で全員これにしているのではないのだろうか、と思いつつ前を向くと、普段杜鵑さんの座っている席を空けて座る奏頼梢と名前の知らない青年が泣いている。何で俺以外全員泣いてるんだよ……と困惑しつつ、食べ終えた器の上に箸を置く、鼻をすすり泣く音だけが天井の高い食堂に無駄に響く。なんだ、これ。とてつもなく気まずい。話しかけるのも席を立つのもためらわれてしまったただただ黙りこくっていると、奏頼梢がもう耐えきれないとばかりに、食堂から走って出て行った。本当に、一体何があったんだ。

「すまないね、気にしなくていいよ」

一緒に泣いていた名前の知らない青年が話しかけてきた。

いや、急に泣き出されたら気にするだろ……と思いいくよくよく着ている服を見ると、例の杜鵑さんと同じ制服である。なるほど、仲のいい友人だったのだろうか。

「あの、杜鵑先輩に何かあったんですかっ」

隣の禁鳥が、単刀直入に質問してきた。さっきまで泣いていたのに、いきなりそんな質問をしていいのだろうか。気にする俺を横目に青年は律義に答える。

「……俺は綾筵寧（あやむしろねい）という。よろしく。青嵐は俺の友人だ。……青嵐は見ての通り生まれつき体が悪くて、持病もいくつもある。だがそれらは治療を続ければ治る可能性のあるものなんだ。昨夜の検査で見つかった病気があったんだ。もうかなり悪い状態らしい」

そうだったのか。にしても、今の話はよくあの人を知らない俺でも少し考えさせられた。そんなに重い病を抱えているのに、こんなよく分からない政府の研究施設に入れられてますますストレスが溜まってしまったのだろうか。禁鳥はまた号泣している。相変わらずだと思いつつ少し気になったことを綾筵さんに聞く。

「あの、杜鵑さんは身体が悪いのに、どうしてこんな所に来たんでしょ？」

此処は政府が作った隔離施設ではあるが、入るのを完全に強制されているわけではない。健康状態に問題がある場合、

入るのを拒否することも出来たはずだ。

「青嵐の両親はかなり過保護で……政府の施設なら病気も治してくれるんじゃないかって此処に入れたんだよ、治る訳ないのに、むしろ悪化してる……」

綾笹さんはかなり苛立っているようだった。早口で説明してから、ああ、最悪だ、なんてこぼしながらよろよろと食堂を出て行った。俺も席を立てて食堂を後にした。

それから一週間ほど経った日のこと。相変わらず寝付けずにプールサイドに腰掛けていた。ばたばたと足を動かす。水面に広がった泡が一つ、二つと弾けてゆく。意味も無く気が滅入る。この一週間で、気持ちはかなり疲弊してしまったように感じる。

杜鵑さんの話は、最初聞いた時は難儀なものだなと、割と同情というか、そんな気持ちを抱いていた。しかし、彼は、状況こそ悲劇的なものであるが、それを除けば、とても幸福な環境に居ることを知った。どうやら、彼の父親は医者で、とても裕福な生活を送っているらしい。その上、母親には大層可愛がられていたそう。入院していた際も子供たちから人気だったという。そんな完璧な「人気者」がどうしてこんな場所に居るんだろう。嫌だ。嫌だ。劣等感に苛まれる。頭の中で鬱憤を積もらせながらふと思った。

可哀想でいいなあ。と。

その時思いました。あの、白髪の少女が言ったことを。

『どうか、私を可哀想なんて思わないでね』

どうして、息が荒くなる。こんな事を思っている限り、俺は惨めなままなんだろうか。それとも、俺だけがバカみたいに惨めだったらしく劣等感を抱えているのだろうか。分からない。まとまりのない思考にますます重い気持ちになりながら、後ろに上半身だけ倒れこむ。

「お兄さんどうしたの」

こちらを見下ろす奏頼梢と目が合った。いつから居たんだ。

「別に」

澄ました顔の彼女は、悲しい顔一つせず、ベテランの女優のように涙を一粒、ぼろりとこぼした。

「あのね、あのねお兄さん。私の話を聞いてほしいの」

「え？ ああ、ああ、良いけど……」

自然に涙をこぼした割には、思いつめた様子で俺に頼んでくる。

「私ね、青嵐さんの事が好きなの。ずっと好きなの。なのに、なのに死んじゃったらどうしよう。邪魔されただけでどうしよう、って思ってたのに」

邪魔されるとはどういうことだろう。他にも杜鵑さんのことを好きな人がいるのだろうか？ でもこの施設に居る人間で女子は彼女だけである。

「ごめんね、お兄さん、私……もう寝るね、おやすみ」

そう言い残して、去って行った。泣き笑いが妙に印象的だった。それにしても。病に犯された青年を好きになるなんて、

彼女はもつと自分の身の心配をした方がいいのではないかなんて思った。不幸も幸せも、よく分からないなあ、と此処に来て改めて思った。

相変わらず劣等感に苛まれて過ごしていたある日。珍しく部屋で本を読み耽っていたら、廊下の方からバタバタという凄まじい足音と、大人が何やらがやがやと騒ぎ立てている声が聞こえた。何があったんだ、とドアから少し顔を覗かせてみるが、この階ではないのだろうか、人気がない。すると、隣室から禁鳥が顔面蒼白で出てきた。

「ちよつと、大変だよ、軽羅君……」

「何かあったのか？」

「その……杜鵑先輩が自室で亡くなってたみたいで……」

「はあ？ やっぱダメだったのか……」

「違うよ、病気とかじゃなくて、胸にナイフが、刺さってたらしくて……」

「どういうことだ？ 少なくともこの施設にはあの人を憎んでいた人なんていないはずだ。……いや、俺は嫌ってただけだから。」

「自殺か？ それとも……」

「綾筵先輩が、刺したんだって」

確かあの、杜鵑さんの友人を名乗っていた人だ。心配している様子だったが、本当は憎んでいたんだろうか？ 人気者も、裏切られるんだ。

なんて、不謹慎にも安堵してしまった。最低だ。

「きつと何かの間違い、だよな」

禁鳥は、優しい目つきでそう言った。俺は、そんなこと言えない。そんな目つきもできない。

未だ何処かから、大人たちの落ち着かないような騒ぎ声が聴こえていた。

結論から言うと、杜鵑さんを手に掛けたのは綾筵さんだった。杜鵑さんが、自分を殺してほしいと頼んだのである。

このまま施設に閉じ込められて長いこと自分を苦しめてきた病に殺されるのは嫌だから、どうか君に殺して欲しい、と。

綾筵寧という男は、幼いころから友人や大切な人が喜ぶことならどんなことでもする性格らしく、それ故に此処へ連れて来られたらしい。杜鵑さんが外に出たいと言えば、連れ去って彼の両親に黙って旅行に行くなど、搜索願を出されてしまったこともあったなんて聞いた。

もちろん杜鵑さんに殺して欲しいと頼まれた際も、喜んで引き受けたのだろう。

犯罪者と化した彼を政府は逮捕することも無く相変わらずこの施設に置いている。この施設に法律はないのか、なんて言いたいけれど此処と刑務所なんてあまり変わりはないのだろうな、と思った。第一、言い方は悪いがおかしい人間が集まっている此処でそういうことが起こるのは初めから想定内だったのかもしれない。

この少人数で、しかも一人居なくなりますます寂しい食堂で、杜鵑さんが居なくなっても尚薄い味の和食を口に運んで、咀嚼する。あの人が居なくなってから味がさらに薄くなったような気がする。気がするだけか、自分が感じにくくなったのか、分からないが。

自分の変化に戸惑うとともに憂鬱になりながら、昨夜の綾筵さんのやり取りを思い出していた。

「あれが青嵐を救う唯一の方法だったんだよ」

言い訳がましく、自分こそが正しいというような口ぶりであんなに語りかける。

「だってあんな歪んで、恵まれた家庭で、精神がおかしくならない訳ないじゃあないか」

実は、杜鵑さんの家庭環境は、恵まれているとはいえ裏にあらゆる事情があったのである。私立の学校に入学することも、施設に入ることも、病院に籠りきりで治療されることも、本人が望んだことではなかった。

早くこの檻から出てしまいたい彼にとって綾筵さんは救世主だったが、社会と彼の家族にとって綾筵さんはただの都合の悪い存在であった。

がんにかかった途端、施設は過度ともいえる治療を取りやめた。穏やかに死にゆく方が彼のためだろうと。もちろん彼は自分が癌に罹っていることなど知らずに亡くなった。知らない方が悲観的にならずに済むだろうと。

彼は、最後まで思われ、その思いに殺された。

「彼のためを思ってたって、なんだよ」

隣で相変わらず、ぼろぼろと涙をこぼしている。自責の念か、悲しさからか、やり切れなさからか。

「もっといっしょに生きたかった」

綾筵さんが彼の家族に嫌われる存在であったならば、きっとその事実にも彼は悲しんで、苦しんでいただろう。

今ここで、俺が、あなたも一緒じゃないですか、なんて言ったらどんな反応をするんだろう。ただの推測がどんどん悪化していく。俺の悪い癖だ。

人の形を保っていれば、みんな人間だ、人間なんてろくなものじゃねえな、俺も、この人も、此処に居る奴らも全員、結局は醜いままで。

水の中に居たって、人ごみの中に放り込まれたって、俺らは生きていけない。その事実が変わらない。

生きたかったり、死にたかったり、面倒だ。

今日も今日とて、変わらない緩やかな日々。俺がこの施設に来てからちょうど一年たつのではないか、とカレンダーを見て思う。此処じゃ外の天気ぐらいしか分からないため、カレンダーを見ないと今が何月かさえはつきりしない。

この施設は、四人のまま半年くらい続けてきたが、来月に新しく変異の見られた少年少女を受け入れるらしい。面倒なことにならなきやいいけど。

俺がネガティブなもの、禁鳥が泣き虫なもの、奏頼梢が未だに杜鵑さんの事を好きなもの、綾筵さんが彼の事を思ってお墓に細工とかしているのも（どういう細工なんだろう？）変わらない。

みんな、変わっていない。よく分からない薬を飲んでも、水底に潜っても、意味の無い検査をされても。

まだ昼食の間ではないが、食堂に立ち入る。よく考えてみれば、この大きな天窓は、ここにしかない。

「外は暑いのだろうか、蝉は鳴いているのだろうか」

いつか思った、「人間臭い」ことを思い出して嫌になるが、今も思ってしまう。

天窓に向かって、テーブルに常時置かれているカトラリーの中から取ったナイフを投げて。

自分の奇怪な行動に、脂汗がどっと出る。もう遅い。

ああ、俺もとうとうすっかり気が狂ってしまったのだろうか。もう、こんなんじや。

後ろから足音がして、かつての少女が柔らかい、少し大人びた笑顔で、楽しそうに言う。

「あの空の向こうに、きっと青嵐さんが居るのね。ねえ、ねえ、抜け出そうかな」

笑顔は、既に狂ってて。否、会った時から狂っていたのか。俺の顔面蒼白な、ぎこちない笑顔も狂っているのか。

駆けてくるたくさんの大人たちのものであろう、足音と、やけに壮大な青空と、零れてくる蝉の鳴き声。

天使の光も悪魔の松明も、無くていいから、蝉の鳴き声なんて、聞こえなくていいから、夏の暑さなんて感じなくていいから、水底に沈ませて。

勿忘草

鹿児島市立鹿児島女子高等学校 一年

日向 陽

「今日の深夜二十三時、河元公園に来てください」

「は、え、」

間の抜けた声が漏れる。それも仕方がないということを重ね理解して欲しい。相手はクラスの委員長。二年にして放送部部长を任されるようなしつかり者だ。

言わずもがな、顔もいい。淡く赤みのかかった頬にすつとした鼻、何か色気さえ感じる薄めの唇。ほっそりとした外見に似合わず案外大食いで、笑った時に片方だけできるえくぼが何とも言えず可愛げがある。少女漫画に描かれるような「可愛い女の子」だった。

そんな彼女、椎木雅の先程の言葉、俺に用件だけ伝えて背を向けるこの感じ……。これは、まさか。

「おおー」

雅が背を向けるのとほぼ同時に、先刻まで話していた友達がどよめく。やはり皆、考えることはそう変わらないようだ。

「だけど告白なら、深夜二十三時っておかしいよな？」

そんな俺の素朴な疑問は、「顔が見える時間帯は恥ずかしい

んだろ」なんてこじつけのような理由でかき消された。

嬉しくないわけじゃない。なんせ相手はあの雅だし、それに相手が誰であれ好意を抱かれることは、誰だってきつと嬉しいはずだ。無論俺もその一人。けれど素直に喜べなかったのは、断らなくちゃいけないからだ。

時刻は二十二時三十分。親の寝室の電気が消え、話し声が完全に止んだのを確認すると、そっとベッドから起き上がる。暖房の効かない廊下は、嫌になるほど冷たい。ぐっと眉を寄せて寒さを堪えると、つま先立ちで歩いた。忍び足で玄関に向かい、足元に駆け寄ってくるコロの顎を撫でてやる。クンクンと鼻を鳴らしながら、嬉しそうに舌を出していた。

「いい子にして留守番しとけよ」

ぼんぼんと“行ってきます”の代わりに頭を撫でると、俺は家を出た。

「断るときってどう返せばいいんだ……」

くしゃくしゃと髪をかき上げてはそう口にする。元々告白されることだって初めてなんだ。断り方なんて分からない。凍るような風が項を駆け抜け、思わず肩を竦めた。

「素直に好きな奴居るからって言えばいいのか？」

ううん、と唸りながら腕を組む。どうにか傷付けずに断り、尚且つ友情関係を保つ方法はないかと試行錯誤を繰り返して

いると、あつという間に公園に着いてしまった。北風に冷えて切ったベンチにそつと腰を下ろす。かじかむ指先をポケットにしまい込み、首をすくめた。流石にこの時間帯はきついな。もつと厚着してくればよかったと今更ながら後悔する。

なかなか、雅はやってこない。そろそろかと腕時計を見ると、針はちょうど二十三時を指したところだった。

「すいません、遅くなつてしまいました。待たせてしまいましたか？」

突然背後から声を掛けられ、びくつと肩を揺らして振り返る。

「い、いやいやそんなこと。俺も今来たばかりだよ」

バクバクと騒ぐ心音を隠そうとするあまり、声が上がってしまった。

「それならよかった」

雅はふんわりと笑つて、小さくため息をつく。

「それで、話つて」

ベンチから立ち上がり、口にする。この後に続く言葉は、あまりに予想外だった。

「ああ、貴方は実はロボットなんですよ」

「は？」

いやいや可笑しいだろ、そんなの。当然みたいに言うなよ。

“ああ、そう”なんて受け入れられる事実でもなく、ただ額を押さえる。

「誰が貴方を人間だと教えましたか？」

可愛らしく首をかしげて、当然だといわんばかりに彼女は問う。夜道を照らす街灯が、彼女のためのスポットライトのようだ。

おいおい、どうせ嘘を吐くならせめてもつと現実味のある嘘にしてくれよ。俺は生まれてこのかた十数年、人間として暮らしてきたんだ。今更そんな嘘に騙されるほど阿呆ではない。

「誰に教えられるも何も、俺は人間だ。あんた、嘘も大概にしてくれよ」

わざわざ深夜に公園にまで呼び出しておいてそれか。呆れた、そんな言葉では足りないような感情が白い息に変わって空気に混ざる。

「では、何故貴方はご自分が人間だと言い張れるのです？」

「またも疑問形の言葉が飛んでくる。答えるまでもないような、俺を馬鹿にでもしているかのような言葉が。」

「俺は普通の人間と同じように飯も食うしトイレにも行く。」

風呂にだって入るし、空が飛べるわけでもない。そんな生活をこれまでの十七年間続けてきたんだ。これだけで人間だつて言い張るには充分だろ」

「十七年間」

彼女が復唱する。その通りだ、ついこの間十七回目の誕生日を迎えたのだから十七年間だ。小さく一度頷いた。

「その十七年が植え付けられた記憶だとしたら。本当は貴方

が、昨日作られたロボットだとしたら」

否定の言葉が紡げない。

なるべく動揺を隠すように、俺は乾いた笑いを零した。

「そんな馬鹿げた話」

「あるわけない？ そうも言いきれませんよ」

光のない目で少女は微笑む。何か言い返そうと口を開くと、視線の先には既にその子は居なかった。

「なんなんだよ、もう」

ぐしゃぐしゃと前髪をかき上げる。今夜はきつと眠れないだろう。再び大きな溜息を吐き出すと、道に転がる空き缶を蹴飛ばした。

次の日、学校。周りの皆にとっては何も変わり映えしない一日なんだろうが、俺にとってはずっと雅に監視されているような気がして気が気ではない一日だった。何度か目が合った時には雅のやつ、首傾げて笑ってるし。いつもなら見惚れてしまうであろうその笑顔が今日は不気味に見えて、そのたびに俺は顔を顰めた。

お陰様で弁当も見事なまでに無味。考え事のせいで弁当の味がしないなんてことが本当にあるのか、なんて感心しながら箸を動かして口に卵焼きを放り込む。案の定、全く甘くない。

「秀樹、ぼーっとしてるとそれ貰うよ」

ずっと向かいの席から橙色の箸が弁当に伸びてきて、反射的に避ける。

「ちえっ、けちんぼ」

すかっと弁当箱の横を通った箸。その犯人は向かいの席から小さな頃から変わらない、可愛げのない不満顔を浮かべて俺を見ていた。

「これは俺の弁当。他人の物を取るなって小学校で習ったろ」カチカチと箸を鳴らしてはウインナーを口に放り込む。

「あー、それ狙ってたのにい」

なんて那央はほざいていたが、知ったこっちゃねえ。そんなことより、聞きたいことがあるんだ。

「なあ那央、俺ってロボットなの？」

じっと目を見つめ、真剣な声のトーンで問いかける。那央は何度かばちばちと大きな瞳を瞬かせ、それから酷い顔で吹き出した。

「秀樹、今日ずっとぼーっとしてると思ったら、そんな、そんなことで。どうしたの、厨二病にでも目覚めた？」

ひいひいと腹を抱え、目には涙さえ浮かべて机を叩いて大笑いする。俺が夜も眠れず一日中考えていた疑問は、散々笑われた挙句に厨二病疑惑までかけられてしまった。

「笑うなよ。昨日雅に言われてさ、俺もう今日ずっと悩んでたんだぞ」

「あるわけないよそんなの、何真に受けてるの」

那央は目元を指で擦っては

「これは黒歴史確定だ」

なんてけらけらと声をあげて笑う。

「だ、だよな、ありえないよな！」

やはり物心つく前から付き合っている友人だけあって、那央に否定されたことの安心感は言葉に表せないほどのものだった。

「だって秀樹、家はずっと隣だけど何もそんな噂聞いたことないし。それに思考回路とか、どこをどう見ても立派な男子高校生だし」

ふっと皮肉交じりに那央が笑う。

「なんだよ、その笑いは」

「しーらないっ」

知らないなんてことがあるかよ、と口を開いたが、

「ごめん秀樹、昼練あるからそろそろ抜ける」

なんて那央は手を振り、部活の練習に行ってしまった。

「あるわけない、か」

“あるわけない？ そうとも言い切れませんよ” 昨日の雅の言葉が、頭の中で繰り返された。

放課後、皆部活へと行き、風の音だけが通り抜ける教室。

クラスメイトの体温が少し残ったままの部屋には、俺と雅の二人きりになっていた。静かに窓際の席で本を読んでいた雅は、そっと椅子を引いて俺の方へとやってくる。その動きさえ絵になるのだから、此奴は本当にずるい。

「どうでした？」

「どうもこうもねえよ」

ふふふ、と彼女は右だけにえくぼを作って笑う。開け放たれた窓から吹き込む北風に、彼女の艶やかな髪がふんわりと揺れた。

「貴方はロボットですよ。本当の“糸瀬秀樹”はもう」

「死んだのか？」

「そういうことです。事故死、あまりに突然の別れだったようですね」

「だからってなんでロボット……誰がなんのために。わざわざ復元しなくたって、そのままでもよかったんじゃないか」

「私が貴方を創りました。貴方の御両親が寂しがっていたから。より人間に近いロボットを作る」これは元々進められていたプロジェクト。……だけどあまりに完璧すぎたのね。心を持ったロボット、つまり貴方は回収を強いられました。だから私は此処に来たの」

「創った？ ってお前、幾つだよ。高二ってことは俺と同じ十七だろ。そんな技術あるわけない。というか何者だ」

「あははは、面白いことを言うのですね。今になっても貴方は御自分が十七だと？ 私は機械造りを職としている者です。年齢は秘密。今はもう心を持ったロボットを作れるような時代、見た目年齢を若返らせることなんて朝飯前。……つまり、そういうことです」

「俺を監視して回収するためにこの高校に潜入していた」

「ふふふ、その通り」

にんまりと齒を見せて笑った彼女の目に光はない。背筋に寒気が走った。

「それなら早く連れてけばいいじゃねえか」ごくりと唾をのむと、そう強がり放った。その言葉に驚いたのか、僅かに雅の眉が上がる。

「……ええ、確かにそうですね」

「じゃあ」

「けれど、まだ貴方を壊せない理由があるんです」

なんだよ、そう問う前に雅は手を振った。

「それじゃあ、私はこの辺で」

「おい、まだ話終わってな……」

またこれだ。言葉を言い切るころに残っていたのは、弾むような彼女の足音だけだった。

「雅、彼奴、本当になんなんだ」

わからねえな、と肩を落としては呟く。

「秀樹、雅と話してたから今日こんなに遅かったのかあ」

なるほどなるほど、といつの間にか隣に立っていた那央が頷く。

「そうなんだよ。全く、早く帰らせろっての」

困るよ、と笑っては、「なー」と同意を求めて那央を見る。いつものように眉を下げて笑う姿が、今日は何処か寂しげで何かあったのかと心配になる。

「あ、もしかして待っていてくれたのか。待たせてごめん」

両手を顔の前で合わせ、謝る。那央は慌てたように目を見開き、

「ううん、偶然校門で見たから来ただけ。たまたまだよ」

「それならよかった」

「うん。……あ、見て、あそこの花屋さん新しい花が入ったっぽい」

綺麗、と那央は店頭に並ぶ夕日に溶けるような色の美しい花を指さした。

「本当だな。夕日みたいで綺麗」

花を見る、那央の横顔を見る。

単純に、当たり前に那央と一緒にたわいもない話をしながら帰るこの時間が楽しくて仕方がない。後ろから差し込むオレンジが、二人の影を伸ばしていた。

今日は昨日よりも一歩春に近づいたような気温で、やけにぐっすりと眠れた。ぐっと伸びをすると、一度大きく息を吐く。

「今日は暖かくて、よく眠れたな」

あくびと一緒にそう呟くと、後ろから何かで頭を叩かれた。頭に響く鈍い痛み顔に顔を顰めて振り返る。

「何すんだよ、那央」

「眠気を覚ましてあげようと思って。秀樹、後ろから見ててもわかるくらい今の数学の時間爆睡してたからさ」

ノート貸してあげる、と一冊のノートを差し出された。せんきゅ、と笑ってそれを受け取る。那央の手のひらに幾つか見えた豆が痛々しくて、そのまま手を引き寄せた。

「えっなに」

僅かに目元が赤い気がするの、この気温のせいだろうか。違ってもいいけど、なんて思いながら手を見つめる。

「お前は頑張りすぎなの。部活だってまた自主練とかちまちなまやっつてんだろ？ ちゃんと休めよ」

細長い指に卵型の爪が綺麗だ。俺よりひと回り小さなその手を握りたくなる。那央はふっと笑うと、

「そういう秀樹は休みすぎ。確かに休むのも大事だけど、やるときはちゃんとやりなよ」

と言った。笑うとへの字に下がる眉が愛くるしい。

「当たり前だろ。俺はやるときはやる男だ」

「はいはいそうですか」

再び、口元を押さえて那央は笑う。俺もつられて吹きだした。やっぱ好きだなあ、と。確かに俺はそう思った。ロボットなのに恋をしているんだから、全く滑稽な話だ。まあ、そんな日々もおそらく、もうじき終わるわけだが。

俺がロボットだと知ってから数日目の放課後がやって来た。

教室に二人きりになると、いつものように雅がやってくる。

「今日はなんだ」

目を伏せ、ため息交じりに問うた。

「えへへ、今日はですね、伝えたいことが御座いました」

ちらりと此方を見た彼女と目が合う。宝石のように深く儂げなその瞳に吸い込まれそうだ。小さく首を縦に傾けた。

「私が貴方を創った理由ですが、先日告げたものの他に本当はもう一つあるんです」

静かに頷き、先を促す。すると躊躇いがちに雅は続けた。

「実は私、生前の貴方に恋情を抱いて居りました」

なるほど、と思わず呟く。これで大概の辻褄が合った。

「ええ。死んでしまった貴方を機械化して創ったのもこの心情から。…：なかなか壊せずにいたのも、貴方が秀樹さんそのものだったから」

俯く彼女の声は酷く震えていた。

「お恥ずかしい話ですよ、自分の創った作品に恋に落ちるなんて」

そう呟いた彼女の頬に、透明なしずくが伝って行く。ごめんなさい、と蚊の鳴くような声が聞こえて確かに胸がつまった。白く華奢な雅の指が、頬に伸びてくる。何も言えなくなつて、その手に手のひらを重ねた。温かい、人間の体温だ。そつと目を伏せた。

「ねえ、私と一緒に逃げないかしら」

その言葉に、静かに顔をあげた。

「大丈夫、私たちならきっと」

雅の濡れた長い睫毛が揺れる。どこか遠くで鳥が鳴いた、気がする。ゆっくりと首を縦に一度振り、続けた。

「逃げたい、生きたい。……けれど少し、時間をもらえないか」

此処から去るとして一つ。ただ一つ、心残りがあった。

「ええ。出発は明日の夜でどうですか」

「ああ、一日あれば充分だ」

「それじゃあ、明日の二十三時に、河元公園で」

約束の刻まで、あと二十八時間。

枕元で響く黒電話の音に叩き起こされた。目を擦り、アラームを止めたばかりの携帯を見やる。それは午前六時を指していた。手をつけて上体を起こすと、顔も洗わないまま便箋を取り出す。手紙なんてものを書くのは、一体いつぶりだろうかと僅かに笑う。……否、本当はきつと初めてなんだろうな。俺が創られたのはついこの間なのだから。

『那央へ』丁寧丁寧に、想いを書き綴る。募った想いはぐちゃぐちゃに混ざって溢れ出し、到底言葉になんて出来ないような気がした。かしまった言葉を重ねて、改まった言葉を書き連ねて行く。

俺らしくねえな、なんて苦笑を零してはその便箋で紙飛行機を折る。一直線に塵箱へ飛んで行って、落ちた。

書き直した。満足がいくまで何度だって書き直そう。次は普段の俺で、飾らない言葉で想いを書き出す。格好悪くて情けない、今までの俺の気持ちを書き綴った。伝えたいことを全部詰め込んだ手紙の完成だ。

このくらい格好悪い方が俺らしいな。皮肉交じりに笑っては指先で丁寧便箋の端を重ね、二つに折った。

次は、あの場所へ行こう。パークを羽織ると玄関の戸を開け、スニーカーのかかとを踏んだ。

約束の刻まで、あと十二時間。

時計の針は、十の位置で重なっている。残り十分で、この街にはさよならだ。去年のクリスマスに那央に貰ったマフラを首に巻き、履き慣れたスニーカーを靴箱から取り出す。玄関の戸を左手で開くと、冬の終わりの空気が、つんと鼻をかすめた。

「寒っ」

外に出るなり、一度くしゃみをする。ぽつぽつと街灯が照らす路地を、光の中を渡るように歩いた。隣の家の前で立ち止まり、郵便受けに手紙を差し込む。鉄の温度が指を突き刺した。

「遅いと思ったら、やっぱりここでしたか」

透き通るような声が夜に溶けて、そっと振り返る。

「準備はできましたか？」

「ああ、これで大丈夫、終わりだ」

郵便受けの下に、硝子瓶を一つ置く。指先で撫でては、

「ありがとう」

と呟いた。

さあ、逃避行の始まりだ。

*

土曜日、午前六時半。いつものように新聞を取ろうと郵便箱を開くと、新聞に加えて一通の手紙が入っていた。淡白なデザインの手紙には、彼奴にしてはやけに綺麗な字で『那央へ 秀樹』と。まったく、先に親が見たらどうしてくれる。

仕方ないなあ、と小さく笑うと、ポツケに手紙を押し込んで扉に手をかける。ふと郵便受けの下に見慣れぬ薄紫の花が置いてあるのに気付く。一度手を止めて、小さく透明なその花瓶を抱き上げた。確かこの花は……早まる鼓動を隠すように駆け足で部屋に戻り、蝶番を鳴らして扉を閉める。ベッドの縁に腰を掛けると、窓際に花瓶を置く。息をのみ、丁寧に封を開いた。『いきなりごめん』で始まったその手紙には、何度も書き直した痕がある。そこには、わけあってこの街を出なければならなくなったこと、今までの感謝、謝罪、……いろいろな事が詰め込まれていて、すぐには内容が理解できなかった。そして何より理解できなかったのは最後の文だ。

『最後にごめん。これだけ伝えさせて。ずっと那央のこと、好きだった』

何度も何度も、その文章を読み直す。嘘だ、そんなそぶり全くなかったじゃんか。恋人みたいだからかわれた時、那央はただの幼馴染だって怒ってたじゃないか。嘘だ。うそ

だ。綺麗な字で書かれた手紙が滲んで行く。目元がじわじわと熱くなつて、瞬いた。熱い雫が、繰り返す手の甲に落ちてくる。

「いまさら遅い、ばかっ……」

誰にも届かないであろうその声は、酷く潤んでいた。

「もしかしてあの話、あの時から何か」

はっと顔をあげる。そうだ、考えてみれば『俺ってロボットのなかかな』なんて突拍子もない事を聞いてきたあの時から、彼はおかしかったんじゃないか。

どうしてあの時自分は、笑って返したのかな。本当は何か困っていたのかもしれないのに。どうしてもっと早く気づけなかったかな。幼馴染で、好きな人なのに。沢山の疑問符と後悔とが混ざり合って、吐き気さえしてきそうだ。もしかして、なんて淡い期待を抱いて携帯を開く。昨晚二十三時から投稿のない秀樹のアカウントに、連続してメッセージを送信する。

『今手紙見た、あれほんと？』

『もう行っちゃった？』

『行っちゃったかな』

『ねえ』

『ずっと好きだったのは一緒だよ』

一向に既読はつかず、祈るように携帯を額に押し当てた。

一度深呼吸をして、再びメッセージを打つ。

『今までありがとう』

窓際に置いたままの勿忘草が揺れる。硝子細工みたいに脆く、淡く見えた。

花言葉は、「私を忘れないで」「真実の愛」だと聞いた。

朝日に照らされて透明なその花は、今にも消えてしまいうに儚かった。

『R・I・P』

鹿児島市立鹿児島女子高等学校 一年

甘屋 魅斗

「ようこそ。音楽コンサルタント『R・I・P』へ」

澄んだ声がフロアに響き渡った。声の主は、細い背中を僕に向けて、遠く離れたデスクの横に立っている。ブラインドの紐を引いたようで、燦然と夕陽が差し込む窓の外を見据えていた。顔は見えずもなかつたけれど、その後ろ姿になんとも言えない懐かしさを覚える。

「私は成島冴。この会社の社長だよ。よろしくね、新入社員君」

栗色の長髪を揺らして振り返る。視線が交錯した。社交辞令の微笑みが驚きをはらむ。数度の瞬きを繰り返す。反応に遅れたものの、よろしくお願います、と会釈をした。応えがなく、変だと思いつつも顔を上げると。

彼女の瞳は僕をとらえたまま、信じられないというように涙でいっぱいになっていた。

「……ねえ、私の事、覚えてる……？」

彼女の口から掠れ声が漏れる。

突如、吹かないはずの風が吹いた気がした。

記憶の奥底に沈んでいた澱が、みるみるうちに洗い流される。垣間見える幾千もの走馬燈の中に、目の前にいる女性――昔生き別れた恋人――の笑顔が映った。

今まで一体どうして、こんなにも大切なことを忘れていたんだろう。

木場忠。18歳。自分で言うのも悲しいが、ごく普通の、どこにでもいるような青年。特に何も目立つことはなく、平凡な日々を送ってきた。心のどこかで、きっと自分はそれなりに生き、それなりに過ごしているだけだと。高を括って諦めていたのかもしれない。

今この瞬間を迎えるまでは。

「会いたかった……！ ずっと、ずっと、会いたかったんだから！」

小走りで近付き、ひし、と抱き着いて僕の胸に顔を埋める。愛おしさに目を細めながら、抱き返して彼女の頭を撫でた。

「待たせてすみません」

「うん……」

いいよ、と呟く彼女の涙をそっと拭う。

傾きかけた陽が、もう地平線と平行になっていた。

正直、こんなことになるなんて僕が一番予想していなかったに違いない。昔の恋人―この世界では成島冴という名前だそうだ―にまるで引き付けられたように再会し、失っていたすべての記憶を取り戻してしまふなんて。ただし、記憶といつてもこの世に生を受ける前のものだ。

説明するならば、僕らは昔、魂として人間の世界とは違うセカイに生きていた。平たく言って、この国で言う付喪神のようなものだと考えていた。とはいっても何も特別なことは無く、表すなら「楽器の名前を持つ人間」。

大切に使われ、持ち主の強い思いが、願いが宿り、実体化した楽器の魂という存在だ。そのためか、姿形はさほど人間と変わらない。

たくさんの楽器の魂たちが集まった小さなセカイの中で、さほど人間と変わらない暮らしをしていたのである。

因みに、彼女はホルン、僕はトロンボーンと呼ばれていた。恥ずかしながら、前世（昔や以前いたセカイと言いつけるのも何なので、これからは前世に統一する）では結婚までした恋人同士である。

それなりに平和に暮らしてきたが、あるとき、長年対立関係にあった魂同士で殺し合いが起きてしまった。その火種は瞬く間にセカイ中に広まって、混乱さえする暇もなく、魂たちは奈落の底に叩き落された。狂ったように殺し、殺され続

けた。もはや何が目的かもわからないままに。

それに僕らも巻き込まれ、命を落とす今に至る。胸元に赤黒い染みを広げた彼女の、消えゆく心臓の音を聞いた。冷たくなった体を抱いて、泣いた悲しみの傷は今でも生々しく残る。

「最期に会えたのがキミでよかった」

そう言っただけ息を引き取った時、もう二度と会うことはできないのだと思った。思っていたけれど。

今日の前にいるのは紛れもない彼女自身で。前世と変わらぬまま、こうして言葉を交わし、肌を触れ合っている。

それだけで、僕は幸せでたまらなかった。

「気を取り直して、入社おめでとう。トロンボーン。今の名前はなんていうんだい？」

腕の中の彼女が、涙を拭いながら上目遣いで尋ねた。破壊力にたじろぎながら、なんとか答える。

「き、木場：忠、です、ホル、えつと：冴さん」

「いい加減さん付けはいいよ？ あと敬語じゃなくても：」

「！？ い、いえ：：まだそれは：：！ それに、今は冴さんの方が年上です」

前世は僕のほうが年上だった。だが敬語が崩れたことは無いし、自分でもそれ以外話せる気がしない。恋人だった彼女に何度も敬語じゃなくてもいいと言われたのが懐かしい。そして、またそのやり取りを繰り返すことになるとは思っても

いなかった。

「むゝ……私まだ24歳だよ！ あと年齢なんて関係ないし……」

「に、24歳……!?!」

衝撃的な数字に目が飛び出る。

「若すぎないですか……!?! その歳で社長、……ホ、冴さんは凄いですね……とてもそんな風には見えない」

それを聞いた彼女はにっこりと笑って、僕の頬をみゆ、とつねった。

「なあに？ それは私がつと年増に見えるってこと？」

「痛ッ！ いや、いやあのそういうことじゃなくて……!」

ホルンさんが大人っぽくて魅力的でそういうふうに見えるってことで、決して

「な」

わたわたと慌てて誤解を解こうとした言葉を聞き、彼女は顔を真っ赤にして反論してきた。

「や、やめてよ……! お世辞でも嬉しくなっちゃうから、そんなこと言われたら怒れないじゃん、馬鹿……そういう忠は何歳なのさ！」

お世辞じゃないですよ、と返すと、手で顔を覆うずくまった。いつ見ても可愛いと思う。

「えっと、18です。今年で19歳になりますね」

「じゅ、じゅうはち……!?!」

今度は彼女が驚く番だった。

「え、未成年？ほんとに？」

疑ってかかる彼女。でももう結婚はできる年齢ですよ、と出そうになる言葉をすんでのところで飲み込んだ。

「本当です。まだ高卒ですよ」

「6歳差……」

だけど関係ないよね、年なんて、と自分に言い聞かせるように眩く彼女を横目に、窓からすっかり暗くなった空を眺める。ふと目を戻すと、彼女は何か言いたげに口を開いた。

「ねえ、キミは」

絞り出すように告げる。だが、続きの言葉を聞くことは叶わなかった。

途端、終業を告げるベルが鳴り響く。重なって掻き消える声。きつちりと8回、時を告げた後に何事もなかったように静まり返った。

「何て……言ったんですか？」

どうしても気になった僕は、彼女の機嫌を損ねないように問いただした。だけれど、内緒、と口元に指を当て微笑まれ、なんとも言えないまま心臓の音だけが大きくなった気がする。「もう頃合いだね。今日はもう帰るといいよ」

改めて時計を確認した彼女はそう言う。

「はい」

「あと明日は、少しだけ早く来て欲しいんだ。始業時間よりもね」

意味深長なことを告げられる。これは、少しだけ期待して

もいい流れなのだろうか。

「じゃあ、また明日ね」

ひらり、手を振ってそのままドアを指し示す。

「はい、また明日」

ノブを握った。そのまま押し開け、敷居の上で軽く会釈をする。来た時と同じ階段を降りて、着いた先は下の階。見れば、社内ももうちらほらと人が残っているぐらいで、電気の消えている部屋が多かった。正直、今日はほぼ何もできなかった後ろめたさがあったが、明日のため、と帰路についた。

「今日は施設の確認と、平常時の仕事について教えるよ。案内も兼ねてるから私についてきて」

朝、僕が自分の配属された部署に入るや否や、おはよう、の前に彼女はそう言い放った。

「……おはようございます」

いきなりのことに頭が追いつかず、口からは挨拶だけが漏れる。というか冴さん、なんで僕が座るはずの椅子に座ってるんですか？ 約束の時間より早く着きすぎってしまった、とは思いついて、新入社員らしく雑用の仕事でも貰おうと思ったが、冴さんはその上を行っていた。手持ち無沙汰のまま立ち尽くす僕を見かねたのか、彼女はぐい、と僕の手を引き体を寄せる。

「とりあえず荷物置いて！ タイムカード押して！」

「あ、あの！ なんてこんなにいきなり朝にするんです

か！？」

僕その言葉を聞いた彼女は、きよと、と首をかしげる。「言ったじゃない？ 今日は少し早めに来てって。」

そういうことだったのか。恥ずかしいからどうとは言えないが、心の片隅で少しだけ期待していた僕を殴った。というか社長。こんな朝早くから出勤しているんですね？

「昼から取引先との会議が入って、朝しか時間が無くなっちゃった」

そう言って彼女は悪戯っ子のように笑った。

朝の社内は昨日よりも広く感じた。昨日も、一通り基本中の基本ともいえる説明を終えた後、社長室に挨拶に来いと言われ、それなりに社内を歩き回っているのだ。(途中で迷いかけたのは秘密だ)人がいないせいなのか、閑散としている廊下に揺れる木漏れ日が映し出される。都会とは言えここはかなり良い立地のように、窓を覗くと遠方に緑が見えた。

「大抵の仕事の部署はこの階にあるから、一周回ればたどり着くと思うよ」

3階の廊下を案内されながら歩く。この会社は見たところ、中規模より少し大きい会社のようにだ。部屋の数、フロアの広さ。どこをとっても他の会社に大きく勝る。だが、働いていると思われる人数と比例せず、いささか広すぎる気がしないでもないのだが。

「そして、ここがキミの所属する人事部署。さっきのところ

だよ」

「どうやら、一通り案内を終えて戻ってきたようだった。」

「次は上と下どっちがいい？」

ほんとのところ、この階以外特に見どころないけど。と苦笑する彼女に、じゃあ、と下を選択した。

薄暗い階段を降りる。中間でフロアを示す蛍光灯が、ちかちかと点灯と消灯を繰り返していた。「そろそろ替えないとね」と呟く彼女を横目に、一段一段を踏みしめながら、ちよつとした違和感を覚える。

「あ、」

「どうしたの？」

「いいえ、なんでもありません」

そう言って笑顔に向けた。

そうして、僕たちは1階から4階まで全てを見終え、社長も会議に行く時間となったのである。

「よかったですらお見送りしますよ」

そう言えば、じゃあ、お言葉に甘えて、と微笑まれる。

会社の入り口を出ると、黒い車が停まっていた。真横に立っているのは、長身の美男。執事のように、というのが正しいだろうか。手袋に黒スーツ、片眼鏡という装いをしており、どこか上品な雰囲気漂わせる。

「社長」恭しく礼をし、ドアを開く。ありがとう、と軽く礼をする、軽い足取りで後部座席に腰を下ろした。

「じゃあまた後でね」

窓から手を振る彼女にはい、と返事をする。車はエンジンをかけたと思うと、道路を駆け、やがて見えなくなった。

通常業務に戻ろうと自分の席についたのは、始業のベルが鳴る少し前だった。一人の女性が話しかけてくる。

「おはようございます！ 新入社員さん！ 私は羽多野りり。今日から仕事に慣れるまで、貴方に教えてサポートする人です！」

肩ぐらいまでの髪に、口元ぼくろが印象的だ。多分、前世でハープと呼ばれていた女性だ。

「なのでよろしくお願ひしますね！ 忠さん」

それなりに親しくしていたため、僕のことを覚えていないはずはないのだが、一連の流れからきつと前世の記憶はないのだろうと結論付ける。

「よろしくお願ひします」

深々と礼をする。

「では、まずはパソコンでの基本動作と応用を教えます！ 人事部はデスクワーク、意外と多いんですよ！」

頑張りましたよ！ と張り切るりりさんに、はい、と返事

し、作業の手順をなぞる。まだ入ったばかりだからだとは思
うが、ある程度こなせる内容だった。りりさんの方も、最初
こそは少し驚いていたが、打ち解けやすいと思ってきたら
し、たまに雑談を交わすようになってきた。

「そういえば社長さんとはお会いしましたか？」

「はい、昨日社長室に呼び出されて……」

「あの社長室に！？」

突然敬語が取れ、砕けた口調で返される。

「ご、ごめんなさい！ あの、社長は、めったにあの部屋に
人を呼ばないんです。それなのに忠さんは……入社したてな
のにすごいですね」

疑問に思う真実を知った。何故？ てっきり冴さんは新入
社員は全員、挨拶に呼び出しているものかと思っていた。そ
れに、今年の新入社員が僕一人だけだということにも驚いた。

「普通、そんなことありえませんか！ だってこんなに会
社広いのに！」

「……ですね。普通は……」

言いかけて口をつぐむ。普通は、一人しかとらないなんて
ありえない。その現実が僕の胸の中に残ったまま離れない。
もしや、と考えたことは胸の中にしまっておいた。

時間も進み、昼の休憩時間となった。陽は既に高く昇り、
あたたかい空気が眠気を誘う。

何の気の迷いか、廊下に出て自分の中の空気を入れ替える

ことにした。社内の窓は開け放たれ、換気が行き届いてい
るため部署よりも涼しげに感じる。

一人で廊下を歩きながら考えた。階段や部屋、この会社の
構造のこと。僕だけが挨拶に呼ばれた理由。たった一人の新
入社員。不可解な点が多すぎる、どうしてそんなことが――。

「貴様」

ふいに後ろから声をかけられ、飛びのく。

振り返って見てみると、そこにはさっきの運転手が立っ
ていた。彼女を取引先に送り届けた、あの運転手。透き通った
白い肌と銀髪。端正な顔つきと高身長は、スーツをここまで
着こなせるのかと思ってしまうほど。だが、この人、どこか
で見覚えがあるような気がする。おぼろげな記憶を辿る前に、
ずい、と壁際に寄り、僕の目の前に立たれた。

「久々だな」

その言葉で、前世の関係者だということが分からないはず
がなかった。知っている。この人は――。

「お久しぶりです。ピアノさん」

微笑んで対応する。

「今の名前はエバ・フライトだ。久しぶりだな。木場忠」
彼らしい、大人しくも手慣れた返事が返ってきた。

「はい。会えてよかったです、……って、なんで僕の今の名
前知ってるんですか？」

初対面だ。りりさんは指導係だったため知っていてもおか
しくないが、何故この人が？ そう問うと彼は鼻で笑い「さ

あな」と口の端を上げ呟く。前世からだ、どんな行動も様になるのが羨ましい。

「ヒントと言っては何だが、冴はお前のこと、入社する前から知っていたと思うぞ。書類審査の時点で一人に絞っていて、おかしいと思ったんだ」

不意打ちで驚きの事実を告げられる。水を飲んでいいる最中じゃなくてよかった。僕は心からそう思うと同時に、この人は心を見透かすのが特技なのかとも感じた。

「エバさん、貴方は……」

「秘密だ」

どこまで知っているんですか？ そう言おうとした言葉は、言い終わる前に即、切り捨てられた。

「まだ何も言ってません」

むくれる僕にそうだな、と目を細めて返す。

「まあ、頑張れ。もうすぐ昼休憩は終わるから戻った方がいい」鍵の束を取り出し、僕の行こうとする方向と真逆の方に歩き出すエバさん。野暮だとは思ったが、聞いてみることにした。

「……どこ、行くんですか……？」

決まってるだろ。そう言いたげに振り向くと、彼はこう言った。

「我が社長を迎えにな」

それから後の仕事内容は、実をいうと、あまりはつきりと

は覚えていない。りりさんに心配されながら、一連の不思議なことについてまとめる。入社試験。ヒント、と言ったエバさん。

彼女のことを疑っているわけではないが、何か隠し事をされている。そんな気がした。だが、彼女のことをよく知る僕は、少し腑に落ちない点があった。本気で隠しているようには思えない。冴さんはあれでも、悟らせないことが得意なのだ。間違えても、痕跡を残すようなことはしない。だから僕に何か気付かせようとしているように思えた。

「……社長は……」

ぼんやりと呟く。

「ちよっと、大丈夫ですか!？」

りりさんが鬼気迫るといった様子で注意喚起する。

「うわあああ!？」

見ると、パソコンには無意識で打ったのだろう、文字化けに似た文字列が並んでいた。すみません、と慌ててデリートキーを連打する。

「午後、少し変ですね。何かありましたか？」

心配かけたくないながらに、大丈夫です、と苦笑する。挽回しようともう一度書類に目を通し始めたところ、部署のドアが勢いよく開かれる。

「忠。仕事が終わったら社長室に来いと冴からの伝言だ。2人で話したいそうだな」

エバさん、そう言う前に彼はその言葉を言い放つ。

「ちよっ……！　そういうこと、あまり大きな声で言わないでください！」

「何故だ」

きよと、と何事もなかったように切り返すエバさん。

「なんでって……もう……」

どうとも答えられなくて、手で顔を覆う。今ごろ羞恥で赤く染まっただけでも不思議ではない。

秘密、というものはすぐにわかりやすいようで、りりさんがああ、なるほど！　と全てを見透かしたような目でこっちを見に来る。その目、今すぐやめて下さい！

終業のベルが鳴った。

僕は呼び出された通り、社長室に向かう。仕事が終わった他の社員たちはもうそれぞれの帰路についたようだ。ブラック企業、とよばれるものが増えるこの頃、喜ばしいことかもしれない。

階段を、前登った時とは違う視点で踏みしめて進む。確信に変わった。ドアを開けると、いつもと同じ場所に彼女は立っていた。

「お疲れさま。仕事には慣れたかい？」

にこにこ声をかけられる。

「はい、お陰様で」

笑顔で返した。特に用はないけど、お話ししたくて。と照れ笑いする彼女に近く寄り詰める。

「冴さん。」

壁の近くに立つ彼女を、抱きすくめるようにして押し付ける。顔の横に手を付き、逃げ場を無くした。

「ちよっ」と

こんなところで、と抵抗する彼女を見かねる。半ば強引に股の間に足をねじ込み、身動きが取れなくなった。

「どこかおかしかったんです。階段を下りるときに思いましたが、1階から4階と、4階から5階では段数と、一段の高さが違いました。5階へ続く階段が短くて、低い。これは……：気を付けていないと気付かない違和感です。それに、どう見ても、この社長室と他のフロアの広さが違います。歩いて測って、ざっと10歩分くらいでしょうか。その分の空白が、この部屋にはありませんよね？」

辺りを見渡す。依然、彼女は目を逸らしたままだった。僕はたたみかけるように続ける。

「それに、ある事を聞いて確信しました。冴さん、いえ、社長は、この社長室には絶対に人を呼ばない。何かあっても、ドアの前で用事を済ませたと、他の社員さん達から聞きませんでした。……考えてみれば、あの時窓から夕陽が見えたのもおかしかったんです。普通の建物なら一番陽の当たる南側に窓を付けるはず。だけれど、この部屋だけはそうじゃない。社長、教えて下さい」

視線を重ねる。

「僕がこの会社に来ることを知っていたんですか？　なんで新入社員は僕だけなんですか？　―社長は、いえ、この会社は、何を隠しているんですか？」

彼女はふっと笑った。諦めた、と言うより何か、やっと気付いたか、というようなしたり顔で。

「そこまで言われちゃ仕方ないなあ」

やけにすんなり受け入れられ、僕は拍子抜けする。

「認めるんですか？」

「……うん、認めるから……腕と足、どけてくれない？」

かあ、と顔を赤くしたまま目を逸らす彼女。その眼には羞恥のためか、涙さえも浮かんでいて。

「ご、ごめんなさい……！」

気付いて数秒、顔に火が付いたように熱くなるのを感じた。

大慌てで壁についた手と足をのける。

「まさか2日間でこの会社の秘密を見破るとはね。やっぱり私の見込み通り、キミは凄い人だよ」

手足の拘束が解かれた彼女は、数歩進み、ドアに向かってパチン、と指を鳴らした。途端、覗き見ていたようで、社員の二人――りりさんとエバさん――がどさどさとなだれ込む。

「すつつつごい！　私この秘密、言われるまで気付かなかっただけですよ！」

「流石だな。社内最速だ」

「でしよう？　優秀さ、認めてくれた？」

僕をのけ者にして話が進む。正直、何を言っているのかわからず、あの、と切り出すのが精一杯だ。

「な、なに言ってるんですか……？」

「あはは、隠してごめんね。今から全部を話すから、よく聞いてほしいんだ」

彼女は僕と目を合わせ、真実をぽつり、ぽつりと話し出す。

「この会社はね。表向きには音楽コンサルタントとしてコンサートの設営や運営、楽器流通に力を入れているよ。だけれどね？　その裏では楽器の魂を回収しているんだ。宿りかけた、実体化しても行くセカイの無い……哀れな魂たちをね」

だってあのセカイは、私たちが壊してしまったから。そう、彼女は悲しげに笑う。

「せめてもの償いをと、この会社を立ち上げたんだ。キミを入社させたのも、このため。あのセカイで関わった人たちを、記憶のあるなしに関わらずできるだけ集めたくて……因みに君が気付いたこの部屋の空き部屋は、宿りかけた楽器の魂の保管庫。まあこの秘密を知っているのは、昔楽器だった人たちだけだよ」

あっけらかんと告げる。今のこれ、結構重大問題な気がするんですが……。

「これはね、キミが少しでもこの会社の不思議に気付いた時に、ちゃんと話そうと思ってたんだ。もっとも、こんな早く

に見破られるとは思ってなかったけど」

ところで。彼女は意味ありげに笑う。

「私もそろそろ、秘書が欲しかった頃なんだ。とびっきり優秀で、仕事を任せられる秘書さんがね。……この人で異論はないよね？ キミたち」

頷く二人。その顔は笑顔と、妥当だと言いたげな笑み。それを確認した彼女はくるりと向き直り、極上の笑みでそう言った。

今まで考えたこともなかったぐらいに、波乱の人生が幕を開ける。そんな気がした。

「ようこそ。音楽コンサルタント『R・I・P』へ」

「天使と悪魔は紙一重」

樟南高等学校 一年

升屋結女

空が赤く染まり始めた。遠くの空に小さな黒い影が点々としている。近くの学校だろうか。有名な童謡「ゆうやけこやけ」が聞こえる。

人通りが少なくなつた住宅地のはずれ。きっと公園で遊んでいた子供もこの歌を聴いて、帰つたんだろう。「ばいばい」「また明日！」と楽しそうなやり取りをしてる子供たちがいる気がした。自分にもそんなときがあつたなと懐かしくなる。

活発な子供時代ではなかつたが、友達と公園で遊んだことはさすがにあつた。数え切れる程度だが。今ではそんなことありえないなあと思いつつ、少しだけ悲しくなつた。

このようにして、子供時代は過ぎていくのだろうか。なんて、年に合わないことを一人の帰り道で考えるくらい、いいだろう。

「……つないで、みなかえろ」

どこからか童謡に合わせて細い声が歌っている。あたりを見渡してみても、自転車をこいで行つたおじさんしかいなか

つた。空耳だろう。頭の半分はそう理解した。でも、もう半分は空耳じゃないかもしれないと感じていた。

非現実的な何かかもしれない。空耳にしてはあまりにも透き通っていて、あまりにも人間らしい子供の声だった。だから、空耳だともいえるが。

知っている曲が流れていると歌いたくなるのはわかる。でも、その声の主がいないのはホラーだ。恐怖心がじわじわと上ってくる。しかし同時に、好奇心も湧き出てしまった。ほんのすこしだけ。

でも、怖いものは怖い。

少しだけ早足になる。

そして、一軒家の塀でかこまれた曲がり角を右に曲がる。曲がつてすぐは電柱だった。早足になっていたせいか、考えていたせいか、よけながら曲がることができなかつた。とつさに電柱をよけようとして、体を右にひねつた。

足が不器用にステップを踏んだ。よろけつつも何とか持ちこたえた。目の前にはコンクリートの塀。そのすぐ下に、何かがあるのが見えた。

まだ歌は聞こえる。終わりかけの最後のところ。あの声とともに。

「……いっしょにかえりましょ」

先ほどよりも鮮明に、確かに聞こえた。それとともに、声の主もわかつてしまった。

猫が捨てられていそうな段ボールひと箱。でも、猫は入っ

ていなかった。その代わりに入っていたものは少しだけビクツと体を動かした。中に入ってたものは俺の目をじっと見つめていた。

その眼は、猫の目のようだった。そして、安心したように笑みを浮かべた。子供らしい笑みを。その直後、少女は眼を閉じた。力尽きたように。

「あの……え？ 大丈夫？ え……ちよっと！ 大丈夫っ！」
俺は必死に少女に呼びかけた。名前も何もわからない。ただわかるのは、彼女の歌声がきれいなこと。天使の原石のような小さな女の子ということだけだった。

「おかえりなさい」

あのダンボール少女『恵瑠』は笑顔で俺を迎え入れる。俺の家のなかに。あの日からまだ一週間もたっていない。恵瑠は記憶がないらしく、自分の名前しかわからなかった。

俺はすぐに警察に引き取ってもらうべく、病院に連れて行ったあと、警察に連絡した。

それなのに恵瑠は「警察に引き取られるとか、犯罪者みたい」と考え、俺を勝手に親戚と偽り、俺の家に転がり込んできた。

ずっと小さな女の子を預かるわけにはいかないし、俺も一人暮らしを楽しんでいたから、元の生活に早く帰りたい。

そこで俺は、SNSで拡散したり、HPを作ったりして、恵瑠の保護者を探していた。でも、いまだに見つからない。

「ねえ、ごはんまだ？」

当の本人は平気そうにごはんの催促をしてくる。のんきなものだ。

「はいはい。今作るからまっとけ」

そう言いながら、夕飯の支度をする。といっても、仕事が終わった水曜日の夕飯なんて、簡単なものしか作れない。買ってきた、安い特売の肉と冷蔵庫に入っていた野菜をいため、塩コショウを加える。そのくらいだ。

俺がそれを作っている間に、恵瑠は二人分のごはんを用意し、箸を出す。

慣れたもんだな。俺もそうだが、恵瑠もかなりこの生活に慣れ始めていた。人間は本当に順応するのが早い。

小さなテーブルに夕飯が並ぶ。俺も席に着く。

「手を合わせてください。いただきます」

「いただきます」

恵瑠はどうしても、この号令をやりたいらしく、恵瑠が来たらから食事前の習慣になった。

箸をとり、食事にとりかかると、ピンポーン。ピンポーン。なぜか呼び鈴が二回なった。

「誰だろう」

口いっばいにごはんをいれた恵瑠が言った。

「見てくる」

俺はそう言って、立ち上がり、ドアに近づく。

ドアを開けようとした時だった。いきなり俺は突き飛ばさ

れた。強い力で。

「慧！ 大丈夫？」

恵瑠が俺に声をかける。

「ああ。平気だ」

起き上がりながら、いきなり入ってきた奴をにらみつける
とそこには二人の大男がいた。そいつらは無言で恵瑠の腕を
つかみ、外に連れて行こうとする。

「いやだ。放して」

恵瑠は必死に抵抗している。

「恵瑠っ！」

立ち上がり、大男を止めようとする。でも、恵瑠の腕をつ
かんでいないほうの男におもいつきし殴られてしまった。

「慧っ！ 助けてっ！」

恵瑠の叫びが部屋の外から聞こえる。

くそっ。なんで、見ず知らずの他人にここまでしようとする
んだ。俺は。気が付いたら、恵瑠が乗せられた車をバイク
で追いかけていた。

考える暇なんてなかった。

車が止まったのは、倉庫街の一角。少し遠くでバイクを止
め、見つからないように近づく。物陰から覗くと恵瑠は睡眠
薬を飲まされたのか気を失っていた。さっきの大男二人は、
誰かに向かって話しかけている。

うまく聞きとれない。ときれときれだが何とか聞こえるく

らいだ。

「…：天使の回収…：した。次…：か？」

天使の回収？ 恵瑠のことか？ でも、天使って何だよ。

「ご苦労だった」

話し相手と思われる声はとても大きかった。というより、
スピーカーを使っているらしく、響いていた。

「早く実験に移るぞ。その前にそのネズミはなんだ？」

ネズミ？ ネズミってやつも捕まえていたのか？

「おい！ お前何している！」

さっきまでときれときれだった声がすぐ近くから聞こえる。
まさか俺のことか？ 視線を上げると、あの大男がいた。間
違いなくやばい。一目散に走り出す。

しかし、すぐに袖口を捕まれてしまい、あっさりつかまっ
てしまった。そして、スピーカーの前に連れて行かれた。

「リーダー、ネズミはどうしますか」

電話でつながっているとされる、リーダーと呼ばれた奴
は当たり前前のことを言うみたいに言い放った。

「消せ」

「了解」

消す…：？ 何を？ 理解していない俺をおいて、大男たち
は縄をとってきた。そして、俺の手首にくくりつけ始める。

まさか消すって…：俺の存在をか？ ウソだろ。そんなド
ラマとかじゃあるまいし。やめてくれ。俺が何したって言う
んだよ。必死にそう言おうとしても、全く動いてくれない俺

の口。そんなに怖がりだったのか、俺って。

こんなところで……殺されるのか？

なんか力が入らなくなってきた。

嫌な緊張で体中いうことをきいてくれない。なんだかもうあきらめるしかないのか。早かったな。案外。あっさり終わるものなんだな、人生って。走馬灯ってやつなのかはわからないが、それらしきものが脳裏に浮かぶ。

『私の名前？ えっとね、確か恵瑠だよ』

『これすつごくかわいい！ ねえ、ほしいなあ。慧、優しいから買ってくれるよね！ きつと！』

『おいしい！ 慧ってこんなまで作れるの？ すごいね。』

お店屋さんできちやうね』

『雷怖いから、お話ししない？ 寝るまででいいから。ね？ おねがい』

あれ？ なんで恵瑠ばかりなんだ？

恵瑠と出会う前のことって……。

あれ、俺何やってたんだっけ。

いや、確か会社勤めはずっとしていたはず。

会社に行つて……：：：たんだよな。俺。恵瑠が来てからも行つてたはずなのに、あれ？

そうこう考えてるうちに、俺は縄でぐるぐるに縛り付けられていた。殺されそうになっていることをすっかり忘れていた。なんで忘れられたんだ俺。ふつう忘れないだろう。また恐怖心がおそってくる。大男の持った銃によって。

銃声が鳴った。俺に向けられた銃からではなく、別のところから。

「くそ。もう来たのか。おい、逃げるぞ」

大男たちは荷物を素早くまとめて、あつという間に逃げて行った。そしてすぐ後にまたいくつもの銃声が鳴り響いていた。一人残された俺はどうすればいいんだ、この状況。

助かったのか？ あ、そうだ。恵瑠は、どこだ。見渡してみても、恵瑠の姿は見当たらない。やはり、連れて行かれてしまったのか。

来ても、助けられなかったじゃないか。恵瑠は俺に助けてっていったのに。勝手に瞳に水の膜が張る。こんなことをしている場合じゃない。恵瑠を助けるためにもとにかくこの縄をどうにかしないと。そう思い、動いてみるも縄がほどける気がしない。

複数人の足音が聞こえてきた。さっきの奴らの仲間か？ それならもう希望はない。精一杯動きながら縄がほどけると奴らでないことを願う。

「中隊！ 奴らを追え。残りはこのあたりの警戒及び遺留品を捜せ！」

芯が強い女声。軍を率いているような言葉。奴らの仲間ではなさそうだ。

倉庫内に一つの足音が響く。その足音は早く大きくなった。

「大丈夫ですか」

さっきと同じ声。顔を見上げると女の顔があった。軍服のようなものを着ている。

「今、ほどこきます」

彼女は慣れた手つきで縄をほどこいていく。この人、何回も縄で縛られている人を助けたのか？ ほどこき終わり、体の自由が戻ると、体勢を整えた。

「助けていただきありがとうございます」

「お礼は結構。ここで何があったか、わかる範囲でいいので教えていただきたいのですが」

俺は話すか悩んだ後、「実は……」と話し始めようとした。

「隊長！ 逃げられました。あと、遺留品の回収も終わりました」

しかし、彼女の仲間と思われる人からの言葉で遮られてしまった。

「申し訳ない。今から我々の基地へ移動するのでそこでお話を伺ってもいいですか？」

この人たちは奴らを知っているようだった。俺を助けてくれたし、行かないという選択を選ぶことなど考えていなかった。

「話が早くて助かります。ではついてきてください」

彼女の手を借りて立ち上がり、ついて行く。彼女の後ろで縛った長い髪は印象的だった。

倉庫から出ると、彼女と同じような軍服を着た人たちが大勢

いた。その人たちは大型のトラックの荷台に乗り込んでいく。

「私たちはこれで向かいます。さあ、乗ってください」

案内されたのはボックスカー。後ろにはたくさんの荷物が乗っている。俺は助手席に座る。彼女は仲間に指示をしているのか何人かの軍服人と話した後、俺の隣の運転席に座った。そうしておれば彼女たちと倉庫街をあとにした。

車はどんどん山奥に入っていった。窓からの景色は生い茂る木しかない。もうすぐ日の入りになるほど、恵瑠がさらわれてから時間がたってしまった。まだ着かないのかといういらし始めた時、景色は一変した。

あたりになにもないのである。さっきまであったたくさんの木が一本もない。そんな変な景色になってすぐ彼女は車を止めた。

「少し待っててください」

そう言って彼女は俺を残し、車から5メートルほど離れたところの地面に触れ、何かを言っているようだった。その次の瞬間、またしても景色が一変した。次は何棟もの建物があたりにも現れたのだ。

俺はさすがにびっくりして、自分が口を馬鹿みたいにあんぐり開けていることも彼女に指摘されるまで気がつかなかった。

彼女に促され、トラックから降り、また彼女について行く。たどり着いたのはいくつもある建物の中で一軒家が連なると

ころの一つ。彼女の住んでいる家らしい。

さすがに知り合ったばかりの女の人の家に入るのは気後れしたが、恵瑠を助けるためだと自分に言い聞かせ、緊張しつつも入っていった。リビングまで案内され、椅子に座る。

「先ほどの話の続きは朝食をとってからにしませんか？」

「え」

彼女の提案に拍子抜けした。俺は一刻も早く恵瑠を助けたい。

「急いでいるんです。さっきの奴らに俺、大切な人を誘拐されたんです」

焦るような気持ちでそう言い放った。彼女は少し申し訳なさそうな顔をした。

「そうだったんですね。そうとは知らず。でも、焦る気持ちはわかりますが、こういうときに冷静さを失うのはいけません。そのための朝食です。私はその間シャワーを浴びてくるので先に食べていてください。私に伝える内容とどうしたいかしっかりと考えてください」

軍服を着た彼女にそう言われると納得せざるを得ない。さつき俺を助けたように他の人も救ってほしい彼女だ。プロには逆らえない。

俺が何も言わないでいると、その間に彼女はトーストや目玉焼きを作ってくれ、俺の目の前の机においてくれた。それとハーブティーも。そして彼女は何も言わずシャワーを浴びにいった。

彼女が用意してくれた朝食をとりながら、いろいろ考えた。俺は恵瑠を助けたい。そのために奴らの情報と恵瑠を救うための力がほしい。恵瑠を救うには一人じゃ無理だ。やはり、彼女たちの力を借りるべきだろう。

朝食を食べ終わり、ハーブティーをゆっくりと飲む。だんだん落ち着いてきた。

もう日はすっかり昇ってしまっている。時計を見ると午前六時半だった。

「落ち着きましたか？」

声が出た方に目を向けると、部屋着に着替えた彼女がいた。長い髪はほどかれ、彼女の肌は触り心地が良さそうだった。部屋着が薄めのTシャツに着心地の良さそうな短パンだったので、目のやり場に少し困る。ふくよかな胸やそられるような生足に目がいつてしまうのは、恋愛経験がさほどない俺にとってはしょうがないことである。

そんな戸惑う俺を見た彼女はおかしそうに笑った。よくよく見たらきれいな系八割かわいい系二割という美人であった。

「それではお話をしましょうか」

彼女は自分の朝食を用意し、俺と向かいの椅子に座るとそういった。俺は最初から全部話した。恵瑠との出会いから、誘拐されたときのこと、天使や実験などという意味深な言葉を奴らが言っていたことまで。

「俺は恵瑠と出会ってそんなに時間はたっていないませんが、恵

瑠は俺に助けてって言ったんです。なら、助けるしかないじゃないですか。恵瑠を救うためなら、俺、何でもします。だから恵瑠を助けるための力を貸してください」

彼女はすでに二人分の朝食の片付けまで終え、俺の顔を見つめていた。

「わかりました。我々にできることなら何でも手を貸しましょう。その代わり……」

その代わりなんだ？

「自己紹介しませんか？ 互いに」

彼女はほほえみながらいった。その一言に面食らった上、そのほほえみに射貫かれそうになったのは言うまでもない。

「そうですね。俺たちまだ、互いの名前すら知らないですね」

「言い出しっぺは私ですから私からしましょう。私は向井莉紗。裏社会の世界の安全を守っているこの組織『メシア』日本支部の103基地301大隊の隊長をやっています」

「俺は天津川慧って言います。普通の会社員です」

「……アマツガワ？ 天の川の真ん中を津軽の津に変えた漢字で合っていますか？」

彼女は少し引きつった顔でそう言った。

「ええ。合っていますけど。どうかしました？」

「いえ。何も」

彼女は何か考えているようだった。しばらくしてから、彼女はまた口を開いた。

「奴らは私たちの敵同然です。今まで何回も戦ってきました

が、いつも引き分けのようになっていきます。今回は恵瑠さんを助けるためにも全力でやっていきます」

「はい。ありがとうございます」

「私は今から各隊への連絡及び指示をしてきますので、その間仮眠をとってはどうでしょうか。疲れていると思いますし」

「え、わざわざいいですよ。そんなに疲れてませんから」

「でも、しっかりと体力つけないとこれからの作戦に影響が出てしまうかもしれません。これ、温かいお茶です。これで疲れもとれやすくなると思います」

「ありがとうございます」

「ここにベッドがあるのでここで寝てください」

そう強引に案内されたのは彼女が普段寝ていると思われる寝室だった。ソファでいいという前にドアをしっかりと閉められてしまった。彼女なりの気遣いなのだろうか。

ありがたく思いつつ、少し緊張しながら彼女のベッドに近づく。すこし興奮してきてしまった。少しだけ下心を持ちつつ寝転がる。

……甘いにおい。

仮眠のためならベッドまで案内しなくてもいいはずじゃ。

もしかして彼女は……。

なんて妄想していると体が火照ってきてしまった。これじゃ眠れない。もう火照りすぎておかしくなりそうならいだ。だめだと理解していても、体は勝手に彼女のおいをかい

でしまう。甘くどろけてしまいそうなほど。

扉の開く音がした。目をむけると莉紗さんがいた。

「だめですよ。ちゃんと寝てないと」

そう言いながら近づいてくる彼女。俺は軽く起き上がり彼女の腕をつかむ。

「きや」

そうして彼女を押し倒す。彼女にいやがる様子もなかった。俺は彼女を犯してしまった。

気がつくとすっかり夕暮れになっていた。そしてすぐ俺が何をしてしまったか思い出した。莉紗さんはこの部屋にはいなかった。

リビングの方へ向かうと彼女はご飯の支度をしていた。

「慧さん、起きたんですね」

呼び方が慧さんになってるし、雰囲気もどことなく柔らかくなっている。

「えと、俺なんであんなことしちゃったのかわかんなくて、本当にごめんなさい」

「え？　なら、私のこと好きだっていったのも嘘なんですか？」

え、俺そんなこと言ったっけ。でも、言ったんなら言ったんだろうし、莉紗さんいい人だし、美人だし、嘘ではない……はず。

「嘘じゃ……ないです」

「ならいいです」

「え、いいんですか？」

「終わったことはしょうがないですし、それに私も……嫌じゃなかったのだから」

計算されてるんじゃないかと思うほどの言葉にときめく。

「とりあえずシャワーを浴びてきてください。そのあとご飯にしましょう。今日の9時から夜襲をしますのだから」

「夜襲って奴らへですか」

「ええ。アジトを突き止めたのだから」

「やっとなら恵瑠を救うことができる。」

「慧さんには恵瑠さん救出のために恵瑠さんの確保をお願いしたいのですが」

「俺に……そんな大役をですか」

「恵瑠さんの姿形は私たちは知りません。なので慧さんにしかならないかと」

「俺にしか……」

「お願いできますか？」

恵瑠は俺に助けを求めた。

なら答えは決まっている。

「もちろんです」

俺たちは用意を済ませ、足早に夜襲へ向かった。俺用の軍服も用意してもらい、気合い十分だ。

「アジトは7階構造。地上4階、地下3階。実験室等は地下に、地上には軍がいる」

「ここみたいに隠れてないんですね」

「ああ。だから逆に見つけにくかった。よろしく頼むよ」

俺を恵瑠のところまで連れて行くためのチームの人が教えてくれた。

「諸君。やっとこの時が来た。奴らの息の根を止めるぞ」

通信用端末から莉紗さんのそんな声が聞こえた。ここにいる人たち全員待ちに待ったときなんだろう。絶対に恵瑠を助けてみせる。

それぞれの待機場所に着き、裏口を突破する準備をする。

通信班が奴らのネットワークをハッキングし、アジト中のロックを解除。現場にいる人たちで守っている警備等を突破する。

「ロックの解除完了。突撃っ！」

俺らのチームも突撃する。俺は地下へ向かう。奴らの言っていた実験という言葉から地下だろうとわかった。また、ハッキングによって一番下の階ということがわかった。

そのために立ちふさがる敵をチームの人たちに任せ、俺は一心不乱に階段を駆け下りる。通信班によってナビゲートされているため、迷うことはない。

恵瑠がいると思われる部屋の前に着いた。おそろおそろ扉を開ける。中を見渡すと、実験用のベッドと思われるところに恵瑠が寝そべっていた。

「恵瑠っ」

駆け寄って恵瑠を起こそうとする。

「誰だ。そこに近づくな」

声の方を見ると、白衣を着た一人の男がいた。俺はそいつを思いきりにらむ。お互いの顔がよく見える距離まで男は近づいてくると絶句したような顔をした。

「なぜ慧がここにいるんだ」

俺の名前を知っている？ なぜ？

「んっ。ふああ。あれ、博士どうしたの？ そんな怖い顔して。ん？ あ、慧だ！ 久しぶり」

恵瑠は起き上がってそんなことを言う。

元気そうで何よりだが、この男は知り合いだったのか？ 恵瑠が俺の名前をこの男に教えたのか？

「恵瑠、帰ろう。俺は恵瑠を助けに来たんだ」

恵瑠の手をつかみ引っ張って連れて行こうとする。

「待って。まだ終わっていないの」

「終わってないって？ 何が……」

「そこを動かくな！」

張り詰めたような聞き覚えのある声。莉紗さんだ。

「ねえ、慧。もしかしてあの女とここに来たの？」

恵瑠は驚いたような顔で言う。

「ああ。そうだけど。俺を助けてくれて、恵瑠を助ける力を貸してくれたんだ」

「何で、悪の組織なんか頼ったの！」

え？ 悪の組織？

恵瑠は怖い顔で思い切り莉紗さんをにらむ。さつき俺が博士と呼ばれた男にしたように。

「お嬢さん。我々はあなたの保護に来たのです」

莉紗さんはそう言いながら近づいてくる。

「近づかないで」

恵瑠はそう言い放つ。莉紗さんは足を止めない。

「なら、こっちから」

恵瑠はそう言い、自分の腕に触れる。何をする気だ？ 次の瞬間、恵瑠の腕は変形していた。マシンガンのようなものに。

「え、何が起きているんだ」

理解してないのは俺だけのようで、莉紗さんは悪者のような笑みを浮かべながらこちらへ来る。

「慧と博士は隠れて」

恵瑠はそう言うと言砲を始めた。

博士と呼ばれたやつは俺の腕を強引に引っ張り、奥にあった扉に向かって走って行った。そしてその中に俺と入ると鍵をかけた。

「何が起きているんだ。どうなっているんだ」

混乱している俺の頭。そんな俺を見る博士。

「……記憶プログラム、コード天使と悪魔は？」

は？ こいつ何を言って……。

「紙一重」

え、俺の口から勝手に。そして一気に記憶の波が押し寄せ

る。「……ああ、久しぶり。天津川博士」

「……ああ、久しぶり。天津川博士」

俺は天津川海という男に作られた。

どの組織にも属さず、誰に頼ることもなく、自分の夢のためだけに俺を作った。彼は子供がほしかった。

でも、彼は子供を持つことができない。病気のせいで。医者にもそう伝えられたとき、その医者は孤児を養子にとるのはどうかと勧めてきたらしい。

彼はふざけるなど激怒した。彼は自分の遺伝子を持った子供がほしいのだ。そこで科学者だった彼は、自らの手で作り出すことを決めた。

それが俺。海のインシヤルをとって慧と名付けられた。しばらくの間は静かに暮らしていた。俺と博士の二人だけで。

しかし、俺を作ったのが組織に見つかり、博士と俺を狙って襲撃してきた。博士は必死に俺を逃がしてくれた。

行く当てもなくふらふらとしていると、博士の信頼できる科学チームが保護してくれた。博士は俺にできるだけ普通の生活をしてほしいと記憶を消すように言っていた。

そして俺は記憶を消された。コードによって記憶は戻ると言うことまで忘れていた。

自分が普通の人間だと思い込んだ俺は、会社に行くつもり

でその研究所へ向かい、身体の調整をしていた。その記憶も毎回消されていた。よって俺には会社に行っていない時間の記憶しか無かった。

「博士はどうしてたんだ。俺が人間として生活している間」

「俺はあの女に捕まった」

「あの女って莉紗さんのこと？」

「ああ、あの女とその仲間たちは悪の組織と言っても過言ではない。あいつらに強要され、作り出したのが軍事用クロール、恵瑠だ」

「恵瑠の遺伝子のもとなって……莉紗さん？」

「おお、よくわかったな。そうだ」

「どことなく似てるし、莉紗さんのイニシャルはLだしね。

でも、恵瑠が軍事用だなんて」

「さっきの見ただろ。あんな風なのがたくさん搭載されているのが恵瑠だ」

「ならこのアジトの組織は何なんだ？」

「この組織こそが本当の平和を守るための組織さ。俺を救ってくれた。でもそのときに恵瑠が行方不明になったんだ。軍事用に作ってしまっているから、人を殺めてしまうこともなくはない。だから、一刻も早く回収したかった」

「でも俺、その回収の時殺されかけたんだ。消せて言われた」

「それは記憶の消去だ。警察に連絡されでもしたら、いろいろと危ないものでね」

「なら、天使の実験って？」

「そんなことまで聞いていたのか。恵瑠の力を多少弱めて平和を守るためのものにする実験だ」

「そうだったのか。」

「もうそろそろ、恵瑠があの女を捕まえているだろう。行くぞ」

「そう言って博士はまたしても俺の腕をつかみ引っ張っていった。」

「恵瑠っ。大丈夫だったか？」

「慧！ 大丈夫だよ。ほら、ちゃんこの女も捕まえられたし」

「莉紗さんは縄で縛られていた。俺は莉紗さんの前に行く。」

「だましていたんですね。俺のこと。だから、俺が天津川つて名乗ったときにびっくりした」

「そりゃあ、びっくりしますよ。なんてったって裏切り者の名前だったんですから。だから確かめるためにわざわざ媚薬のませて精子の回収、検査したら人工的に作られたものだとわかった。使えるって思ったんですが、外れましたね」

「あのときも仕組まれたものだったのか。」

「思わず笑いそうになりましたよ。だって、たかが人造人間が愛をささやいてくるんですよ。気持ち悪いことこの上ないじゃないですか」

「俺は思いきり拳を握り、莉紗さんに向けて放とうとする。」

「はいストップ」

莉紗さんはそう言い、俺の額に銃口を当てた。いつの間に縄を。そうか。縄をほどくのは慣れていたんだ。

「あとの二人も動かないでください。動いたらこれ死にますよ」

「別にかまわない」

「え」

「俺が死ぬことなんて別にかまわないっていったんだよ」

俺は思いきり莉紗さんを殴り飛ばした。莉紗さんは気絶したのかびくりとも動かなくなった。

「慧、恵瑠、逃げるぞ」

「え、逃げるってどうやって」

「隠し経路を用意してある」

博士のあとをついて行き、戦場である建物をあとにした。

「博士はこれからどうするの？」

恵瑠は不安そうに言った。

アジトから逃げ出した後、俺らはアジトからも周りに何も無いような場所からも遠く、見つかりにくそうなどころを通過して移動していた。

「俺は恵瑠や慧と一緒にいたい。だから、慧や恵瑠がしたいことのサポートをしようと思う」

「そか。なら慧は？」

「したいこと……か。もう恵瑠を助け出せし、博士がいる

から会社に行く必要もない。それなら……」

「俺は莉紗さんを助けたい」

「え？」

「なんで？ あの女に慧はだまされていたんだよ」

博士も恵瑠もびっくりしている。当たり前だよな。

「莉紗さんも俺が天津川って知るまでは普通に接してくれて、優しかった。俺は俺の正体を知る前の莉紗さんが好きだった」

「でも、あの女の演技かもしれないじゃない」

「わかっている。でも、莉紗さんも含め、悪いことしている人たちだって最初からそうだったわけじゃないんだと思う。多分だけ。だから、その人たちを救いたい」

「どうやって救うんだ？ 俺を救ってくれたあの組織と一緒に戦うのか？」

「戦いたくない。もう誰も傷ついてほしくない」

俺がきれいな事を行っているのはわかっている。そんな都合の良いことがあるなんて思っていない。それでも恵瑠と博士がいるなら……」

「……ねえ博士。秘密兵器教えてもいいんじゃない」

しばらくたつてから恵瑠が口を開いた。

「恵瑠がいいというのなら。慧がいま言ったことは恵瑠が捕まってるから言ったことと同じなんだ。そこで超天才である俺は恵瑠の声に目をつけた」

「恵瑠も同じことを……」

「うん。でもあの女のためじゃないから」

「そっか。でも、声で何ができるの？」

「恵瑠の歌声はすぐきれいなんだ。そう作ったわけじゃないのに偶然。童謡を教えて歌わせたり、はやりの歌を聞かせて歌えるようにしたりしたもんだ」

俺が恵瑠と出会ったときもすぐきれいだっただ。

「調べたら、特別な波が出ていることがわかった。人を落ち着かせたり、悪い心を洗い流したりするような。恵瑠が捕まってるから、それをより強力にする実験をしていた」

「なら、恵瑠の歌を聴かせられたら」

「そう。どれほど効果があるかわからないがやってみる価値はあるだろう。そのためには、そういう場を設けるか、奴らの通信端末に直接流すか。ほかにあるか？」

「私はテレビに出たい！」

「恵瑠、これは真剣な話だから……」

「いいかもしれないぞ」

恵瑠はどや顔を俺に向けてくる。

「でも、テレビって見なかったら効果ないじゃないか」

「心配ない。奴らに捕まっているとき、いろんな話を盗み聞きしていたが、テレビの話をしている奴はかなりいた。それに、恵瑠は超かわいい。親ばかではなくそう認識している。人気が出ればCDデビューもすぐだろう。それを好んで買わせればいける」

「なら、テレビで歌手としてデビューするために、どっかのプロダクションに入らないとな」

「そしたら私の歌をみんなに届けられる！」

俺らは顔を見合わせて笑った。こんなこと成功するかわからない。でも、きつと大丈夫だろう。

「なら早速実行に移ろうよ！」

「ああ。ほら、慧行くぞ」

博士が教えてくれたあの言葉。悪も正義もきつとすぐ変えることができるという希望の言葉。だから、俺らはこんな作戦でも成功すると思っている。案外早く終わるかもしれないとさえ思う。だって、天使と悪魔は紙一重なんだから。

幸福の鐘は今日も鳴る

鹿児島高等学校 二年

草野 早紀

リンゴンリンゴン 鐘が鳴る

リンゴンリンゴン 鐘が鳴る

それは幸福の合図

いつまでも続く幸福の合図

明日も幸せでありますように

リンゴンリンゴン 鐘よ鳴れ

リンゴンリンゴン これからも

リンゴンリンゴン 鐘が鳴る

リンゴンリンゴン 鐘が鳴る

*

丸くて小さい頭を撫でると、むにやむにやと声が漏れた。なんの夢を見ているのだろうか。やわらかい頬をつついていると背後のドアが開き、真っ暗だった部屋に光の筋が伸びる。

「もう寝ちゃったの」

「ああ。今日こそ最後まで読み終わると張りきっていたんだ

が」

大人なら1分もあれば読み終わる小さな絵本を妻に見せると、くすくすと上品に笑う。

「それ買ったのもう1か月前なのに」

「いつになったら読み終わるんだろうな」

妻は俺の隣にしゃがみ、布団の上で気持ちよさそうに眠る娘の頭をゆっくり撫でる。自分とまったく同じことをしていい思わず笑いがこぼれた。

「なあに」

「いや、俺も同じことしたなって」

「何年一緒にいると思ってるの」

考えることも似てきたんでしょ。そう言ってぶにぶにと娘の頬をつまむ。すると感嘆の声をあげた。

「すごい。マシユマロみたい」

「やめる、嫌そうな顔してるぞ」

俺の言葉で、娘が顔をしかめながら寝息を立てているのに気づきパツと手を離す妻。そして小さく謝りながら頬を撫でる。

「ごめんね、ごめんね」

「触りたくなる気持ちは分かるけどな。俺はツンツンしただけで我慢した」

「似たようなものじゃない」

今度は妻が顔をしかめる。娘と瓜二つの表情に小さく吹き出す。そりやそりや。俺と妻の子供なんだから、似てて当然

だ。

「さつきからなに。ご飯抜きにしちゃうわよ」

「それは勘弁」

このまま天使の寝顔を眺めていたいが、さすがに空腹感が限界を迎えそう。今日はミーティングが長引いて帰宅が遅くなってしまったのだ。いつもきっちり定刻どおり家に帰してくれる会社なので不満はないが、妻の手作り弁当では腹がもたなかった。事前に分かっていたら量を多くしてもらえたのだが。

「しかし、もう5歳か。早いな」

「この間ハイハイができるようになったと思ってたのにね」

妻と出会ったのが大学生の頃。結婚して、子供もできて、絵本も読めるようになって。早すぎる時の流れに少し寂しさを感じてしまう。だがそれも、現在が幸せだからだと思ふことにしている。

「今日は豆腐ハンバーグに挑戦してみたのよ」

「今度こそ焦げてないよな」

「大丈夫……たぶん」

少々不安の残る妻の答えに苦笑いしながら子供部屋を出た。

*

昨夜の豆腐ハンバーグを今日は弁当のおかずとして咀嚼している、隣の席の同僚が窓の外を見る。

「どうした」

「いや、今日も鐘が鳴ってるなーっと」

「……本当だ」

昼時の騒がしい社内で耳を澄ますと、かすかに鐘の音が聞こえてくる。とりあえず一安心。

「ここ3年くらいは毎日欠かさず鳴ってんな。ちょっと前までは3日おきとかだったのに」

「それだけ、この国が幸福で平和なことだろ」

俺たちの住んでいるこの国は、世界一幸福で平和な国として知られている。いろんな外国の人が毎年押し寄せてきて、誰もが裕福に暮らしている。犯罪だって^{365日}、ほぼ起こっていない。国民すべてが幸せになれる国。

そしてこの国では、「幸福の鐘」と呼ばれる鐘が鳴ると、明日1日の幸せが約束される。

伝説でも昔話でもない、事実だ。同僚の言うように、3年前は鐘の音を3日、酷いときは3週間聞かないなんてザラだった。鐘が鳴らない日は、交通事故が起こったりひったくりが出没したりして、眠れない夜を過ごした。

それが今では毎日鐘の音を聞いている。なんと幸せなことだろう。3年前のあの日々を思えば、自分が今だけ幸福なのか分かる。いい会社に就職できて、いい仲間にも恵まれて、妻の手作り弁当を昼に食べられる。ため息がでるほどの幸福感。

「そうそう。お前に自慢したいものがあるんだよ」

「なんだ」

「じゃあーん」

子供みたいな効果音とともに同僚が取り出して見せたのは、赤くて金色の装飾がなされた封筒。思わずご飯を喉に詰まらせてしまい、慌てて水筒に手を伸ばす。

「げほげほっ。え、ええ……お前それ……」

「いやーまさか俺のところに『幸福の手紙』が来るなんて、これ以上幸せになっていいのかなあ」

得意気な顔をして俺を見下ろす同僚が持っている物は「幸福の手紙」。それは毎日誰かのもとに届けられている、この国の王から届く手紙のことだ。これが届いた人は王の宮殿に入る権利を得て、その中で一生幸せなままの人生を約束されるらしい。断ることもできるがそんなことをした人間がいたなんて話は聞いたことが無い。

「いつ行くんだ」

「1週間後だ。あと1週間でお前の顔も見納めか」

「そうだな。あっちでも元気にやれよ」

「おう。そんなわけでこの書類片付けといて」

「自分でやれ」

そんなこんなであつという間に1週間が過ぎ、社員全員から見送られて、同僚は一生の幸せを掴みに行った。

それから定期的に近況報告のメールを送ってやっていると、いうのに返信が来ない。メールの確認くらいちゃんとしてほしい。

俺の隣の席には、新入社員がやってきた。

まだまだミスは多いが、俺のことを慕ってくれるかわいい後輩だ。

*

「おかえりなさい。おとうさん、お誕生日おめでとう」

「えっ……」

同僚が王の宮殿に行って1か月。家に帰ると、娘が顔にところどころ生クリームを引っ付けて立っていた。手には苺がこれでもかと思ったホールケーキ。

「これ、作ったのか」

「おかあさんにおしえてもらった」

ぐいぐいとケーキを押し付けてくる娘。よく見れば、ケーキの形は歪んでいるし、塗ってある生クリームはムラだらけだ。

それでも、目頭が熱くなった。

しゃがみこんで、小さな頭を撫でる。

「ありがとう。本当にありがとうな。こんなに生クリームをくっつけて……頑張ったんだな」

頬の生クリームを拭いてやると、娘は照れくさそうに笑う。

「おかあさんがいっぱいごはんつくってくれてるよ」

「そうか、ありがとう」

小さな背中に続いてリビングに入ると、料理があまり得意

ではないはずの妻が、本当にたくさん料理を作っていた。しかも、ケーキは作りかけのものだったようで、本当はお祝いプレートを飾るはずだったのに、俺の声が聞こえた瞬間、娘が持つてきてしまったらしい。ケーキをテーブルに置かせて、愛しい天使をぎゅうぎゅうと抱きしめた。

「ちゃんと練習もしたから、料理も焦げてないはずよ」

「おかあさん、おさかなこげそう」

「えっ、嘘」

娘の言葉に得意気な顔を一転させ、バタバタとキッチンに消えて行く妻。娘がその姿を見て大笑いする。つられて俺も笑った。

幸せだ。

結婚したときにこの国に引越すと決めてよかった。

俺たちの故郷が不幸だったわけではないが、愛する人には毎日笑ってほしいだろう。

だからこの「幸福な国」で暮らすことを決心したのだ。俺たちの未来のために。大事な家族との大切な日々が永遠になるように。

あの決断は間違っていないかった。

だってこんなに幸せなんだから。

*

俺の誕生日から2か月経ったある日の昼。家のチャイムが

鳴った。

「おっと、宅配便か」

「わたしがでる」

「あ、こら。まったく……」

算数の宿題と格闘する娘への助太刀を中断し、腰を上げようとすると、娘が玄関へ飛び出して行った。ずっと同じ問題が解けないから飽きていたんだろう。それにしても逃げ足が速すぎやしないか。苦笑いしながら娘の後を追いかける。

「はい、どちらさ……」

声が途切れたのは、娘が開けたと思われるドアの外にいた人物。娘と視線を合わせてなにやら話している。こちらに気がつくのと、すくと立ち上がった。

「こんにちは、こちらのお嬢さんのお父様でしょうか」

「あ、は、はい」

シワひとつない真っ白なシャツの上に金色の刺繍の入ったベストを着こなした、高貴な雰囲気を漂わせる男性が柔和な笑みを浮かべる。Tシャツにジーパンという自分の服装が恥ずかしくなる。

「おめでとうございます。貴方がたは最高の幸福への切符を手に入れました」

いつの間にか手に持っていた赤い封筒をこちらに手渡す男性。何か、なんて聞かなくても分かる。それでも頭が真っ白になって、ポカンとしたまま男性を見ると、にっこりと頷く。信じられなくて、震える手で封筒を受け取る。

る。

と、窓が勝手に開き、外の喧騒が一気に流れ込んできた。

おめでとう、よかったね、元気でね、お幸せに……。

俺たちの一生の幸福を祝ってくれて、手を痛いくらいに振った。たくなつて、誤魔化すために笑って手を痛いくらいに振った。

だんだん小さくなつてくる声に今度は寂しさが募る。もうここに戻つてくることはないと思うと、やっぱり切ない気持ちになる。

「いまからどこにいくの？」

落ち着いた赤を基調としたワンピースを着た娘のワクワクした瞳にセンチメンタルな気持ちも吹っ飛んだ。これから一生の幸せを約束されているというのに何を感傷的になつているんだ。

「王様のお城だよ、おいしいお菓子もいっぱいあるよ」

娘の服と同じ色のコサージュをつけ、クリーム色のドレスに身を包んだ妻がにこにこ笑いながら答える。薄く化粧もして、すごく綺麗だ。

「おかしたべたい」

「お城に着いてからね」

微笑ましい会話を聞いて和んでいると、だんだん周りの景色が変わってきた。

住宅街やビル群は消え失せ、田んぼや畑などが目立つようになる。

「随分と街から遠くにあるんだな」

「都市の中に宮殿があつては、移動手段が限られる地方の方々が、何かあつたときに宮殿に来られないだろうというところで、国王様は地方の方に宮殿を置いております」

ここから運転席は遠いのに、どこからか声が聞こえてくる。マイクでも設置されているのだろうか、質問に答えてもらえらると思つていなかったので、面食らつてしまった。

「は、はあ。ありがとうございます」

「あの、すみません。お城の中では料理ができませんか」

続けざまに妻が質問をすると、即座に答えが返ってくる。

「はい。こちらでもお食事は用意しますが、奥様が自ら料理をすることも可能です。母親としては、お子様には手料理を振る舞いたいという気持ちがあるはずだと、国王様がキッチンの使用を許可しております」

「良かった」

胸を撫で下ろす妻。王家の人間など見たことないが、話だけ聞いていると庶民的で優しいようだ。無礼なことをすればすぐに首が飛ぶのではないかとビクビクしていたが、話もきちんと聞いてくれそうだ。もちろん、無礼なことをしないよう気をつけるつもりだが。

と、ウイーンという機械音と共に、運手席の方から、小さなトレイに乗ったコーヒーとオレンジジュースが運ばれてきた。コーヒーは湯気が出ている。

「初めての宮殿ということで緊張もされているでしょう。ぜひお飲みになつてリラックスしてくださいませ」

促されるまま、コーヒーの入っているカップを手取る。確かに緊張からか、喉が渴いている。すでに妻と娘は美味しそうに飲んでいて、自分も黒い液体を喉に流し込んだ。コーヒー独特の香ばしい匂いが鼻を抜け、じんわりと体の中心から温かくなってきたのが分かる。

「ちゃんと気配りしてくれるなんてやっぱり王家ってすごいよね」

こそつと妻がそんなことを言う。俺は小さく頷いた。

「おかしまだ？」

まんまるの目を輝かせて聞いてくる娘。ちよつと飽きてきてしまったのだろうか。なにか興味をそらす話題はないかと考えていると、声が聞こえてきた。

「お嬢さんはお菓子が好きなのかな」

「うん。あめとね、くつきーとね、さくさくしたやつ」

「そう。それなら今から行くお城にたくさんあるからもうちよつといい子にしているね。お友達もいるから」

言い終えると同時に、また何かが運転席から運ばれてくる。

それは、今放映されている女の子向けアニメの人形だった。娘の目がさらに輝きを増す。

「わあ……」

「その子たちと一緒に遊んでね」

「うん」

人形を掴むとすぐに遊び始める。ほつと安堵の息を漏らし「ありがとうございます」と謝辞を述べる。

「いえ、確かにこの長時間移動はお子様には飽き飽きするものでしょう。ご夫婦も、この1週間は準備等で慌しく、疲れが溜まっておられるでしょう。よろしければ、この移動中にお休みください」

「そ、そんな」

「遠慮なさらないください」

ふと寝息が聞こえた気がして横を見ると、もう妻は夢の中だった。頭を抱えなくなったが、ふあ、と自分の口から欠伸が出てしまい、瞼が重くなってきた。やはり疲れているのだなど思い、言葉に甘えることにした。

*

深い森の奥にそびえ立つ大きな宮殿。

宮殿といってもきらびやかなわけではなく、真っ白な壁の上品な宮殿。

その地下。岩の壁に等間隔で置かれている蝋燭のみが照らす薄暗い道を、使用人は歩いていた。

彼が押しているカートの中には3人の人間。男性と女性、そして幼稚園児くらいの女児が放り込まれている。ガタガタとカートが派手に揺れても、目を閉じてピクリとも反応しない。

ガタンつとカートが一際大きく跳ねる。どうやら車輪が何かに引っかかったらしい。

行く手を遮る白くて大きいモノを掴み上げる。

頭蓋骨だった。

大きさから人間のものだろう。ぼつかりと丸く空いた2つの穴と目が合う。かつて歯が並んでいたであろう場所には何も無く、空洞だった。

壁に向かって投げ捨てる、がしんと音をたてて簡単に砕け散ってしまった。

さらに進んでいくと、ガタガタと不快な音しか出さなかったカートがおとなしくなる。代わりに水しぶきをあげるようになってきた。

床一面に溜まっている液体の色は分からない。

辺りは鉄のような匂いが充満している。

使用人が足を止める。

重たそうな金属の扉が岩の壁に取り付けてある。扉の上部には小さな鉄格子がはめ込まれており、そこから見えるのは暗闇だけだ。

ズボンのポケットから取り出した錆びついた鍵を使って扉を開く。同時に、扉の中からちよろちよろと液体が流れ出す。

鉄の匂いが強まった気がした。

使用人はカートの中身を蹴り出す。ぱしゃぱしゃと暗闇の中へ飛び出す3つの体。

扉が閉まり、ガチャンと施錠をする音が聞こえる。

足音が遠ざかる。

3人は目を覚まさない。

*

パキ、ポキ。何かを折る音。

ガリツ、ゴリツ。何かを砕く音。

ごくん、ごくん。何かを飲み込む音。

すべて金属の扉の中から聞こえてくる。

静かになると、数秒後、どこか遠くで鐘の音が鳴った。

金属の扉からは、もう何も聞こえない。

*

「こらこらお前たち。喧嘩はやめるんだ」

くまのぬいぐるみの取り合いをしていた長男と次男を引き剥がす。むすつとふてくされる長男と、今にも涙があふれそうな次男。三つ子なのに性格がみんな180度違う。泣きながら長男と次男の喧嘩を報告してきた三男は、今頃妻があやしているだろう。

「仲良くしないとダメじゃないか。お前たちはたった3人の兄弟なんだぞ」

「だっておにいちやんが……いつもはひーろーとあそぶのに、ぼくのくまさんにとっていこうとするんだもん」

「たまにはくまさんとも『たいせんごっこ』したい」

「くまさんはぼくと『おままごと』するからだめ」

一歩も譲ろうとしない2人にどうしたものかと頭を悩ませていると、ぺちぺちと足音が聞こえてくる。

「おにいちゃんたち、けんかしないで……」

まだ半泣き状態の三男が間に入ってくる。2人の兄がきよんとんとしているのにも構わず、必死に声を上げる。

「えと、えっと、そ、それじゃ、くまさんは、いつもはおうちでごはんたべたりおひるねしたりするけど、こまってるひとがいるとひーろーになってわるものとたたかえば、いいんじゃないかな」

まさかの妥協案を提示してきた。呆然としてみると、三男の後ろから、妻がにこにこしながら現れた。どうやら入れ知恵をしたらしい。

「わあ！ それかっこいいね」

「アニマルレンジャーみたいでかっこいい」

「じゃあ、あそぼ」

あつという間に和解し、くまのぬいぐるみとともに子供部屋へ消えて行く子供たち。3人手を繋いで、仲良しでなによりだ。

「助かった。ありがとう」

「いえいえ。微笑ましいですね」

「ああ。幸せだ」

優しい妻と、仲良しな三つ子に囲まれ、俳優としての仕事も軌道に乗ってきて、毎日が充実している。

この「幸福な国」の中でも、1番俺たちが幸せなんじゃない

いかと錯覚してしまうほどに、幸福でいっぱいだ。

大きく伸びをすると、家のチャイムが鳴る。

「あら、どなたかしら」

「俺が見てこよう」

立ち上がり、玄関のドアを開けると、パリッとしたシャツに上品な金色の刺繍を施されたベストを着た男性が立っていた。穏やかな笑みを浮かべ、男性は口を開く。

「おめでとうございます。貴方がたは最高の幸福への切符を手に入れました」

リンゴンリンゴン 鐘が鳴る

リンゴンリンゴン 鐘が鳴る

それは幸福の合図

いつまでも続く幸福の合図

明日も幸せでありますように

リンゴンリンゴン 鐘よ鳴れ

リンゴンリンゴン これからも

リンゴンリンゴン 鐘が鳴る

リンゴンリンゴン 鐘が鳴る

さくら草が咲く頃に

鹿児島高等学校 一年

海平颯太

僕が君に伝えたいこと。それは……。

旧校舎の音楽室、そこは高一の頃からの僕の休憩場所だ。この場所は、僕が所属している合唱部の部室としても使っているが、昼、放課後のどちらも誰も来ない。それは、部員が僕しかいないからだ。元々は二十人いた部活だったが、五人は家庭の事情で辞め、残りの十四人は卒業してしまった。合唱部に入ったものの、結局みんなとは一度も大会で歌うことができずに時が過ぎた。

気付けばもう高校三年生の春。いつものように古くなったフローリングの床に横になって天井を眺めていた。そのうち視界がぼやけてきて気付いたら寝ていた。起きたら放課後になっていて、授業も二時間分サボってしまった。焦って起き上がったその時、ドアが勢いよく開いた。

「うわっ！」

突然のことに、思わず漫画のように跳ね上がってしまった。

「おーい拓実、新入部員だぞ」

それは友達のと樹だった。こいつは中学の時から唯一の友達だ。

「新入部員？」

「おう！」

「おまえが？」

「まさか。この子だよ」

和樹の後ろには女の子がいた。風になびく黒髪ロングに、雪のような白い肌。彼女の輝く瞳に僕は見とれていた。

「……でこの子がつて聞いてんのか！？」

「あ、ごめん」

「ちゃんと聞いとけよ」

「うん」

「この子転校生で、前の学校で合唱部だったんだと」

「へえー、あの一お名前は」

「はい。私の名前は白井かなめといいます」

彼女の期待の眼差しにこの部の今の状況を伝えるのは心が痛んだ。しかし彼女の顔には何故か大丈夫ですと書いてある気がして、僕は嫌な予感がした。

「部員集めましょう！」

その予感息をつく間もないくらいの速さで的中した。彼女に連れられて二人で部員を集めることになった。部活に入っていない一年生を誘ったり、時には彼女が校庭で歌を披露するなどしていた。見た目に反して大胆なことをする子だった。そのかいもあって、なんとか合唱ができる人数がそろっ

た。アニメオタクや映画マニアなど癖の多いメンツばかりで、僕は彼らとうまくやっていける自信がなかった。ただ暇そうだからという理由で、和樹が入ってくれたことが僕の唯一の救いだった。それから、白井さん以外の女子も何人か入ってきて、正式に活動を始めた。

「じゃあまず、ウォーミングアップがてら何か歌ってみようか」

「そ、そうだね。何か歌いたい歌とかある？」

「アニソンかな」

「童謡でいいんじゃない」

この人たちに聞いた僕が馬鹿だった。バラバラな意見が飛び交い口論になった。内容が低レベル過ぎて、あきれてしまった。

「じゃあ Believe でやってみよう」

白井さんが放ったその言葉は、周りの空気を一転させた。普通のことを言っているだけに不思議とみんな彼女に惹かれた。たぶん彼女は人を引き付ける才能があるのかもしれない。だから部員がこんなに増えたのだろうと、そんなことを考えていた。結局曲は彼女が言った Believe になり、最初は歌える人だけでやってみた。結果は思ったとおり最悪の出来だった。僕もなんだかんだで、大人数で久しぶりに歌ったので自分も出来ていたとは言えなかった。

「今日の練習は終わり。お疲れ様でした」

久しぶりの練習で、きつくて体のダルさが異常なまでにあ

った。

「お疲れ様、拓実くん」

「うん」

「練習楽しかったね」

「え、あんなにバラバラだったのに？」

「うん。ていうかバラバラだからいいんじゃない」

「え？」

彼女は満面の笑みで僕の顔を見てきた。それから、音楽室の入り口側の窓から見える橋を指さして言った。

「あの橋みたいに、みんなをつなぐ。これが私の目標だから」

「つなぐ？」

「ほら、私の名前かなめっていうでしょ。私ね、みんなと、音をつなぐかなめになりたいの」

「かなめ……」

「なんか親父ギャグっぽいこと言って恥ずかしくなっちゃった」

親父ギャグっぽくて恥ずかしいとか言っているが、彼女の表情はまったく照れを感じていなかった。それとは逆に、決意に満ちた表情をしていた。

「白井さんっておもしろい人だね」

「やっと笑った」

「え？」

「歌ってる時みたいに、拓実くんは笑顔の方がいいよ」

僕はこの時、初めて歌が心から好きなのだ実感できた。

その後、僕も彼女も部室を後にした。

翌日、重大発表があると彼女から部員全員に集合がかかった。集合時間を大幅に遅れて、僕以外のメンバーがぞろぞろ来た。その後ろに白井さんの姿もあった。

「ごめんちよつと遅れちゃった」

「ちよつとどころじゃないけどまあいいよ」

「用件は何ですか？」

眼鏡をかけたおさげの女の子が言った。この子は内申書のために入ってくれた子だ。今どきおさげは珍しいが歌はかなり上手い。

「実はね……」

「はい」

「今度、地区の合唱大会に出場します！」

「えー！？」

驚愕の嵐だった。それもそのはずだ、まだチームになって間もないのに、いきなり大会なんて無謀すぎる。それに大会まで一カ月を切っていたのだ。やる前から勝敗は決しているようなものだ。

「あの、白井さん。さすがに大会は厳しいと思うけど」

「厳しいなら練習しよう」

「え？」

「来週から夏休みでしょ？」

「うん」

「それを利用して合宿しようと思って」

「合宿！？」

「またも驚愕の嵐だった。」

そんなこんなであつという間に夏休みになり、初の合宿が始まった。場所は彼女の親戚のお寺で、合宿期間は一週間、初日から白井さん考案のハードメニューが課せられた。まずはランニング。

「どこまで走るんだよ」

「グズグズ言わない」

「なんで白井さんは自転車なの」

「まあまあ、そんなに怒らないでよ。さあ、みんな頑張つて」
彼女は勢いよく笛を吹いた。彼女は自分で練習メニューを考案したものの、彼女自身がそのメニューをやることはなかった。自転車に乗り、先に行く彼女の後ろ姿に、どこか寂しさを感じた。それから合宿も二日目、三日目とたち、気付けば四日目に突入していた。今日は夜に夏祭りがあるらしく、この日は朝からみんなで海まで行った。テトラポットの並ぶ堤防で、水平線に向かってひたすら歌った。四日目に入り、確実に成長していることを全員実感していた。昼からは自由時間になり、海で遊ぶことになった。でも僕は、ただ一人木陰で座っていた。別に遊びたくないわけではなく、泳げないからだ。ボーっとしていると和樹が声をかけてきた。

「拓実！」

「なに」

「お前な……そんな顔してたら白井さんに嫌われるぞ」

「うっさい」

それだけ言って和樹はまた海の方に遊びに行った。多分和樹は、僕のことを心配して言ってくれたのだろう。中学の時からのたった一人の親友で、高校に入ってからクラスの違いは僕の方に毎回来てくれる。正直和樹がいなかったら今の自分はないと思っている。本当に感謝してもしきれないぐらいだった。あたりもすっかり暗くなり、まちにまつた夏祭りが始まった。焼きそばにたこ焼きに綿あめ。金魚すくいにかき氷。いろいろな屋台が立ち並んでいた。

「拓実くん、あっち行ってみよう」

「白井さん、そんなに引つ張らなくても行くから」

僕はまた彼女の後ろ姿を見て走っていた。今度は近くで。

彼女は僕の手を強く握り、こちらに振り向くことなく走り続けた。そして、いつのまにか祭り会場から離れて、坂を登り高台まで来ていた。そこは、星の光がいつもより強く、下に見える祭り会場の明かりが乏しく見えた。

「私さ、この場所すごく好きなんだ。ここ誰もいないから一人だけの空間って感じで」

「でも一人って寂しくない？」

「え？」

「あ、いや、あの……ごめんなんでもない」

彼女の表情が一瞬曇った。何か悪いことを言ってしまった

気がして、そこから先はなにも言わなかった。

「君はさ、将来やりたいこととか決まってるの？」

彼女の質問に、僕は何も答えることができなかった。

「そろそろ帰ろうか。」

「うん。」

最初に登ってきた坂を下った。僕はまた彼女の背中について行っていた。別に見ていたいとかそんな理由じゃなくて、ただ単に道がわからないからだ。その後、結局一度もまともに話さなかった。

合宿が終わり、大会二週間前になった。コンビニで買い物をしていると、携帯の着信音があった。

「もしもし」

「やっつでた」

「なんだ和樹か。どうしたんだよそんなに慌てて」

「実はな……白井が救急車で運ばれて」

「え？」

あまりにも唐突で頭の中で整理ができなかった。僕はコンビニから飛び出てひたすら走った。

「和樹、白井さんはどこにいるの！」

「学校近くの赤坂病院」

走って、走って、走り続けてやっつ着いた。僕は急いで看護師に居場所を聞き、彼女の病室へと向かった。

病室の扉をあけると、和樹と、ベッドに寝ている彼女の姿

があつた。目を閉じて、声をかけても起きない。変わり果てた彼女の姿に、動揺を隠せなかった。僕はベッドの横にある椅子に座り、和樹から事故のことを聞いた。それから、ただひたすら彼女が目覚ますのをまつた。でも、その日彼女が目覚ますことはなかった。それから何日も何日も病院に通い、気付いたら大会一週間前になっていた。いつものように僕がお見舞いに持ってきた花を花瓶に飾っていると、突然病室のドアが開いた。和樹だと思つてのぞいてみると、そこには見知らぬおばあちゃんがいた。

「誰ですか」

「あなたこそ」

「僕は彼女の友達のこと」

「あ、もしかして拓実くん？」

「どうしてそれを」

「花よ」

「それだけで」

「いつもいろいろなお花を飾ってくれるのはきみでしょ」

よくよく話を聞いてみると、驚いたことにその人は彼女のおばあちゃんだった。そして、白井さんはいつも部活や僕のことをよく話していたらしい。彼女はお風呂が嫌いだったり、食べ物には生姜が嫌いだったりとおばあちゃんとの話で、知らない一面を多く知った気がした。そして、彼女は重い病気を抱えているという思いがけない一面も知った。彼女はガンらしく余命宣告までされているという。彼女が見せたあの寂し

げな背中が、それを僕に伝えようとしていたのかもしれない。「あのこの夢知ってるかい？」

「夢」

「そう。夢」

「かなめになる。じゃないんですか」

「あれはね目標だよ。あの子の夢はね。空に向かって飛び立つことなんだよ」

「じゃあ僕は。彼女が目覚めたときに……」

「うん？」

大会本番。

結局彼女が目覚めることはなく、大会は彼女無しで挑むことになった。曲目はさくら草。彼女のおばあちゃんから聞いた彼女が一番好きな曲だ。緊張をほぐしているとあつというまに自分たちの番になった。

『プログラム三番 ○○高校によります さくら草です。』

彼女が僕にチャンスくれた。彼女が僕の背中を押してくれた。だから、僕は歌い続ける。小さく揺れるさくら草のように、君が飛び立つその日まで。君への応援花を。

君に伝えたいこと。それは、さくら草が咲く頃にまた……。

蟹（キャンサー）

志學館高等部 一年

内木場 敬

カニは食事をしていた。うまいともまずいとも何も思わず、ただただ口とハサミを動かしていた

食べているのはさつきここを通った自動車に轢かれ、つぶれた蟹である。蟹はついさつきまでカニの横を歩いているところだった。自慢のはさみは粉々に砕け、足はあちらこちらに散らばっていた。カニはハサミの先で甲羅に包まれている肉を器用に取り出す。ハサミの先からでもぐによりとした質感が伝わった。味はわからない。いや、「味」の概念すらないといったほうが正しい。

何も思わないのは無理がない。蟹を始め、多くの動物たちには食べ物の味を細かく味わうことは基本的にプログラムイングされていない。食事とは栄養素を補給するためにあるものだった。味なんてどうでも良かった。ましてやこんなことを考える機会すら彼らにはなかった。しかし、ただ一つの生物を除いてはだが。

カニは食事を終わると近くの岩の隙間にある自分の巣に戻

ろうとしていた。蟹が棲む川は今の街中の川のようにコンクリートでふちを固めてなく、時代に取り残されたように昔のままの川だった。蟹は何も思わず、考えないで巣に戻った。彼を動かしていたのは生き物としての生存本能だけだった。

夜になり、あたりは墨汁をこぼしたように真っ暗になった。カニはふと、顔を見上げた。何かがちらに迫ってくる気配を感じたからである。カニが横歩きでその場をサカサカと去ろうとするのより早く、川一帯に大きな衝撃が走った。カニはその衝撃によつて起こった荒ぶる水流に体がもっていかれまいと足の爪を砂利にがちり食い込ませた。もくもくと水中で舞い上がる土の奥の方にカニはじっと目をこらした。しばらくして視界がきれいになると、この衝撃の犯人がわかった。それは「人間」というこの世の王（ロード）だった。

ざっと見ると若い男性のようだ。体型はそこそこ肥満気味。水から伝わってくる匂いをかぐ。落ちたときに頭を打ったのだろうか、血と体の中のもの特有の匂いがした。ちょうど昼に食った蟹と同じ匂いだった。頭は半分、ペしゃんこにつぶれて中身を川にぶちまけていた。あれだともう助からないだろう。ふとカニは思いついた。（あれを食べよう。）でっぴりと太っている体はおそらくこの川で一番のごちそうである魚の死骸の何倍も栄養価が高そうだ。本能でそう判断したカニは早速、死体に近寄っていった。

改めて近寄ると死体はカニにとって、巨大だった。頭だったところに到着し、食事を始めた。さっきの蟹と同じで味はわからなかった。ただ栄養がともあることだけは体がなんとなく理解していた。

食事を始めてしばらく経ったときだった。お腹になるべくたくさん肉片を詰め込もうとしていたカニの脳裏に違和感が走った。最初は小さい雑音のようなものだったものが次第に大きくなっていった。カニは混乱した。一週間前ぐらいにサギに突然襲われたときの何倍も体の中がどくどくしていた。カニは頭を振り、ハサミで甲羅をゴンゴン殴った。しかし音はどんどん大きくなる一方であった。カニはやけくそになり、その音を脳内で真似てみた。すると、

「なななななんんだあだだだああだ」

とさつきとはちがうトーンの音が聞こえてきた。

「ねえ、ねえ、ねえ！！もしかしてわかる？ 僕の言葉！？」

今度はさつきから聞こえてくるやかましい音が聞こえてきた。しかも、音から言葉に変わっていた。カニはさつきと同じようにつぶやいてみた。

「なんだ？ あんた」

今度は自分の考えていたことがきれいに出了。あの違うトーンの音はどうやら自分のものだったらしい。そしてそれに応えるかのようにあの声も聞こえてきた。

「あつ！ わかる！？ わかる！？ 聞こえる！？」

「聞こえるさ。もううんざりくるぐらいにな」

「ああー。良かったーかな？」

「あ？」

「い、いやな、なんでもない。と、とこっろできみっは誰？」

「俺？ ……カニだよ」

「えっ？」

「カニだよ」

「蟹ってあのはさみがついている？」

「ほかにどんな蟹がいるのさ。はさみが人間の手のようにひらひらしている蟹はこの川にはいないぜ」

カニは脳裏で繰り返し広げられている意思疎通に困惑していた。生まれてからこんなことは一度もなかった。蟹としてこんな機能はもとからプログラミングされていない。今まで全く違う概念の塊とカニは向き合っていた。

「おまえこそ誰だ。神様か？」

「神様？」

彼は途端にげらげらと笑い出した。

「僕が神様？ 冗談じゃないよ。僕はただの人間さ。まあ：

…

「まあ？」

彼の声は途端にぼそぼそと小さくなった。

「もう死んでいると思うけどね」

「死んでる？ ああ、それって…」

カニは目を死体に向けた。死体にはほかの蟹や虫、魚が群がっていた。(食い損ねたな)カニはハサミをカチカチとついていた。

「お前、まさか川に落ちて死んだか？」

「えっ！？ な、何でわ、わかっただけなの！？」

ここまで聞いてきてわかったことがある。

(こいつは絶対、話すの下手だ)

「俺の目の前に人間の死体がある。お前、太っているだろ？」

「ま、まあ」

「ちなみにお前の死体は今、いろんなやつにむしゃむしゃ食われているぜ」

「は、はあ！？」

「ちなみに俺もあんたの頭の一部を頂戴したぜ」

「……」

「ん？ どした？」

「今、とても吐き気がするけど肝心の体がないから吐けないよ……うう、気持ち悪い……」

「俺からしたら突然、頭ん中につぶやいてくる方が気持ち悪いぜ」

しばらく相手は無言だった。どうやら思ったことは全て言わない方がいいのかもしれない。

それから数日が経ったが、この現象が直ることはなかった。カニは突然頭に響いてくる声でやや寝不足になっていた。一

方、この数日でわかったことがいくつもある。彼の名前は塚原寛。今年でニジュウエイツサイ。ダイガクと言うところには行かず、家でジタクケイビインということをやっているらしい。

シュミはゲーム、パソコン、アニメ、プラモデル、マンガなどと、ここから会話がまったく成立しなくなった。生まれて初めて関わった人間の文化は、カニにとって未知の領域だった。人で言うところの文化は、カニにとって未知の領域だ。わからない単語が次々とカニの脳内を支配し混乱を招いた。ところが、不思議なことに会話を垂れ流しで聞き、適当に相づちを打っているうちに自然と言葉の概念がじわじわとわかってきたのだ。今までは食べていい物や天敵、子孫の残し方程度しか入ってなかったカニの脳には次々と本来生きていくために必要ではない知識がぎぎ込まれていった。カニは自分がまるで自分でなくなるような違和感を覚えながら一日一日を過ごしていった。

最初のあの日から一週間ぐらい過ぎた日のこと。

その日は台風が近づいているらしく川は大荒れだった。川の中にある家から避難し、離れた森の中へとカニは移動した。しばらく森の中を歩き回り一時的なすみかを探した。雨と風はますます強くなり森はごうごうとうなりをあげていた。ようやく見つけた丈夫そうな洞穴に身を潜めるとあの声が聞こえてきた。

「今、だ、大丈夫？」

「ああ。今日の天気はこの有様だ。狩りになんていったらこっちの足数本持ってかれちまう」

「そ、そうか。ならこの前話していたプリキュ」

「待て。その話はつもらん」

カニはきっぱりと言った。

「！？」

「そもそもなんだ、そのーええとーああ、なんとかステッキっていうやつ？ そんなもんで自分よりも大きいやつをどーやって倒すんだよ」

「そっそれはええと……」

「そもそもなんで変な言葉を言うだけで火や電気が出るんだよ。言うだけで出るなら俺がとつくの前から使ってたあの川のボスの糞亀野郎をステッキにして晩飯にしてるぜ」

「えっええと……」

「ほかにも言いたいことはあるけど一番変だと思ったことがある。」

「そ、それは」

「それはだな……なんでガタイの面白い、雌が戦っているのに雄が戦わないのさ？ 筋肉ムキムキマッチョマンの雄が戦った方がより効率的に倒せるしいいことづくめじゃないか。違うか？」

「……」

「なんだ、言い返せないのか」

「……違う」

「ん？」

「違う！！」

その時、彼の音量MAXの叫び声とちょうど近くに落ちた雷の音が同時にカニを襲った。

「そんなのロマンが……ないっ！！」

彼の魂の叫びは落雷音と合体し一つの騒音となった。

「うるせえ！！ 音量加減しろバカ！ 耳逝くところだったじゃねえか！ それに何だよ。ロマンって。マロンの間違いじゃねえのか？」

「なんだと！？ ふざけんじゃねえ！！ ムキムキのおっさんの女装なんて誰得だ！！ 俺の嫁を馬鹿にしやがって！ ふざけんよ。いちいちよけいなこと言いやがってこの蟹野郎」

「なっ……！！」

急に寛の性格が変わった。例えるならタニシがアメリカザリガニぐらいに変貌した。さっきからものすごい早口で何か言っている。もう何を言っているのかはわからない。しばらくの間、何を言っているのか必死で聞き取るうとしたが脳にぐわんぐわん響く声にカニはどうとうしびれを切らし、

「いいかげんにせい！」

と言い、ハサミであちらこちらを殴った。すると、何かふかっとするものに触れた。自分は純正アカテガニなのでモズクガニのようなふわふわした毛は手についていない。

じゃあ何か？　なんだかいやな予感がする。カニはおそろおそろ振り向いた。するとちようど暗闇で光る二つの目が目と鼻の先にあった。野良猫。とっさにカニの脳が目の正体を察知した。ヤバイ。カニは本能で野良猫が昼寝の邪魔をされて非常に不機嫌であることを理解した。いくら自慢の甲羅とハサミでも相手が悪すぎる。おそらく勝ち目はゼロに等しい。ならば答えはひとつだ。さつきからやけに静かなカニの様子に気づいたのか寛もいつの間にか黙っていた。

「ねえ……なんかあった？」

カニは深い深呼吸をつくると早口で言った。

「寛」

「ん？」

「逃げるぞ！！」

その瞬間カニは洞穴から飛び出した。八本の足でせかせかせかといつもの二倍ぐらいのスピードで雨の中を駆け抜けた。しかし相手は猫。差はあつという間に縮められ、今にも捕まりそうである。

「だ、大丈夫なの！？　僕死にたくないよ！！」

さつきの怒りはどこにいったのか、寛はアメリカザリガニからタニシに戻っていた。

「うるせえ！　黙っている！！　そもそもお前はもう死んでいるだろ！！　つてうわわわ！！」

右に来たストレートの猫パンチをギリギリでよける。カニの脳裏には以前猫に襲われ、手足を全てもぎ取られ、甲羅を

爪で剥がされて死んだ他の蟹の姿が浮かんだ。(このままじゃいつか絶対捕まる……)カニは考えた。どれくらい逃げただろうか。一心不乱に走っていると突然道が広くなった。そして広くなった道の先にある「あるもの」を見てカニはふと、思いついた。

「おい、寛！」

「ん？」

彼の声はいまにも消え入りそうな声だった。

「いまからいいと言うまで絶対話しかけるなよ。チャンスは一回しかないからな」

「チャンス！？　それってどんなも」

「いいから黙っている！　俺もおまえみたいなやつと一緒にこんなところで死にたくないんだよ！！」

「わ、わかった……」

寛がようやく黙ったのを確認したカニはカウントダウンを始めた。もう「あるもの」は目の前だ。

「10――――9――――8――――7――――
――――」

足がもう限界でガクガクしている。カニは疲れ切った体にむちを打った。

「6――――5――――4――――」

猫の手が今にも甲羅に触れそうだ。猫も逃がすまいと目を光らせながら追いかけた。

「3――――」

寛がゴクリと息をのんだ。

「2ーーーーー」

猫が一気にスピードをあげ、手を伸ばした。

「1ーーーーー」

カニは一瞬、振り向いた。目の前には爪を全開にした猫の手があり、奥からは勝ち誇ったような猫の顔が見えた。そして、

「0！！！」

それは一瞬の出来事であった。

カニは横に立っていた標識にハサミでガツチリと掴まった。猫の手がカニに当たった勢いでカニは地面と平行になり、まるで鉄棒選手のような体勢となった。カニはそのままぐるりと回り猫の突進を回避した。猫は勢い余って線路に飛び出した。顔を砂利だらけの地面にぶつけ、痛みながらも立ち上がったとき、猫の目の前に電車が立ち塞がった。電車は猫に回避の隙を一切与えることなくその場を通り過ぎた。猫は一瞬で吹き飛ばされ、空中で雨を赤く染めながら電車が通り過ぎた線路にばちやんと落ちた。猫は体中の骨がバギバギに折れていてびくりとも動かなかった。首から上は電車に当たったときにつぶれたのか根元を残して姿を消していた。今頃電車の先頭部分には猫の顔の部品がこびりついていて一つの模様になっっているだろう。体中からこれでもかかと血が流れ出ていてあたりはまるでラフレシアが咲いたようだった。漂っているのは悪臭というより死臭だが。

くたくたになり体から力が抜けたせいかな、カニはしばらく

その場から動けなかった(まさかここまで上手いくとは。)

カニはぼんやりとしているとおそるおそる寛が聞いてきた。

「も、もういいか、な？」

「ああ、もういいいぜ。少し休ませてくれ」

「い、いったい何がどうなったの？」

「簡単に言うと猫に追っかけられたから返り討ちにした」

「は！？」

「細かく説明するとだな……」

カニは今まで何が起こったのかをなるべく細かく説明した。嘘言うとか蟹ごときにそんなことできるわけないなど一向に信用しないので説明にかなりかかった。ようやく納得したのは話し始めてから15分位経ってからだった。

木工人形

日本航空高等学校 二年

南 泰圭

「おもちゃ箱に戻らなきゃ」

僕はそう漏らして、硬い木でできた右足を前に、一つ、進めた。

その帰路は酷いでこぼこ道で、足の踏み場もないほど、そこいらに枯葉のようなものが散乱していた。枯葉なら踏んでもいいじゃないかと囁かれても、僕はその枯葉を踏む音を聞くのが辛抱ならない。

枯葉を一枚一枚拾いながら歩を進めてから、十九年が過ぎている。未だ新緑は姿を見せず、足元をただ、茶色が覆っていた。

もともと木でできていた脚は、関節を曲げる痛みを上げ始め、伸ばす指先が痺れるようになっていて、枯葉を入れ込んだ胸ポケットもいつぱいになっている。

木でできていると、疲労感なんて感じない。でも、木で組み合わされた関節は年を経るごとに劣化の表情を醸すようになってしまった。

一步、また一步。おもちゃ箱へつながる一本道を歩いてい

る。

脚が踏めるだけの枯葉を集め、それを胸に仕舞って、大切に大切に持って歩く。時折、その塊が重しになっているような気もするし、枯葉たちが腐っていないかも気になってしまふ。

それでもただ、足を踏み込むしかなかった。

道に迷い込めないから、一本の道しかないから。駅も、バス停も無くて、向かう先だけ決まっている。そんな、僕の歩みを誰も、見てなんかいないから。

しかし、驚いたことに十九年目の三日目、僕の足先に少しだけ木の実の当たる音がした。それは、小さな木の実で、それを落とした少女から聞くに、どんぐりというものらしかった。それは、少し青かった。

初めて、人に会った。木の実を拾い上げ、顔をあげると、一人の少女が、そこに佇んでいた。その奥には、熱気を上げたアスファルトが続き、凝らすとその先の枯葉は少しだけ生氣を帯びているようだった。

「こんにちは、私ね、情操教育人形、って言うの」

「僕は、木工人形」

自己紹介を済ませると、彼女は、君の役割は曖昧だね、と言って笑っていた。僕も、それにつられて、少しだけ膝を笑わせてみた。少しだけ、限界が近づいていたみたいだ。

「体はプラスチックとか、ビニールでできていてね、髪はポリ塩化ビニリデンでできているの」

「やけに具体的だね、僕とは違うや」

「君は、何でできているの」

「木」

「そっちのほうが具体的だね。具体的と言うか、私も木、知ってるもん」

「ポリ塩化ビニリデンなんて、僕は知らないなあ」

「そうでしょう、と残念そうに俯く彼女に、ポケットからハンカチにも似た枯葉を差し出すと、それを嬉しそうに受け取った。死んでもなお、需要のある葉はあるのだと、知った。

「少しだけ、座って話しましょうよ」

「いいけど、何で」

「疲れたでしょ、息抜きしましょうよ。私と一緒に」

僕は、足元に広がった枯葉を手早く集めて、二人が座れるだけのスペースを作った。その場所に、タオルにも似た葉を敷くと、彼女にそこに座るように促した。

「使い古されたものでも、喜ぶ物はあるのだと、知った。

「木工人形は、どこからきたの」

「サナトリウムみたいなところだよ。時々、そこに帰らないといけなくて、そのせいでなかなか目的地にはたどり着けない」

「じゃあ、目的地は？」

「おもちゃ箱だよ。僕はそこに帰らないといけない。自由に溢れるおもちゃ箱に」

胸を張って、そう答えたけれど、彼女は少しだけ首をかし

げて「箱なのに自由なの」と小さく呟いていた。僕はそれを、聞いていないことにして、胸を張った時に走った痛みを苦しむふりをした。それは不確かなプライドだった。

「木工人形は、そのおもちゃ箱で何をするの？」

聞かれて、少しだけ驚いた。そこでは何ができるのだろう、と思ったからだ。信じがたいことに、僕はおもちゃ箱の中身を知らないでいた。

「おもちゃ箱で、まずはこの木を隠す服を買うんだ。こんなんじや笑われるかもしれないから。それで、今まで拾った枯葉を配って、歩こうかな」

「そう、それぐらいならできるかもね」

「そうかな」

「きつと、できるよ。木工人形みたいに謙虚なら」

淋しそうに笑う情操教育人形に少しだけ違和感を覚えながらも、その違和感の正体を突き止めようとすることはできなくて、そのくせ彼女の言葉のおかげで少しだけ自信をつけた僕の目には一枚の緑葉が映った。それを拾い上げて、また胸ポケットにしまった。

それから、その日はサナトリウムみたいな僕の居場所の話をした。その話の傍ら、集めに集めた枯葉を彼女に差し出すと、嬉しそうに陰の入った笑顔を浮かべるのだった。

僕は、嬉しくなっていた。

僕だけ、嬉しくなっていた。

× × ×

「何でおもちゃ箱に行きたいの？」

無垢な黒目をむき出しにして聞く情操教育人形に、僕は、何でだろうと、短く答えてみた。でも、僕の足は今完全に止まってしまっていて、おもちゃ箱に帰るといふ目的を少しだけ遅らせている。

「胸の枯葉は、どうしてずっと集めているの？」

「これは、歩くためだよ。枯葉を一つも踏みたくないんだ。

目先のそれらを取り払わないと歩けないんだよ。多分」

「君は今、どこを指しているの？」

「どこだろう、おもちゃ箱だよ」

僕と彼女は、堂々巡りの会話をつづけた。それも、仕方がない。僕の持つ唯一のサナトリウムの話が終わったからだ。頭を透かされ、木製の足を触られ、電流を流される、そのサナトリウムの話が、もう終わったからだ。

「ところでさ、情操教育人形は、どこから来たの？」

木製の口を動かしながら、今までここに存在していなかった葉を錬成する。ふと、頭にわいてきた疑問を口にしただけなのに、彼女は少しだけ諦念の籠った笑顔を作った。

情操教育人形は、笑顔しかできないみたいだ。

「私はね、おもちゃ箱から来たの」

思っていた返答とはどこかずれていたのに、期待していた回答とは近似値を示していた。僕は、それを聞いた途端、色

を塗られただけの眼球をむき出しにして、彼女に迫ってみた。

「どういうところなの？」

「住みにくいところだよ。でも、素敵なところかもしれない」

「どういうこと？ どんなおもちゃたちがいるの？」

「ほとんどが、情操教育人形でね、たまに怪獣とかもいて、おもちゃ箱の王様は正義のヒーローみたいな格好しているんだよね」

「そうなんだ、楽しそうだね」

「どうだろう、王様もたくさんいてね、ただの人形たちも王様の仲間入りするときもあるの。そうやって、みんなで力を合わせて怪獣を倒したり、おかしな王様に怪獣の着ぐるみを着せてあげたりする」

「で、情操教育人形は、何でここに来たの？」

「退屈でね、どこか、退屈でね。ほんの試しに私は情操教育人形じゃない、って叫んだら、いつの間にか、怪獣の着ぐるみを着せられたの。みんな遊び半分だったのに、気が付くと、私、本当の怪獣みたいになってさ。その王様に倒されたの」

「それで、それで？」

「どうにか逃げようとしたらね、下半身をケガしちゃってね、このありさまだよ」

彼女は、自分の身を包むその布を剥いで僕に向けて笑った。そこには、何か分からない、僕には想像もできない傷が生きて、おもちゃ箱で足掻いた証が黒く残っていた。

心なしか、彼女の息は少し上がっているようだった。

「おもちゃ箱は、私にとって不幸なところだったわ、それらを
一息に吸い込んで、肺いっぱい不幸がたまつてね。
退屈なのに、楽しむことができないんだよね」

「恐ろしいところなのかな」

「楽しいのは、恐ろしいよ。情操教育人形じゃないって叫ぶ
のは楽しかったから、そのせいで、その発言が私を後ろから
殴ってきたの」

「じゃあ、情操教育人形は、もう死んじゃったの？」

「死んではないけど、死んだようなものだよね。教育人形
であることに、もう希望はないみたいだから。もう、諦めた
の」

そうやって、彼女は右手で左の足をさすった。「この痛みは、
その戒めなのかもしれない」と漏らした彼女の声を僕は正し
く拾っていたのだろうか。

「僕、聞いたことあるんだよね、おもちゃ箱にはいろんな感
情が転がっているんだって、緑の葉が生い茂っているんだっ
て」

どうなの、と追い討ちをかけるように首をかしげて見せる
と、彼女はまた短く笑ってそうだね、と首肯にも見た俯きを
見せてくれた。

「例えば愛情、これは素晴らしい。例えば友情、これも素晴
らしいわよ。でもね、思ったよりも思うようにいかないんだ
よね。多分、木工人形が思うようにはできていないよ。青の
看板に白の絵の具で矢印、だ」

そうなんだ、と今度は僕が失望の縁に立ってみた。もちろ
ん歩は進んでいなくて、ありきたりの枯葉が僕たちの周りを
囲っているけれど、まだおもちゃ箱に行こうという志は消え
ていなかった。

僕は、それ以上、おもちゃ箱の話を聞くのをやめた。口を
閉ざすほうが利口だと思ったからというのが半分、これ以上
否定されたおもちゃ箱の話を聞くのが怖かったのが半分。も
う、思うように口も動かなくなっていたことも、半分。僕の
心は目もりが五割ほど多いみたいだった。

そして、彼女は、少しだけ落ちこんでいるように見えた。
だけど、僕の持つ葉は今、役に立たない。おもちゃ箱を知ら
ない僕の言葉はただ、否定されて終わる。口を閉ざすしかな
い。彼女には言えない理由ばかりを探しているようにも映っ
たかもしれない。

その日も、僕らは夜を語り明かして、そうして少しだけお
もちや箱へと歩を進めたのだけれど、彼女はおもちゃ箱に戻
ることを頑なに拒んだ。しかし、情操教育人形は、私がおも
ちや箱に拒まれたのだと言った。

怪獣には進む道がないのだと儂げに笑ったのだけれど、そ
の笑顔が綺麗だと思えるほど僕の心も澄んではいなかった。

× × ×

下らない話を、したい日もあるのだろうか。彼女は、今日

は少しだけ明るい笑みを浮かべて僕の近くに椅子をもつてきて座った。

僕と彼女は、立つ場所も座る場所も同じにはなれないのだと、知らされたのかもしれない。

「今日はね、おもちゃ箱が楽しくなるようなことを話してきたの」

「お、それは楽しみだ」

依然、足の動きは悪く、小さく縮こまるでくの坊にしか見えぬものだけれど、座ってしまえばそれは気にならなかつた。ただ、何かが衰える焦燥がその地面から伝ってくるようにも思えた。

「一概に情操教育人形と言っても、その姿かたちはいろいろあつてね、簡単に言うと、男女があるわけ」

「木工人形にもあると思うよ」

そう言うと彼女は、だったら話が早いかなと、また笑って口をせわしなく動かし始めた。

「男と女つてのは、不自然にも、自然にも引き寄せられるようになつていてみたいでね。情操教育人形を始めて一七年もたつと、性別の違う人形の姿が気になつてくるわけ」

「へえ、知らなかったな」

「私はね、その気になるって思いを昇華させて、一過性の愛情という気持ちに置き換えたの。すると、その時は思ったよりも思うように感情が動いて、そこら一帯の物に彩りが満ちてくるわけ」

「枯葉が新緑になるとか？」

相槌を打ちながら首を傾げると、他には、花も咲くかな、とか付け加えて、また幸せを蓄えた艶めく唇を動かし始めた。

「晴れて、私ともう一人の情操教育人形君は恋人という形に相成つたのでした。それに加えて、私はその時もう、情操教育人形を卒業したいと思つていたので、新たな歩みを始めていてね、彼も付いてきてくれることになつたのです」

「おめでどう、でいいのかな」

「その時は、おめでどうだね。でも、やっぱり感情つてのはその人が思うよりも軽くなつてなくて、一つの過ちや過ぎ去つてしまつた感情に起因する病気もあるんだよ。妬みと、嫉みつて名がついているんだけど」

「病気、か」

「怪我と病気は違つてね、伝播するんだ。感染してゆく、どんどんその広がりが増していく。気が付くと、彼もその病に侵されて、集団というバイ菌に淘汰されそうになつて、しがみ付いて行つたんだ。私は、一人になつたの。王様も怪獣も、大量の人形には勝てないようにね、一人の私が王様とその他大勢の人形に勝てるわけなんかなかったんだよね」

「悲しい話じゃないか」

「でも、続きがあるの。因果応報つて言うんだけど、皆がやってきたことが明るみに出るとね、それにさらなる外の王様が制裁を加えることがあるの」

「それはいい事、なのかな」

「それを信じて生きているとね、その一縷の希望を抱いた気にもなれて、さらに向こうへ、悲しみとか、憎しみとかの向こうに行けると思ったの。でも、そんなことなかった、何も、誰も制裁とか加えないで私はやっぱり一人だったわ」

「心の向こうには何かあると思ったの？」

「そりゃ何かあるよ。私はその希望を絶たれたけれど、君なら行けるかもしれない」

心の向こうへ、感情を超えた先へ、かな。僕にはよくわからない。なんてったって、枯葉の彩りに一喜一憂する、ただの木工人形なのだから。

「兎にも角にも、おもちや箱は王様やその他大勢にとって、凄く住みやすい世界だよ。でも、怪獣にはだめだ。仕立てられた怪獣もダメ」

仕立てられた怪獣、とは彼女が依然宣った『いつの間にか怪獣の着ぐるみを着せられた』ことを指すのだろうと、察しはつくけれど、そこに宿る諦念にはどうも共感を鳴らせなかった。

「だから、私も、その場所を発つたの。でも、断てない想いと、絶てない命というものを掴んでしまった。だから、今日は、たった今から、ここを発とうと思うの。ちようどいい時間を経ったから、もう、誰かを見下す念いとも、誰かを苛む情動とも、関係を断つの」

どう、いい感じに韻踏めたでしょ。将来はラッパにでもなってやろうかな。とか漏らしながら、情操教育人形は、そ

の培った情操をもって、その感情を表した。いやはや、同じ教育を受けた人形は、人形の名のごとく、同じ顔をする。常に、味気のない顔を。

「僕はね、木工人形って言って、じわりじわりと、侵されて行くように、足の木の老朽化が進んで行っている生物なんだ、だから、情操教育人形のような、いきなりブレーカーが落ちたみたいな、暗闇に彷徨う人の気持ちは分からないよ」

「それでいいんだと思う。やっぱり、あの日話しかけてよかったよ。人間同士は、理解できないんだと、改めて分かった。でも、おもちや箱だけは、良い場所じゃない」

「それでも、おもちや箱に行きたいときは、どうすればいいのかな」

「それなら行けばいい。その足で踏んで、その声を張って、その耳で聞けば、何か分かるかもしれない」

最後に、彼女は密かに言葉を漏らした。

「知らないのは、罪だ」

いつも聞かざるを貫いた僕の耳は、その新緑を拾い上げることなく、視線だけで追った。

それは、多分、その新緑が嫌に尖っているのを捉えたからなのだと思う。

僕はこの日以来、情操教育人形を見なかった。どの道のりでも、どんな椅子の上でも、小さなカウチの上にも、居なかった。

× × ×

この部屋は無機質すぎる。

ベッドから見える景色を三百六十度見渡すと、その九割が白で統一されていた。何でも、この色は気持ちを落ち着かせるために、あえてこうしているのだとか。

彩に満ちた窓の外とここを見比べると、いくら落ち着こうとも隔離されている気分になるのは避けられない。もしかしたら担当医が嘘をこさえただけなのかもしれない。

実際、僕の心は今、落ち着いてはいない。

そろそろ時間だからだ、憂鬱な時間が始まる。仮性肥大したふくらはぎを見つめ、ドアが開き、車いすのタイヤの擦れる音がこだまして、僕の名前が呼ばれると、それは始まる。

僕が、木工人形たる所以は、うまく関節が動かなくて、内を向いた足首が鏡に映って、歩くことさえ困難でいることだ。

面白いことに、僕は、本当に壊れた木工人形みたいな成りをしてる。そして僕はこれから、その車いすに乗せられてリハビリへと向かう。

僕の病名は、「筋ジストロフィー」だった。

憂鬱だ。誰かの使い古された励ます声を一々拾い上げないと鼓舞できない心を、どうにか焚きつけて、一歩一歩前に進む行為が。使いまわしの励ましなど、とつくに水気や真新しさを失って、枯れている。僕の拾う枯葉は、枯れた言の葉だ。

憂鬱だ、あの時、意味の分からない笑みを浮かべた情操教

育人形の最後の言葉が「罪だ」で終われそうになっている事態が。とても息苦しい。多分これは、症状が比較的良好いデュシェンヌ型の進行のせいなのだろう。

「どうですか、あの人の調子って」

やっぱり、言葉を繰り出す喉も、腹も、肺も、何もかもが昨日よりも衰退の道を歩んでいる。でも、車いすを押す看護師にそう聞かずにはいられない。

「早紀ちゃんの事？」

彼女の真似で、首肯にも似た俯きを返すと、その若い看護師は少しだけ声のトーンを上げて口を開いた、のだと思う。

彼女に背を向けているから口を開いたかは分からない。腹話術でしゃべっているかもしれない。

「生きているよ。何とか、生きている」

「そうですか。しぶといですね、彼女も」

「そういうこと言わないの」

良かった、と胸をなでおろすと、そんな悪態の一つや二つ出てきてもしようがない。でも、それでも、命をつなぎとめたからって、彼女にとってそれが幸せかどうかなんて、分からない。なんてことはない、多分不幸だ。

「二度も、自殺を試みるんだから。もう、生きているのが奇跡みたいなものだよ」

「そう、ですか」

予想はしていたけれど、情操教育人形はそういう直接的なことは言わなかったから、そういうことには靄をかけてきた

から、いざ言葉になると、昏くなる。

彼女の、下半身麻痺は、一度の自殺未遂の後遺症なのだろう。

「さ、今日も頑張ろうね」

「はい」

リハビリルームに着くと、若い看護師はその整った面を下げたそう言った。ここにも、情操教育人形のようなものはいらぬのだ。

しかも、今日も頑張ろうだなんて、何回聞かされれば済むんだ。今や枯葉を拾って胸に仕舞うのにも一苦労なのに。

ステージ3だったか、4だったか。僕はまた手すりにつかまって、歩みを始める。

今日は、運がよくリハビリの時に付き添ってくれることのある理学療法士の先生もまた枯葉を零した。

一人なんだよね、リハビリって、スポーツで言うと水泳とか陸上とかと同じで、クローズドスキルなんだ、まあ、陸上競技も水泳もしたことなんてないけれど。

一人でいる時間が長くなると、思うことはたくさんある。昔はそれでもなかったけれど、目の前に、情操教育人形が現れてから、自問する時間も、会話する時間も増えた。

だから、今思うことも、情けないけど、そういうことだ。

ふと、右足を踏み出して、膝が落ちた時に思い出す言葉は、おもちや箱についてだった。

「おもちや箱には、ありとあらゆる幸せと、それから零れ落

ちた不幸が詰まっているんだよ。私は、その零れ落ちた方。

でも、零れ落ちた私はもう、幸せに迎合することなんてないの。それって、一番の不幸なんだよ。不幸の不幸たる所以は不が取り除けないところなの」

そう言って俯き、鬱を向いて、綻びを帯びた笑顔を持つ彼女に僕は何を言えたのだろうか。未だ、おもちや箱への希望を抱いたまま、偉大なる箱へと歩を進めたがる僕は彼女に滑稽に映るだろうか。

そんなに不幸を抱えた面を、どうやったら剥がせるのだろうか。不幸を吸い込み、吐き出せなくなった肺を、どうやったら切開できるだろうか。

その答えは、幸せの向こう側に構えるのだろうか、心を超えてその先に行けば得られるのだろうか。

木でできた足で、そこへたどり着けるのかな。能面かぶつた君の笑顔を剥がせるのかな。大きな笑い声を聞けるのかな。その懸念は、ふくらはぎを通してつま先から抜け出るように、僕を通過し、一縷の目的を残して去った。

だから肥大したふくらはぎに一瞥をくると、また一歩一歩踏み出すのだ。どうせ無駄なのだ、これから特効薬が出る話なんて永遠にこないだろうとそう思っても、踏み込まないといけない。

彼女は、時々新緑の励ましを贈ってくれました。それは、凄く悲しい提案だったけど、気が楽になるとはこの事か、という感情を得るものでもあった。

だから、彼女がここにもう一度現れるまではずっと、足前に進めないといけない。それでもしないと、また、木工人は笑われてしまう。どこに向かっているのかと、嘲笑を向けられる。

だから、今日が終わって、明日という名の一日がおどけて今日になっても、またそのリハビリを続け、着実に、進むことのない一本道を歩いた。おもちや箱なんて夢のまた夢の先だ。

彼女の自殺行為が耳に入ってから一カ月がたち、彼女のリハビリ復帰の知らせを聞いてから三日がたったけれど、一向に顔を合わせる機会はやってこなかった。

ふと、彼女と会話を交わしたカウチが目に残り、そこで彼女が笑わなかったことも思い出した。

彼女はいつだってそこには座らなかった。カウチに掛けて話す僕の横に小さな座椅子を持ってきて、そこに腰掛けていた。

話しかけても、それに返ってくる言葉はNOを孕んでいて、いつだって孤立した新緑の葉を手にとって俯いた。

ときに見える華やかな笑顔は、情操教育の賜物で、真つ青な笑顔から真つ赤な言葉ばかり、嘘に塗られた紅葉を吐き出した。

それを僕が追求し、よく聞こうするとはぐらかす。まるで、予防接種の針を嫌うような、病気の前のその針跡を拒むかのような本末が揺らぐ逃避行をその顔に見せた。

なんでだろうか、どうやったら、彼女のその笑い声を聞くことができるのだろうか。下らない夢想家に言葉を求めるほど、彼女は落ちぶれていないのだろうか。

知らないことは、罪だ。

おもちや箱の実情を知らない僕には、彼女の吸い込んだ不幸や、彼女の背負うその景色の色も、話してくれるはずなかない。

そう解っているはずなのに、やはり、どこか悔しかった。日は、もれなく、暮れた。

× × ×

「やあやあ。久しぶり、隣いいかしら」

まるで、出会ったときと同じような笑みで、彼女はカウチの横に座椅子を持ってきてそこに腰掛けた。

悔しさを覚えた二日後の出来事だった。

「そこは、隣じゃない」

少なく見積もってもあと二人は座れるだけの幅が残るシートは埋まることなく、彼女は頑としてその椅子に座り続けた。

だからどうこういうことではない。ただ、その彼女の心境に、同じ土俵ではないんだ、という蔑みがあるのだとしたら悲しい、というだけの、僕の利己的な話だ。

「やー、本当に久しぶりになったね、ごめんごめん」

「また縋ったんだ。また断てなかったんだ」

「そうだね、希望なんて絶たれているのに。絶望だよ絶望。こんな足になった日から、日々への執着も諦念で塗り固まるし」

「ふーん。そう」

「やけに冷たいんだね」

「相変わらず、笑うね」

「そりゃ、大人ですから」

「年なんて変わらないのに」

「おもちゃ箱には培養液が満ちてんの」

「つまらないや」

「そう」

窓から見える景色は、茶に染まっていた。南国つてのは、冬がきても銀世界なんてのがこないんだよね。分かっているでしょ、寒々しさの中に美しさを誇る雪とは違って、ただ、単一的に奥行きのない茶色なんだよ。

俯く彼女は、未だ笑っていた。それは大人だからだという。そうでしょう、君は知っているんだもんね。そうだよね、罪なんて背負っていないんでしょう。そうだよね、君は、大人になるということを知っているんでしょね。

「ねえ、どうなのその調子は」

「分かりませんね、僕は」

「何でさ、自分の体でしょう」

「ですけど、分からないものは分からないんです」

「分かるうとしてないんじゃないの。まったく、私がない

間もちゃんとリハビリしていたの」

「まあ、枯葉のストックぐらいいくらでも」

僕は、そう言って寒さで硬直気味の唇を何とか吊り上げて笑ってみた。彼女も、オウム返しで、季節に合わない涼やかな笑みを浮かべた。

木工人形は、歩いていたんだ。情操教育人形は何をしていたのだろう。多分、僕の知らない苦しみを味わっていたのか。

おもちゃ箱には、いろんな感情があるのでしょ。

それは、サナトリウムだって同じって、知らないのか。

罪だ。

「久しぶりに、サナトリウムの話とか、どう？」

「えー、面白い話なの」

どうだろう、と首をかしげて情操教育人形の揺れない髪をじっと眺めた。ポリ塩化にしてはかなり綺麗だった。僕が持つ狭い見聞の中で一番細くて、絡まり一つ無く、佳麗でいるその髪は、どこの空気が付着して、どれほどの痛みを庇ってきたのだろうか。

「サナトリウムには、王様っていないんだよね」

「実感しているよ。平和だね」

「でも、人はいる。情操教育人形もいて、木工人形も、怪獣だって時折さみしそうに顔を覗かせる」

「そうなんだね、まだ出会ったことなんてないや」

「そして、皆。何かを抱えている。大小それぞれで、視点もバラバラ。だからこそ、悩みを抱えている。生まれながらに

して不完な人が集まっていて、だからこそ、そこに諦念なんて転がっていちゃいけないんだ」

「そうなんだね、中々に生きにくいんだ、この病院も」

「それでね、往々にして悩みつてのはいい方向の思考を生み出さないんだよ」

それはおもちや箱だつて一緒だよ、と目の前の少女は言う。だから、恐らくそうなのだろう。一緒なのだ、僕らも、おもちや箱の住人も。

「だからいろんな感情が転がっている。おもちや箱から派遣でお見舞いにくる人形だっている。それに感化される木工人形だつて、生きている」

「そうかそうか。なら、おもちや箱から派遣でくる情操教育人形が、そのサナトリウムに囚われることも悪くないわけだね」

「そうだと思う、僕は、そう思う。でも、ここだつて、感情つてのは思うようにはいかない。自分の体のこともままならなくて、心なんて到底どうにもできない」

「そうなんだ」

会話は、それで終わってしまった。けれど、それだけではない気はしなかった。それは、彼女が未だ能面をかぶっていたからだ。でも、これ以上、僕に声をかける資格なんてのを見つけれぬ気がしなかった。だつて、僕の声は枯れているから。

誰にでも言える慰めなんて、所詮その程度でしかなく、そ

れを求める人がいるから枯葉も燃えて無くならないのだろうけれど、僕はやはり新緑に手を伸ばしたいし、胸の中には青くていいから桜を咲かせていたい。

「じゃあ、行こうかな」

彼女は、椅子を立った。けれど、僕と同じように、いや、少し違うけれど足の自由は完全とは言いがたく、近くの車いすを掴んでやつの事で座る。

「もうちよつとりハビリしていけばいいのに」

「そんなんじや、漱石にはなれないね」

やりすぎは毒かもよ、とか能面を被る彼女の、声はやけに明るい。僕は、その車いすのブレーキを手で握って、彼女を呼び止めた。

なんてことはできない。

僕は木工人形の名の通りでくの坊で、伸ばす腕もすぐその先でうなだれて、掴むブレーキなんてものはその先に無かった。

でも、確かに、彼女を呼び止める声は響いていた。そして、僕の音は枯れていないことを知ると、少しばかり嬉しくもなる。

「何、どうしたの」

「能面、外してもらおうと思って」

彼女は何言っているんだか、という声が漏れそうに唇を震わして、無風のこの部屋に少しばかり新しい風が吹いていた。

でも、続く言葉なんてのは、やはり、ない。

彼女の言葉を思えば思うほど、軽々しく口にはいけない言葉ばかりが思量の水面に浮かんで、その造形を虹彩に結ぶ。

「何で、自殺なんて、したの？」

「してないよ、生きている」

そういうことじゃないと解っているはずなのに。

「一度目の未遂も聞いた、そしてそれに至る経緯も僕なりに推測した。君の言葉の節々にその名残があったから」

「だとして、何？」

「何も、分からなかった」

放って、そうか、という感嘆にも似た声が届いて、分からない事がまた増えた。でも、僕なりの世界観で、その事態を拓くと、首肯ばかりではない。

情操教育人形が懸念するより、拒むよりもずっと、感情は一過性のもので、君が思うよりも、君は悪くないんだと思う。

誰かに起因することだってきつとあるし、それがきつかけで君が不幸をかぶるなんてこともおもちや箱では茶飯事なのかもしれない。

ならば、その胸に問える鬱を、その痛みを俯いて眺めて、恨めしそうな視線を向けるのはもう、やめにしたらいい。

なんてことは言えるはずがない。

それら全ての痛みも、情操教育人形の一部だという事実を奥歯でかみしめると、苦い血の味だけが巡る。

「君が失った物なんて分からなかった。でも、失ったばかり

でもないんじゃないか、とか思ってしまうんだ」

「そうなんだね」

知らなかった、こんなにも僕の言葉が彼女に響かないこと、僕の想いをぶつけても眉一つ動かさないこと、それが大人だということ、理性的にしていることだけが大人になるって、おもちや箱ではそういうんだってこと。

でも、でもね、そうじゃない。

その、おもちや箱で逃した幸せや、失ってしまった繋がりがばかりを目で追いかけて、つまらない感情に振られて、揺られて歩くのは、勿体ない。そればかりを気にしていたってつまらない。

だから、その先で得たもの。例えば僕が上げた小さな枯れ葉とか、そういうものを指折って欲しい。記憶の片隅にもないかもしれないけど、記憶の瓶を叩き割ってでもその言葉を思い出して欲しい。

そうじゃないと、感情なんてずっと独りのままだ。そうじゃないと、僕が悲しい。

「私はね、自殺なんてしてないよ。君が思うより、私は弱くない」

「じゃあ、何でそんなに悲しい顔するの？」

「それは、悲しいからでしょう」

「もっと、ちゃんと喋ってくれないと分からない。同じソファにも掛けないで、誰かを見下すような笑みばかりを浮かべたって分からない」

「言わなくて分からなかったのに、言ったら分かるなんて傲慢だよ。おもちや箱も知らないでいるのに、何でそう思えるの」

解っているんだ、傲慢だってことも、下らない同情であることも、社会を知らない青年の戯言以下だってことも。

でも、

「君が、正しい」

彼女に言うと、目を見開いた。その目で、何がと問うてくる。

僕は、枯れた喉を唾で潤した。声が出た、何かがそのはずみで潤う感覚が満ちる。

「多分、何もかもが。その足に残る絶望だって、その笑顔に籠る諦念だって、その声に宿る蔑みだって、間違いなんて一つもない」

「そんなことないから、こういうことになるんだよ。死んでも死にきれない、中途半端に残した命で何ができるんだろうね」

「帰りたい場所に帰ればいい」

「そうね、そうかもしれない」

楚々とした笑みを浮かべて、彼女はまた言った。流すように言葉を連ね、僕の言葉なんて本当に耳に届いていないみたいだ。でも、でも、何でそうなってしまうのか分からない。「どこにも、ないんだよ。私は、おもちや箱を出て思った。本物も、たどり着くべき場所も、息絶えるべきベッドも、ど

こにも見つからない」

僕も、それを否定はできない。

この木の体が恨めしいから、この先衰えるばかりの命を抱えながら生きていくことに何の意味も見いだせないし、ここに正解があるのかなんて分からない。

「おもちや箱にも居場所はなかった、ここにだって、私は居られない。居たいと思えない」

彼女の声には蔑みがあった。自分の居たおもちや箱と、今の場所の比較、そしてそれを因として生きるプライド、それらの合わさった声が僕の鼓膜を揺らす。

もし、たった一つでも言葉の新緑を咲かせることができたなら、おそらく彼女にも届くのだろう。

依然、外に見える風景は物哀しく、彼女が思うように動かせない足も、想いも、それらに暗い影を落とす。

車いすに座って、僕を見据える彼女も、カウチに掛けて彼女に焦点を合わせる僕も、多分大して変わらない。

ならば、ならばかける言葉は。連ねるべき文句は、先へと続くメッセージは、何だろうか。この僕に、彼女から零れ落ちた生への希望を注ぐことができるのか。

多分、今、言うべき言葉は。

「おもちや箱に、帰らないといけない」

僕はそう漏らして、硬い木でできた右足を前に、一つ、進めた。

うまく力も入らないし、何にも掴まれない状況でこれ以上

は進めない。何かに縋っていないと、進めない僕だけ、確かに、言葉はある。

「生きて欲しい」

ちやんと、もつと言つてよ。腹から声を出して、声張って、肺にたまつた不幸を吐き出すように。

そう、心の中で続ける。声にならずとも、情操教育人形は、人の意を汲むのがうまいのだから。それゆえの苦しさもあるだろうけれど、解ってくれるはずだ。

だから、俯いて、希望の籠つた視線を閉ざすことはもうしないで、その目をちやんと見開いて。

君が、自分自身を嫌う気持ちにはよく分かる。僕だってそうだ、自分のこの体の素材が憎くて仕方がない。

ポリ塩化ビニリデンでできた髪を切りさきたくてもがいてしまう気持ちも想像できるし、その喉を切り開いて話せないことも、腹を割って叫ぶことができないその諦念も絶望もすべて君が正しい。

自分を嫌い、過去を憎み、明日を軽んじる君の瞳に映るのが、絶望と諦念だとしても。

「どうか、感情の向こう側に行こうよ」

「おもちゃ箱はもういいの？」

彼女は、目尻に物理的感情の欠片を漉せて、首をかしげる。僕はいいんだよ、とか小さな声で漏らすと、ふくらはぎの力をふつと抜いてまた同じ場所に座つた。

「分かつたよ、勝手にすればいい」

僕が座ると、車いすの彼女はこちらから目を背けて口から絞り出すように言った。

しかし、その顔は笑つてなどいかなかった。

それが、正しいのだと思う。

その時、笑つていなかったけれど、決して嬉しそうでもなかったけれど、むしろ不機嫌そうに憤りをその頬に映したけれど。

その後にくつたため息からは、不幸がいっぱいに吐き出され、その表情にはもう、能面も、その他大勢のような人形の面影もなく、ただの、悩める少女だった。

× × ×

「おもちゃ箱はどんなところなの？」

「ここと、大して変わらない。皆同じように好きでもない咎を背負つて、謂れもない感情をぶつけられながら生きている」

「そっか、苦しいのかな」

「そんなときもある」

情操教育人形は、僕の車いすを押しながらそう教えてくれた。廊下内には、彼女の履くハイヒールの音が響いて、僕の声は絞られながら出てきた声だった。

「そんなときだけじゃない。誰かの言葉で救われることもあるし、皆が皆枯れているわけでもない。生きづらいただけではない場所だよ、おもちゃ箱は」

「そうなんだ。いいね、情操教育人形も元気そうだ」

「そりやお陰様でね」

「もっと感謝してもいいんだよ」

「木工人形も、元気そうじゃん」

「それでもないよ、と言いたい言葉をグツとこらえた。

彼女は厳しいリハビリの末、日常に戻ることができた。さすがに多少の後遺症と生活のしづらさはあるらしいけれど。

反して、僕の命は徐々に擦り減って行った。未だにベッドに寝た切りになる日は今か今かと心臓を持って余しながら車いすに揺られる日々を連ねている。

「今もおもちゃ箱に行きたいの？」

「いや、もういいよ。僕にとってはサナトリウムだっておもちゃ箱に勝るとも劣らない楽園だからね、生きにくいけど」

「生きにくいのは同じだよ」

「そうだね、同じだ」
光沢のある廊下と、ゴム製のタイヤの擦れる音が、僕の耳朶を叩く。

ハイヒールは擦れ音に和音を重ねる。

僕が、今向かっている先は病室だ。自分の寝床があつて、自分の居場所がある。何年たつても、ここから出られることなんてできないのかもしれない。

「いつだって、おもちゃ箱は遠い夢の中で靄を被っている。それは仕方ない。」

だから、彼女の笑みを崩さないよう、壊さないよう、精い

っぱい笑って見せた。

「おもちゃ箱で挙式するんだって？」

上手くできているかは分からない、木でできたお面は思うようには動かないのだから。

「ま、私も大人になったもんで」

「そう。良かった、元気になってくれて、おめでとう」

「ありがとう」

僕は、そのうち死ぬ。それは病気のせいではなくて、老いて時間に命を食われるからにすぎない。

でも、それは彼女とて同じことだ。

いつかは死ぬのだから、前を向いていて欲しいというのはもちろん傲慢で、叶うものではないのだろう。

だから、彼女は一時の不幸で命を断とうとしてしまった。それは見えていないからでもなく、自分の生きる世界がすべてだと錯覚してしまう、若さを纏った病気のせいだ。

病気が怪我と違って伝播する。だから、僕にも彼女のその病気が宿ってしまった。今、この場所、この瞬間、向かう先が僕のすべてに見えて仕方がない。

それが、生まれ持ってしまった病気のせいだとしても、僕は未来に活路を見出さないといけない。この先も歩み続けなといといけない。

おもちゃ箱を目指して、枯葉を拾って、自分の足を鼓舞して、いつか、この病気を持った全人類がおもちゃ箱に迎合する未来を信じて、歩いて行かないといけない。

僕だって、検査を受けるまでは、生まれた瞬間だけはおもちゃ箱にいたのだから。

「おもちゃ箱に帰らないといけない」

情操教育人形は、その声を聴いてバカじゃないの、と揶揄した。もう、無理に笑うことはないけれど、その頬は弛緩しきっていた。

僕は、木製のか細い腕を伸ばして病室のドアを開く。

木工人形として生きて二十四年、この先に、僕の生きる箱がある。

開けっ放しの窓が、涼風を誘う。

白色のカーテンが靡く。

明日も、明後日も僕はこの部屋で目が覚める。

でも、不思議と、いやな気はしなかった。

木工人形と、情操教育人形は、声をあげて笑った。

講師からの一言

贈る言葉

立石富男

今年の講座はこれまでの中で一番スムーズにいった気がする。講座生の原稿が毎回進んでいたのが楽しみだったし、アドバイスもしやすかった。作品を仕上げられるだろうかと心配することがなかったのは、講座生それぞれに前向きな姿勢が見られたからである。その努力を評価したい。

講師としての喜びは、瑞々しい感性に出合うことである。小説としては未熟であっても、時々ハツとする文章に出合うことがあった。自分では決してこんなふうには書かないだろう、こんな言葉は使わないだろうという表現……それは破綻ではなく十代ならではの冒険だと受け止めた。しかし作品のことで言えば、まだ物足りない。もっと深められたはずだということがある。ストーリーの展開だけを重視せず、人物の動きや会話や状況も言葉を吟味して書いてほしい。学業との両立で余裕がなかったかもしれないが、原稿とじっくり向き合っていたならという思いがしてならない。今後はもっとたくさんさんの本を読んで語彙を増やし、何を書き何を省くか、表現とは何かということ覚えてほしい。

ともあれ、七カ月間講座に通い、一つの作品を仕上げた。作品を書き上げるというのも才能の一つである。これを活かすかどうかは自分次第。将来どういう道に進んでいくかわからないが、この言葉を贈りたい。鉄は熱いうちに打て！

書くことと読むことは表裏一体

出水沢藍子

高校生の清々しい夏の制服が始まるこの文芸ゼミナールは、凛々しい冬の装いで最終回を迎えます。その間8回、日曜日の4時間が生徒さんたちとの交流の時間。毎回、今日はどうな作品に出会えるのか、あの小説はどこまで進んだらうかと、楽しみにしながら県立図書館に向かいます。

自作を音読することは、この講座の大きな特徴です。はじめは躊躇していた生徒さんも、次第に慣れていくのがわかります。声に出して読むことで文章の流れを確認したり、状況描写の過不足を見つかったりすることができた、という実感がつかめてくるからでしょう。

黙読、音読に限らず、自作を読み直すことは大切な作業です。書く力は読む力に等しいといえるかもしれません。

作家の保坂和志は、著書『書きあぐねている人のための小説入門』で、「小説家は書いている時間より、読んでいる時間の方が長い」と書いています。ここで彼がいう読む時間とは、他の本を読むということではなく、自分が書いた原稿を読み直す時間のことです。少し書いては読みなおし、段落を作ったらまた読み返す。

納得がいくまで、何度もこの作業を繰り返してはじめて、自分以外の人に読んでもらえる文章になる。億劫で手を抜きがちですが、このことを胸に刻んで、講師も精進精進！



講座の様子



閉講式



座談会（特別講師：伊東 潤氏）



講座



講座開催日

回数	月・日	曜日	時間	回数	月・日	曜日	時間
第1回	7月1日	日	12:30~16:30	第5回	10月27日	土	10:00~16:00
第2回	8月5日	日	12:30~16:30	第6回	11月18日	日	12:30~16:30
第3回	8月26日	日	12:30~16:30	第7回	12月23日	日	12:30~16:30
第4回	9月23日	日	12:30~16:30	第8回	1月27日	日	12:30~16:30

平成三十年度 編集後記

海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール受講生作品集「潮音く若人の樹く」が完成しました。今年度受講生の七か月間の成果をまとめた作品集です。

受講生は、県内講師のお二人の先生方や特別講師伊東潤先生に御指導をいただいたり、互いの作品について意見交換をしたりしながら、完成に向けて精一杯努力してきました。

今回受講生が完成させた作品は、本格的に小説の基礎を学びながら書き上げたものです。今後も学んだことを生かし、第二作・第三作と書き続けることで、書く力を更に伸ばしていくことと思います。

この作品集が、受講生の皆さんにとって大きな宝となるとともに、県内の高校生にとって、「こんな作品を自分も書いてみたい」という目標となることを願ってやみません。

平成三十年度海音寺潮五郎記念
文芸ゼミナール受講生作品集
潮音 く若人の樹く

平成三十一年三月

編集・発行

鹿児島県立図書館